

## ジョン・F・ケネディと1963年仏教徒危機 ——ベトナムにおける災厄の終わりと始まり——

松岡 完

### はじめに

アメリカによるベトナム介入の長い歴史の中で、1963年は大きな分水嶺の1つとされてきた。第1に、この年11月22日、思いもかけぬ大統領暗殺によって、1961年以来ケネディ (John F. Kennedy) が展開してきた介入拡大政策がジョンソン (Lyndon B. Johnson) に引き継がれた。実際にアメリカが大規模な戦争に突入するのは、1964年夏のトンキン湾事件、翌年春の恒常的北爆開始、海兵隊派遣などの後のことである。だがケネディからジョンソンにたいまつが渡された時点で、後年の災厄の下地はすでに完成しており、ベトナム戦争の前史ないし基礎固めの段階が完了したと多くの者が考えている。<sup>1</sup> アメリカに敵対していた中国や北ベトナム (ベトナム民主共和国) の視点からも、同様に1963年秋が大きな分岐点だとされる。<sup>2</sup>

第2に、にもかかわらずこの時までには、痛手を被る前にベトナムから手を引ける絶好の機会がアメリカの眼前に出現していた。たとえばドゴール (Charles de Gaulle) 仏大統領やカンボジアのシハヌーク (Norodom Sihanouk) 殿下らはベトナムないし東南アジアの中立化を提案していた。アメリカがその防衛に尽力する南ベトナム (ベトナム共和国) では、指導者ゴ・ジン・ジェム (Ngo Dinh Diem) とその弟ニュー (Ngo Dinh Nhu) が、米軍の引き揚げを要求した。彼らは、国内の反政府勢力である民族解放戦線 (National Liberation Front、西側の蔑称ではベトコン Viet Cong) や北ベトナムとの和平交渉を密かに進めてもいた。ケネディが米軍事顧問約1万6000人のうち1000人の撤退を発表したのもこの年10月のことである。だがこうしたすべてがケネディ暗殺によって突如断ち切られたと考える者は少なくなく、彼らはいまでも「ケネディが生きていたら……」との夢に身を委ねる。<sup>3</sup>

そして第3に、ケネディ不慮の死の3週間前、南ベトナムで軍部クーデターが発生した。ケネディ政権はジェム政権の打倒とジェム、ニュー兄弟の死に関与——少なくともそれを黙認——し、ズオン・バン・ミン (Duong Van Minh) 将軍を中心に登場した軍事政権の命運とアメリカの威信を一体化させた。しかも新政権のもとで南ベトナム情勢がいつそう混迷の度を強めた結果、戦争が一気にアメリカ化した。1963年末、英外務省高官が述べたように、ベトナムでの戦いが「まったくアメリカ人の手によるショー」となったのである。<sup>4</sup> 国務省でベトナム問題を扱い、これほどインドシナ問

題に通暁するアメリカ人はいないといわれたカッテンバーグ (Paul M. Kattenburg) によれば、1963年11月1日のクーデターこそ「決定的に重要」な出来事だった。それはベトナム戦争史上アメリカが犯した「最大のミス」だったと、1962年まで米中央情報局 (CIA) サイゴン (現ホーチミン) 支局長を、そしてのち CIA 長官をつとめたコルビー (William Colby) はいう。1963年8月までサイゴン駐在の大使だったノルティング (Frederick E. Nolting, Jr.)。ケネディ政権が編み出した「戦略村計画 (Strategic Hamlet Program)」の責任者となったフィリップス (Rufus Phillips)。いずれも、クーデターが「手ひどい誤り」だったとのちのちまで批判する。<sup>5</sup>

第4に、ベトナム戦争は「マクナマラの戦争」と異名をとったが、そのマクナマラ (Robert S. McNamara) 国防長官は、クーデターとジェム暗殺直後の混乱期こそ、アメリカが撤退する好機だったと後悔の臍を噛んでいる。のちにデタント (Détente) 外交の立て役者となるキッシンジャー (Henry A. Kissinger) も、ジェム政権転覆の「直前か直後」が「アメリカが、耐えられる……コストでベトナムから撤退できたであろう最後の瞬間」だったと見た。コルビーは「ジェムとケネディの喪失が一体となって、のちの歳月のコースを決めた」という。ノルティングによれば、ジェム政府の転覆と、その後の「アメリカの」戦争との間には明確なつながりがあった。<sup>6</sup>1963年11月は、アメリカの介入拡大への道筋の中で決定的な時期となったのである。<sup>7</sup>

とすればこのクーデターはベトナム戦史上重要な関心事とならざるをえないし、クーデターそのものに劣らず重要なのは、なぜジェム政権が転覆されなければならなかったかだろう。その直接の原因、つまりケネディ政権にクーデター容認もやむなしと判断させたのが「仏教徒危機 (Buddhist Crisis)」である。それはケネディが2年10ヶ月の任期中、最後に直面した外交的危機であり、アメリカがベトナムの地で経験した最初の大きな危機でもあった。<sup>8</sup>マサチューセッツ工科大学からホワイトハウスのスタッフに加わり、その後国務省政策企画局長となったロストウ (Walt W. Rostow) は、それが「ベトナム史上でもアメリカ史上でも大事件」だという。第1に戦争の展開を逆転させ、第2にクーデターの序曲となり、第3に南の紛争に北ベトナムを誘い込み、第4に米軍の大規模な投入を招いたからである。<sup>9</sup>

そもそのきっかけは1963年5月8日、ベトナムの古都フエ (ユエ) を舞台に発生した、比較的小さな仏教徒弾圧事件だった。ところがCIAの分析ではそれが「国家的危機に点火」した。コルビーによればその火花が「爆発」を生み出し、それが「ほぼ即座に世界規模の出来事」に転じたのである。<sup>10</sup>ジョンソン大統領の回顧によれば、この事件は「長く、厳しい抗議運動の夏」をもたらした。とりわけ首都サイゴンは「煮えたる油鍋」も同然となったとさえ表現される。<sup>11</sup>

1954年のジュネーブ会議にも参加したCIAの分析官クーパー (Chester L. Cooper) は、仏教徒危機の発生とともに、ジェムとニューの放逐と死につながる「悲劇の幕が

上がった」と回顧する。<sup>12</sup> 仏教徒危機には、この政権が抱えてきたさまざまな問題が、そしてこの地で国家建設をめざすアメリカが直面する困難が具現化されていた。<sup>13</sup> 自由世界の守護神たるアメリカと、そのアメリカが共産主義の脅威から断固守ろうとした南ベトナムの関係険悪化という側面からしても、それは大きな転換点だった。<sup>14</sup> サイゴンの米大使館で広報を担当していたメクリン (John Mecklin) やクーパーが異口同音にいうように、1963年の両国関係はまったく「立ち往生」ないし「行き詰まり」と呼ぶべき状態だったからである。<sup>15</sup>

クーデターではなく、それに先だつ仏教徒危機の勃発こそ、アメリカがもしこの国から手を引こうとするのなら絶好の機会になったはずだともいわれる。カッテンバーグによれば、とりわけ危機の後半、つまり1963年8月後半からの3ヶ月ほどが「アメリカがベトナムで存在を続けるかどうかを組織全体として体系的に検討する、最後の、そして最良の機会」だった。<sup>16</sup> だから本当に重要なのは、「ケネディが生きていたら」ではなく、「もし1963年後半にアメリカが別の政策をとっていたら」なのだとさえいわれる。<sup>17</sup>

そこで本稿では、政府と仏教徒の対決という形で突如ベールを脱いだ南ベトナムの危機を対象として、ケネディのベトナム政策について考察を試みる。まずケネディが相手としたジェム政権の統治がどのような形で仏教徒危機の背景となったかを検討する。ついで危機の初期(5月～6月前半)、中期(6月後半～8月中旬)、後期(8月下旬)、末期(9～10月)のそれぞれについて、南ベトナム情勢とケネディの対応を跡づけながら、そこに表れたいくつかの問題点を指摘したい。

## 第1章 政治危機への底流

### 1. あふれるジェム称賛の声

1961年1月、ケネディがアイゼンハワー (Dwight D. Eisenhower) 政権から南ベトナムへのコミットメントを引き継いだ時、ゴ・ジン・ジェム政権との本格的な摩擦の時代が始まった。その直前から南ベトナムではゲリラ戦争が激化していた。ケネディは、みずからが上院議員時代の1956年に「われわれの子供」と呼んだこの国の防衛を揺るがせにはできないと判断した。その結果、米軍事顧問の増派など戦争遂行の努力を強化すると同時に、戦争の当事者であるはずのジェム政権に対し、勝利実現に必要とされるさまざまな改革を求めたのである。<sup>18</sup> だがのちにベトナムでの平定作戦の責任者となるコマー (Robert W. Komer) にいわせれば、この「ベトナム政府のギアを上げさせる」試みは、両国関係の「不毛な出来事」の歴史に新たな1ページを加えたにすぎなかった。アメリカの援助増に見合う改革は、大部分が空手形のままだったからである。<sup>19</sup>

しかし1962年初め、ケネディは隣人で『ニューズウィーク』編集長のブラッドリー (Benjamin C. Bradlee) に向かって、「ジェムはああいう男だが、いまのところ彼以上の者はいないよ」と語っている。ケネディの特別補佐官となった歴史学者シュレジンガー (Arthur M. Schlesinger, Jr.) によれば、1962年をつうじてサイゴンの米大使館や軍事援助司令部 (Military Assistance Command, Vietnam) からは、「明らかに難物ではあるが政治家たる資質を備え、いずれにせよかけがいのない人物に指導された政権が着実に進歩をとげており、農民の心を勝ち取り、農村を平定し、統治の安定を回復しつつある姿」が報告されていた。国家安全保障会議の一員となったフォレストル (Michael V. Forrestal) も、1962年のジェムについては「誰もがかなりよいと考えていた」と述懐する。<sup>20</sup>

ケネディの上院議員時代以来の側近ソレンセン (Theodore C. Sorensen) によれば、ケネディ政権発足当時の南ベトナムが抱えていた問題点とは「想像力のある、活力に満ちた指導者の不在」だった。だが1963年初め、フォレストルとともにベトナムを視察したヒルズマン (Roger Hilsman) 極東担当国務次官補は、1年前に比べてジェムがより平靜で、自信に満ち、政治家らしくなっていると力強く感じた。ラスク (Dean Rusk) 国務長官はのちに、ジェムは「献身的なナショナリズム」の持ち主だったと回顧している。ロッジ (Henry C. Lodge, Jr.) は1963年8月に新大使としてサイゴンに赴任し、結果的にジェム放逐の中心的な役割を果たした人物だが、それでもジェムの勇気と愛国心を高く評価することにはやぶさかではなかった。<sup>21</sup>

ジェムはみずから「民主主義の下部構造」と好んで呼ぶものを確立しつつあるように見えた。1月、米統合参謀本部が南ベトナムに派遣した視察団は、1000を超える村落で選挙が行われるなど、南ベトナムの草の根ならぬ「コメの根」で民主主義が着実に進展していると報告した。4月、ラスク国務長官は「ベトナムに賭けられたもの (The Stake in Viet-Nam)」と題する演説で、「民主的な政治プロセスの枠組みが『コメの根』計画をつうじて育成中」であり、「人々の同意にもとづく立憲システムへの着実な前進」も見受けられると誇らしげに語った。<sup>22</sup>

4月初め、南ベトナムでアメリカに協力していたイギリス人のゲリラ戦専門家トンブソン (Robert G. K. Thompson) がワシントンを訪れた。彼はケネディに向かって、国土の大部分を占め、戦争の帰趨にとっても重要な農村部でジェムが農民の心をつかんでおり、万一ジェムが消えるようなことがあれば「6ヶ月以内に」戦争に負けるかもしれないと伝えている。ジェムへの「コメの根の支持は大きかった」とノルティンゲも述懐している。<sup>23</sup>

幸い、南ベトナムの経済全体が上向き傾向にあった。コメの生産は1961年の落ち込み (約461万トン) から1963年には約533万トンにまで回復した。米国務省高官があいついで発表したところによれば、1961年には事実上止まっていた輸出も、1963

年にはほぼ30万トンに達する見込みだった。軍事援助司令部を率いるハーキンズ (Paul D. Harkins) 将軍がジェムに書き送ったように、たとえ時間はかかっても、南ベトナムが将来「繁栄し、誇りを持った、民主的な共和国」として「アジア全土のモデル」となることさえ期待された。<sup>24</sup>

1961年にケネディ政権がジェム政権にさまざまな改革を要求した結果、アメリカと南ベトナムの関係は険悪なものとなっていた。しかしアメリカの介入拡大策が奏功して勝利の見込みが増すにつれ、両者の関係も改善されていった。そして「アメリカの大規模介入」と「米側とベトナム側要員の緊密な協力関係」によって戦況が著しく好転するという、いわば正の循環が認められていた。アメリカ人の目から見る限り、まさに前途は輝いているように見えたのである。<sup>25</sup>

## 2. 「ジェモクラシー」の実態

だがジョンソン (U. Alexis Johnson) 国務次官代理 (のちサイゴン駐在代理大使) によれば、ジェム政権は「広範な政治的支持の欠如」という恒常的な脆弱さを抱えていた。その統治の誤りこそが国内のゲリラ戦争を生み出した原因であり、またその失敗がこれ以後の戦争の展開に決定的な影響を与えたと指摘されている。<sup>26</sup>

ベトナム戦争報道でのちにピューリッツアー賞を受けた『ニューヨーク・タイムズ』記者ハルバースタム (David Halberstam) によれば、問題は第一次インドシナ戦争 (1946～54年) にまでさかのぼる、じつに深い根を持っていた。だから1954年7月、ジェム政権の成立そのものをアメリカの南ベトナム政治支配の始まりだけでなく、ベトナム戦争の起源とする見方もある。<sup>27</sup>

ジェムの統治は「ジェモクラシー (Diemocracy)」の異名をとった。<sup>28</sup>「民主主義 (Democracy)」より1字多いだけである。だがその最大の特徴は、徹底した反民主主義にあった。ジェムは、国家とは国民の上に立つ存在で、政府や指導者を尊重するのは国民の義務だと信じていた。国民の支持を求めるといった考え方など、「アジアの生活とはまったく関わりのない、西欧風の幻想の1つ」(シュレジンガー) でしかなかったのである。ニクソン (Richard M. Nixon) 元大統領は、ジェムがアメリカ的民主主義につねに懐疑の念を抱いていたと指摘している。ジェムの弟ニューも1963年4月、報道・結社・集会の自由や民主的な諸制度も先進国では結構だが、「戦時にある南ベトナムのような低開発状態」のもとでは「他の統治形態が必要」なのだと言っていた。<sup>29</sup>

民主主義に代わる統治哲学も用意されていた。それが「人位主義 (Personalism)」である。ジェムは『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』のヒギンズ (Marguerite Higgins) 記者にこう説明している。それは国家が個人の福利や自由のために存在するという単純きわまりない哲学だ。つまり、個人が国家のために存在する共産主義の対極にある考え方なのだ。<sup>30</sup> だが実際には、1930年代のフランスに起源を持つ思想を

ジェムとニューの兄弟、とくにニューが都合よく改変したものだ。だから非仏教的なイデオロギーを警察国家的手法を用いて多数の仏教徒に押しつけたのだと、ジェム打倒の一翼を担ったチャン・バン・ドン(Tran Van Don)将軍は批判する。実際にジェム統治下では、国家に対する忠誠、服従、犠牲などが最高の美德とされていた。<sup>31</sup>

たしかに南ベトナムには選挙はあった。だが選挙運動じたい政府に管理され、事実上対立候補の存在は許されなかった。選挙で選ばれたはずの官吏が選挙があったことを知らないということさえあった。<sup>32</sup> だからそれは、アメリカがその専制ぶりを糾弾する「北ベトナムの共産主義者さえも想像できないようなしろもの」だったとハーバースタムはいう。その結果生まれたのは、メクリンが命名した「ゴム印議会(Ruber-stamp national assembly)」、つまり唯々諾々と政府の提案を承認するだけの立法機関だった。<sup>33</sup> 地方ではベトナム伝統の村落単位の選挙が逆に廃止され、ジェムが村長を任命した。それは農民の怒りを買ったとのちに権力を握ったグエン・カオ・キ(Nguyen Cao Ky)将軍はいう。<sup>34</sup> もっともジェム自身は、自分を批判する者はベトナム独自の人位主義的な民主主義を理解していないのだと片づけていた。米国内にも彼の統治を「ワンマン民主主義」、つまり彼独自の民主的統治だと弁護する者がいた。<sup>35</sup>

ジェムは1950年代末以降、反政府ゲリラの活動に対処すべく警察国家体制を強化していた。チャン・バン・ドンによれば、恣意的な逮捕も、集団キャンプへの収容も、ゲシュタポもどきの秘密警察の活動も、反政府勢力を対象とする暗殺も、すべては「共産主義者の浸透を抑圧」するためだと正当化された。<sup>36</sup> しかしその現実の対象は、むしろ非共産主義的な政府批判勢力だった。権力の維持・拡大にとって障害とみなされた者すべてに「共産主義者」の烙印が押されたからである。<sup>37</sup>

すさまじい言論弾圧は、ベトナム人の口は「話すためでなく、食うためにだけ」開くと、の擲揄を生んだ。複数の秘密警察組織が手柄を競い合うように人々を逮捕し、投獄し、処刑していた。1962年、獄中の政治犯は2万人を数えた。<sup>38</sup> 弾圧を支えたのが南ベトナム版「治安維持法」「ファシスト法」などと異名をとった「10/59法令」(1959年制定)である。国家の安全を侵害する者は、その意図ありと認められただけで軍事法廷によって死刑もしくは終身刑に処せられた。<sup>39</sup> 共産主義者だけでなく、政権に刃向かうありとあらゆる勢力が取り締まりの対象となった。<sup>40</sup>

ジェムは「東洋的独裁者」と呼ばれ、その統治は「王なき絶対君主制」「中世的独裁国家」などと形容された。<sup>41</sup> ハーバード大学教授から駐インド大使となったガルブレイス(John Kenneth Galbraith)は1961年末にサイゴンを訪れた経験を持つが、ジェムが首都を離れる時には閣僚すべてに見送りとお出迎えの義務があったと書き記している。グエン・カオ・キによれば、閣僚といえどもジェムに背を向けることはまったく許されず、その面前からは必ず後ろ向きで退出した。<sup>42</sup>

ジェムは国民の旅券や査証のすべてにみずから署名し、市場の駐車場問題にまで関

与し、議会公文書館の空調導入について断を下した。<sup>43</sup>あらゆる権力をその手に抱え込み、効率的な統治に不可欠な権限の委譲を行わずにいることがジェムの欠点だと、彼に同情的なノルディング大使もよくわかっていた。ヒルズマンとフォレスタルは1963年早々、ジェムおよび一族への権限の集中こそが「本当の問題」なのだとケネディに報告している。北の共産主義の脅威からみずからを守るために、南ベトナムはそれと同じ手法に依存しているとのだと批判された。<sup>44</sup>

だが北と南の間には1つ、重要な違いがあった。メクリンがいうように、ジェムはハノイの指導者ホー・チ・ミン (Ho Chi Minh) とは対照的に、「カリスマ的な魅力」を備えた、民衆に人気の指導者でも「効率的な行政官」でもなかった。政府の運営方法などろくに知らず、効率とも活力とも無縁の独裁者だったのである。<sup>45</sup> 官吏の腐敗は日常茶飯事だったが、ジェムは何の手も打てなかった。だから「アメリカ人が本当にわれわれを助けたいのなら、なぜ腐敗した役人に金を渡し、盗ませるのか？」という農民の問いに、アメリカはまったく答えられなかった。<sup>46</sup>

CIAの分析によれば当のジェムは、自分が「生存のための戦いのさなかにあるこの国を率いていくだけの徳を唱えた唯一の人物」だと確信していた。<sup>47</sup> そもそもジェムは、祖国を救うために神が自分をベトナムに遣わしたのだと信じていた。だから「神と正義の国」の確立に向けて邁進したのである。ジェムとニューの兄弟は、みずからの正義を確信し何のためらいもなく人々を処刑する中世の異端審問官のようだったと、チャン・バン・チュオン (Tran Van Chuong) 駐米大使 (ニュー夫人の父) は述べている。<sup>48</sup>

ジェムの資質や使命感は「頑強」「献身的」という世評を勝ち取るうえでは役立った。それが戦争遂行に資する間はよかったが、年を追うごとに、その頑迷固陋ぶりに磨きがかかった。1963年にジェムと会ったCIAのクーパーは帰国後、大統領補佐官のM・バンディ (McGeorge Bundy) に「彼が健康か病気か、まったく正常なのか正気を失いつつあるのかはわからなかったが、もし私が彼の母親ならおおいに心配するところだ」と語っている。<sup>49</sup>

オーストラリア人記者ウォーナー (Denis Warner) にいわせれば、「話すが、けっして聞かない。目にものは映るが、けっして見ない」というのがジェムのやり方だった。あるベトナム人はこう語った。「何ひとつ知らない」ジェムは「石の壁の向こうに住む修道僧」も同然だ。「懺悔を通じて世俗について学ぶ僧侶」のほうがまだ。一族の1人によれば、ジェムと波長を合わせるなど「不可能」なことだった。「西洋人にとってジェムはたんに別の文化、別の半球の出身というだけではない。別の惑星から来たようなものだ」からである。<sup>50</sup> しかも、イエスマンたちに囲まれた——あるいはみずからを囲ませた——ジェムの脳内に形成された現実、国内、とりわけ「地方で、そして戦闘部隊の中で実際に何が起きているか」(クーパー) から著しく乖離していた。<sup>51</sup>

ジェムが市場を視察すれば、値札は急いで半額に書き換えられた。インフレを彼の目から隠すためである。農村を訪れば、たわわに実をつけた果樹がその間だけ近在の村から移植された。道路脇には街路樹として、根のない木々が一時的に植えられた。これらはジェム後に権力を掌握した者たちの言として多少割り引かなければならないが、イギリス人であるトンプソンも、ジェムには自分自身で現実を見つける方法がなく、不快な現実から完全に遠ざかっていたと回顧する。それが国民の士気を低下させ、政治状況の悪化を生んだのだと指摘されている。<sup>52</sup>

もともとベトナム中部（アンナン）出身でカトリックであるジェムの一族は、仏教徒が多数派を占める南ベトナム、とくにサイゴンを含む南部（コーチシナ）ではまったくの根なし草だった。何の基盤もないところに落下傘で降り立ったも同然だったという。しかもベトナム南北分割の2年後、1956年に予定された再統一選挙を拒否したことで、国民の目からも統治の正当性を失った。<sup>53</sup>

ハルバースタムは当時南ベトナムの政府と民衆の関係を、「せいぜいお互いに冷淡、無関心ともいえる状態」だったと述べている。マクナマラは、ジェムもその周囲の人間も、そして統治構造全体もそろって「南ベトナム国民とのつながりを欠いていた。彼はけっして民衆との絆をつくりあげなかった」と述懐する。<sup>54</sup> その結果、共産主義者が望んだ以上に、ジェム自身が南ベトナムの社会を四分五裂させてしまった。ソレンセンがいうように、ケネディは「人民に支持されない政権」という「最悪の選択」に行き当たってしまったのである。<sup>55</sup>

### 3. 黒幕と女魔術師

ジェム政権当時、南ベトナムで立身出世するには「3つのD」が必要だといわれた。「ダオ（Dao 宗教）」「ディアフン（Dia Phung 地方）」「ジェム（Diem）」である。ジェムと同じカトリックであること。中部出身者であること。そして一族と何らかの関わりを持つことが大事だった。<sup>56</sup> 家族の絆や血縁、郷里や出身地のつながりが重視されるのはベトナムの伝統であり、なにもジェムらに限られたことではない。しかし、1962年のラオス中立化に貢献し、その後政治担当国務次官となったハリマン（W. Averell Harriman）は、ジェムが「悪影響を及ぼす家族に囲まれていたことが不運」だったのだという。<sup>57</sup>

さまざまな悪影響のうち最大のものが、弟のニューだった。ジェムが自分の殻に引きこもるにつれニューの影響力が拡大し、その勢威はジェムをしのぐほどだった。CIAの分析によれば、1963年までにはニューが政権の「鍵となる役割」を担うようになっていた。<sup>58</sup> 国会議員は彼の承諾なしには登院すらできなかった。閣僚、将軍、赴任先から帰国した大使は、ジェムに会う前にまずニューに会うことさえあった。<sup>59</sup> たとえジェムが何かアメリカにとって好ましい計画を打ち出しても、ニューの意に添

わなければ途中で消え失せたとグエン・カオ・キはいう。サイゴンでもワシントンでも、ニューはジェムの「第2のエゴ」ないし「黒幕」と目されていた。<sup>60</sup>

ニューはいくつもの情報組織をつくりあげ、その結果ジェムは「あらゆるものを、ニューの目を通して見た」とハルバースタムは述べている。ニューはときに各地の軍司令官に、ジェムには嘘の報告をするよう指示していた。<sup>61</sup> いたるところに張りめぐらされた秘密警察の網の目を支配するのもニューだった。<sup>62</sup> 彼の私党である人位勤労革命党、通称「カンラオ (Can Lao)」は、政府や軍の内部で不満分子を摘発し、国民からは非公式な税を取り立てた。<sup>63</sup> ニューがやはり支配する共和国青年団について、ジェムは8月末、ロッジ新大使に向かって「新たな、活力ある、民主的な世代を象徴する」存在だと語ったことがある。だが100万人の構成員を数えるそれは、事実上の「武装官吏」としてすさまじい弾圧の一翼を担う存在であり、地方では民兵も同然の機能を果たしていた。<sup>64</sup> こうした複合的な「監視システム」が、ニューの「独自の権力の源泉」となっていた。<sup>65</sup>

ノルティンクがいうように、ニューは「強力な反共の愛国主義者」だったかもしれない。1962年の情勢好転も、その力に負うところが大きかったとコルビーは評価する。<sup>66</sup> だが「自分と家族の生存に何よりも関心」(ロッジ)を抱くこの人物は、国民の欲求などどこ吹く風だった。<sup>67</sup> チャン・バン・チュオン駐米大使の言葉をフォレストルが伝えたように、ニューは有能な人材をことごとく政府から追放していた。彼は不必要に多くのベトナム人を遠ざけ、人々の憎しみを一身に集めていたのだと、ジェム政権に好意的だったヒギンズも認めている。<sup>68</sup>

もう1つ、ジェム政権が内に抱える負の存在がニューの夫人、チャン・レ・スアン (Tran Le Xuan) である。ジェムが独身のため、彼女は大統領夫人の役割を演じていた。しかし彼女は、アメリカの漫画に登場する猛烈な悪女の名から「ドラゴン・レディ (Dragon Lady)」と呼ばれた。マクナマラ国防長官はその回顧録でニュー夫人が「真の女魔術師」だったと述べている。<sup>69</sup>

彼女には飽くなき権力欲があった。閣僚や軍首脳から下級官まで誰彼なく電話をかけては命令を下した。「気の強い主婦が家庭を牛耳るように」(ハルバースタム)ベトナム政治に大きな影響力を行使していたのである。政府軍の将軍など彼女の召使い同然だったという。<sup>70</sup> だが彼女は「来世ではもっと権力を持ちたい」と、まだ不満げだった。<sup>71</sup>

もう1つの彼女の特徴が攻撃性である。自分たちの統治はつねに正しいという揺るがぬ信念が、いっさいの妥協を排除させた。1960年秋、軍がクーデターを画策したとき、弱気のジェムを叱咤激励したのが彼女であり、これ以降、影響力が急速に増大した。<sup>72</sup> 1962年末までには、彼女は夫ともジェムとも肩を並べる存在となり、一族の頂点に立ったともいわれた。<sup>73</sup> ニュー夫人は「ジェムに最も近い側近の1人」(マクナマラ)であり、

「ベトナムを支配する人間を支配する女性」と称された。コルビーが彼女を「皇后」と呼んだのもゆえなきことではない。<sup>74</sup>

彼女は「チュン姉妹 (Hi Ba Trung)」記念像建設の旗頭となった。チュン・チャク (Trung Trac 徴側)、チュン・ニ (Trung Nhi 徴弑) の2人は、紀元1世紀半ば、中国(後漢)の圧政に対して立ち上がった勇気ある女性で、ベトナム民族の英雄だった。だが彼女らをことさらに称揚しようとしたジェム政権の意図は、南ベトナムに国家として、国民としての一体性をもたらし、合わせて政権基盤を強化することにあった。1963年秋、クーデターで政権が崩壊した時、人々が先を争ってジェム統治の象徴となっていた姉妹像を引き倒したのも当然である。<sup>75</sup>

ニュー夫人は「爪の先まで独裁的」な女性だとノルティングは見ていた。実際に、シュレジンガーによれば彼女は、「窓を開ければ、陽光だけでなくたくさんの邪悪なものが飛んで入ってくる」として、民主主義導入への反感をまったく隠さなかった。<sup>76</sup> 彼女は女性連帯運動と名づけた組織をつくりあげ、全国の女性を政権支援に動員し、情報収集にあたらせた。ハルバースタムによればそれは「家庭をスパイする機構」以外の何物でもなかった。<sup>77</sup>

国民の統制を最優先する考え方の表れが、彼女の主導権で1962年に成立した道徳法である。ボクシングも闘鶏もバレエもダンスも禁止され、とくに当時流行りかけていたツイストが目の敵にされた。ラブソングも歌えなくなった。売春はむろん、避妊さえカトリックの信仰に反するとして禁じられた。<sup>78</sup>

国内の反乱が激化するにつれ、ジェムは一族、とりわけニュー夫妻に依存するようになった。それが国民のゴ一族憎しの感情をかきたてさせた。しかもニュー夫妻は手を携えて、「ジェムの僧侶もどきの孤立を意図的に助長した」とグエン・カオ・キ將軍は述懐する。ジェムの公約も、「ニュー夫妻のマウスピース」(ヒルズマン)と呼ばれた英字紙『タイムズ・オブ・ベトナム (*Times of Vietnam*)』が打ち消し、しかもそのほうが政権の態度を正確に反映していた。<sup>79</sup>

だがその代償として、ニュー夫妻は「現政権が嫌われる、ありとあらゆることの生きた象徴」となった。まずいことが起きれば、それが何であろうと2人のせいだった。<sup>80</sup> 反政府勢力も、ニュー夫妻さえ除去できればジェムの道を正すことは可能だとの立場だった。<sup>81</sup> ジェムに問題はない、ニュー夫妻こそ諸悪の根源だという考え方はじょじょにワシントンにも浸透し、クーデターの遠因となる。

#### 4. 袋小路に向かう道

ケネディ政権は1961年以来ジェム政権に民主化や自由化などを求めたが、暖簾に腕押しだった。1963年初め、南ベトナムの実情を目の当たりにしたヒルズマンとフォレストルが大統領に、大幅な支援増強から1年が経過したいまこそ、「もっと活発に、

ときには公然たる形をとってさえ、アメリカの見解をジェムに押しつけてもよい時がおそらくやって来た」と訴えたのも、そうした苛立ちの反映だった。<sup>82</sup>

南ベトナムの改革をめぐる両国間にはすでに多くの合意事項が存在していた。しかし「直接、特別な圧力をかけない限り」まず実現に至ることはなかった。支配者たるもの圧力下で妥協してはならないというのがジェムの信念だったとヒルズマンは回顧する。ジェムは、「アメリカ人は、せっかちで素朴で子供っぽいから、機嫌をとっておくのはいいが、その言うことは絶対聞かまいと確信」(シュレジンガー)していた。メクリンによれば、改革をせつつアメリカ側にジェムが寄こすお得意の回答は「検討中」であり、「めったにノーとは言わないが、イエスと言っても本気ではない」のがその常だった。<sup>83</sup>

政権樹立当初から、ジェムは「自分たちの独立性をほかならぬ自分たちに示威するために」アメリカに抵抗してきたのだとコルビーはいう。1960年秋に発生したクーデター未遂事件にアメリカが関与したのではないかとのジェムの疑いは、両者の信頼関係に大きなひび割れを生じさせていた。<sup>84</sup> 両国関係は「たぶん62年中頃には、というよりおそらくそれ以前からだが、非常にかりかりしたものになりつつあった」とクーパーは回顧する。1963年初め、ジェムはラルエット (Roger Lalouette) 仏大使に、アメリカが「かつてフランスがやったこと」を行おうとしている、つまりこの国の統治権を奪うつもりなのだとこぼしていた。<sup>85</sup>

マクナマラ国防長官がのちに作成を命じたベトナム介入拡大史についての秘密報告書『アメリカ＝ベトナム関係 1945-1967年 (United States-Vietnam Relations 1945-1967)』(いわゆる『ペンタゴン・ペーパーズ [Pentagon Papers]』)によれば、1963年春、両国間にはかなりの緊張が感じられていた。<sup>86</sup> 4月初め、ジェムはアメリカの要求を容れることが「政府内のいたるところで、また全国民からも、ベトナムが『保護国』になることだと見られる」として抵抗した。その1週間後、ニューは兄が「フランス支配に対する反動と抵抗にその生涯の大部分をかけてきた」人物であり、「保護国あるいは『共同統治』の影らしき気配」すら受け入れられないのだと援護射撃を行った。その背後には、ニュー自身が抱く「全面的な、そして不面目なほどのアメリカの援助への依存」や「ベトナムにおけるアメリカの圧倒的な存在感」への憤りがあるとメクリンは見た。<sup>87</sup>

ジェムの片腕ともいわれたグエン・ジン・トゥアン (Nguyen Dinh Thuan) 國務相は3月末、いまや両国の「チームワークは抜群」でありまた「本物の進捗がなされつつある」のに、こうした「揺らぎ」によって両国合同の努力が阻害されてはならないと述べた。これを聞いたノルティング大使は「心から賛同」する。だが、それはけっして小さな揺らぎどころではなかった。太平洋を挟んだ2つの政権は、意志疎通をまるで欠いていたからである。ジェムとの交渉は、長時間に及ぶ彼の独白に終始するの

が常だった。たいていのアメリカ人にとって彼は最後まで、まったく異なった文化的背景を持ち、意志疎通が不可能な「謎の人物」(マクナマラ)だった。それはノルティングも認めている。<sup>88</sup>

1963年初頭、民族解放戦線を相手のゲリラ戦争は、少なくとも表面的にはかなりうまく運んでいた。ベトナムで勝利を求めるアメリカにとって、いまやジェム政権こそが本当の、そして最大の敵となりつつあった。メクリンのように、対決路線こそが「ベトナム政府に限っては切迫した重要性を持つ物事をなしとげる唯一の道」だと主張する者もいた。<sup>89</sup>しかしケネディ政権は1963年前半まで、改革そっちのけで援助を増大させた。その結果、ジェム政権が南ベトナム統治の方向性を決めるのを容認したことが、のちの大規模介入につながったのだと批判されている。<sup>90</sup>

大統領の弟で司法長官のロバート(Robert F. Kennedy)はのちに「1961～63年の間に、政府を改革に動かすために、はるかに多くのことをなすべきだった」と述べた。大統領の側近ソレンセンも「政治的、経済的諸改革の断行をサイゴン政権が巧みに避けたことを、彼は許すべきではなかった」とケネディの不作為を悔やんだ。M・バンディ大統領補佐官の兄、W・バンディ(William P. Bundy)国防次官補によれば、改革要求が達成不十分なままに終わったことが両国関係の「破局点」だった。ケネディ政権にせよ次のジョンソン政権にせよ、アメリカは南ベトナムにかなりの圧力をかけ続けたのだが、その結果たるや「むらだらけ」だった、そして20年以上にわたりアメリカの影響力はつねに限られていたのだとコーマーはいう。<sup>91</sup>

## 5. 影響力限定の理由

アメリカが改革をめぐる十分な影響力を行使できなかった理由の第1は、その主役たるべき大使のノルティングが、ジェム政権を「アメリカが援助を経由できる唯一の正当な手段」とみなしていたことである。彼はワシントンに対しても、そのためにはジェムとの「相互信頼」の確立が不可欠だと訴えた。1963年初め、サイゴンでジェム政権を信じている者があるとすれば、アメリカ人だけだったとハルバースタムはいう。ノルティングはその筆頭だった。<sup>92</sup>

第2に、民主的改革がアメリカの究極目標であると同時に、戦争勝利の1つの手段にすぎなかったことである。ジェム政権側、たとえばニューは、自分たちが「過渡的段階」にあると言いつつ、ブー・バン・マウ(Bu Van Mau)外相はラスクに、「ベトナムとの闘いにはがんじがらめ」となった状態では「100%の民主主義は受け入れられない」と語った。『リポーター』『ニューヨーカー』などの記者をつとめたシャプレン(Robert Shaplen)はニューのために用意された秘密文書を入手したが、それによれば自由と民主主義は「最終目標」ではあったものの、「時期はずれ」に民主的自由を導入してしまえば共産主義者を利することになるとされていたという。<sup>93</sup>

テイラー (Maxwell D. Taylor) 統合参謀本部議長が1963年秋、上院外交委員会で語ったように、アメリカ側もまた「戦時には独裁者が必要」だと考えていた。南ベトナムのような「内戦のまったなか」にある国に「いわゆる普通の民主主義的な基準」を当てはめるのは現実的でないというわけである。ある米高官の言葉によれば「赤ん坊をいきなり風呂から出す」わけにはいかなかった。軍事援助司令部のハーキンズ将軍は「彼の国では戦争が行われていたのだから、彼は独裁者にならねばならなかったのだ」と、のちになってもジェムを弁護している。<sup>94</sup>

自由と民主主義を掲げ、共産主義の脅威に対抗するための戦いに勝利するために、その民主主義を犠牲にする——それはベトナムに限られなかった。シュレジンガーによれば、ケネディはカリブ海に浮かぶ小国ドミニカについて、そこで望ましいのは第1に「まともな民主的政権」、第2に反共独裁の「トルヒーヨ (Rafael Trujillo) 政権の継続」、第3に「カストロ (Fidel Castro) 政権」つまり反米共産国家の誕生の順だとしたうえで、「われわれは第1をめざすべきだが、第3が避けられると確信できない限り、第2を完全に排除できない」と語っている。しかも、軍事援助顧問団 (Military Assistance and Advisory Group) で海軍部門の責任者となったドラクニック (Joseph B. Drachnik) にいわせれば、ジェムは理想的な指導者ではなかったかもしれないが、世界中にそのような指導者など1人もいなかったのである。<sup>95</sup>

第3に、マクナマラが回顧するように、ケネディ政権首脳が南ベトナムを「巢立ちしたばかりの国」と見ていたことである。旅立ちの時点からそれは「破綻国家」であり、国家的統一さえろくになかった。クーパーはその著書の中で、ジェム政権成立を扱った章を「国家ならざる国家の誕生」と題している。<sup>96</sup> しかもワシントンには、「戦時にあり、分裂し、低開発で、2000年の専制の伝統を持つアジアの国」としては、むしろ南ベトナムの政治・経済・社会の進歩はなかなかのものだという過大評価があった。これでは改革への圧力は鈍らざるをえなかった。<sup>97</sup>

まして民主主義を導入しようにも、それを支える制度も下部構造もまったく存在しなかったとノルティンクはいう。民主主義じたい、ベトナムの文化には異質なものだった。たとえばアメリカと南ベトナムの大統領制はニューヨークの摩天楼とトタン屋根の小屋ほど違うとさえいわれた。ポール (George W. Ball) 国務次官にいわせれば、南ベトナムの民主化とは「つなぎになる藁もなく、使える粘土といえれば目的にまったく合わないというのに、制度という煉瓦をつくる」ような仕事だった。だからケネディ、ジェム両政権は国家建設のビジョンをめぐる根本的な対立を解消できず、同盟関係は最初から破綻の同然の状態だった。それどころか、それはのちにいう「文明の衝突」そのものだったといわれる。<sup>98</sup>

第4に、「ミ・ジェム (My Diem)」批判の存在である。「ミ」はベトナム語でアメリカをさす「美」と、英語の「私の」をかけた言葉である。南ベトナム政府の一般的

な呼び名で、しばしば「やくざ」「ごろつき」を意味する「ボン (Bon)」が後についたという。<sup>99</sup> だがUPI通信の記者シーハン (Neil Sheehan) によれば、当時南ベトナムにいたアメリカ人たちは、アメリカ政府がして欲しくないことばかりを行うジェムをアメリカの傀儡視するのは「ナンセンス」だと見ていた。アメリカの支援に、ジェム政権は感謝よりも憎悪を覚えており、しかもアメリカはその理由をまったく理解できなかったという。たしかにそれは皮肉な状況だった。<sup>100</sup>

1955～62年にアメリカがジェム政権に与えた援助は20億ドル以上。1963年には1日150万ドルが費やされていた。<sup>101</sup> その6割がたは軍事費に消えた。だから南ベトナム政府軍は「ドル援助丸抱え」の軍隊だと揶揄された。<sup>102</sup> 援助の結果、南ベトナムの産業は競争力を失い、南ベトナム経済は日ごとにアメリカ経済への従属を強めた。しかも援助は経済発展の基盤となるどころか、いたるところに腐敗を生んだにすぎなかった。ジェム政権はまさに典型的な援助全面依存型政権だったと批判されている。そのあげくに生まれたのは、ケネディがその死の日の朝語ったように、「アメリカなしでは南ベトナムは一夜にして崩壊しうる」という惨めな状況だった。<sup>103</sup>

第5に、アメリカは「ベトナム人を助けにきた客にすぎない」(ハリマン) という大前提の存在である。たとえそれが効果的な影響力を発揮するうえで大きな障害だとわかっているとしても、南ベトナムの主権を維持・尊重することが重要だったとメクリンはいう。「強力な民族主義的な確信」がなければ南ベトナム政府は生き延びれない。アメリカが果たすべき役割は「助言と説得のみ」である。だからアメリカは「ベトナム政府の軍事・経済・政治を命じたり管理したり指示したりする立場」にはないのだ。だが同時に「ベトナム政府に影響を与えるよう強い立場」にいてはならない。1963年初め、統合参謀本部が南ベトナムに派遣した視察団はこう結論づけた。<sup>104</sup>

だがそれは口でいうほど容易なことではなかった。ソレンセンはケネディが「1人の人間に危険なほど依存しすぎだとわかっていた」という。だがフォレストルがいうように、1963年初め、まさしくジェム「個人およびその一族への、公私を問わぬ全面的な支持」がケネディ政権の政策だった。『ニューヨーク・タイムズ』記者ビガート (Homer Bigart) がかつて名づけた「ゴ・ジン・ジェムと一蓮托生 (Sink or swim with Ngo Dinh Diem)」という道である。<sup>105</sup> つまりアメリカはヒルズマンのいう「わが国の『衛星国』の衛星国」、ボールのいう「わが国の操り人形の操り人形」たる地位に甘んじなければならなかったのである。しかも、ラスク国務長官が全世界の米代表部に書き送ったところによれば、その相手たるや「非効率かつ専制的である。国民の十分な支持を享受しておらず、腐敗も問題である。ジェムは親族や友人に依存しすぎており、権限を十分に委譲せず、きわめて頑固である」と描かれるような政府だった。<sup>106</sup>

## 6. マンスフィールドの警告

1950年代以来、米国内でジェムを支えてきた組織の1つが「アメリカ＝ベトナム友好協会(American Friends of Vietnam)」である。ケネディも初期の有力メンバーで、ジェムの愛国心や反共主義に強い感銘を受けていた。<sup>107</sup>1957年にジェムが訪米した時、「20世紀最大の人物の1人」「奇跡の男」などと絶賛の声を上げたのもこうした「ジェム・ロビー(Diem Lobby)」の面々である。<sup>108</sup>だが彼らも1963年を迎える頃にはすっかりジェムに幻滅し、彼を見捨てようとしていた。<sup>109</sup>

1963年2月、マンスフィールド(Mike Mansfield)民主党上院院内総務の現地視察報告が公表された。大統領の信任が厚く、しかもジェム・ロビーの一員として、かつてケネディとともにアイゼンハワー政権にジェム支持を強く働きかけた人物である。ジェムの「名付け親(Godfather)」とまで呼ばれた人物でもあった。それがケネディ政権のベトナム政策に重大な疑問符を提示したのである。それは、1963年夏までベトナム作業班を指揮した国務省極東局のウッド(Chalmers B. Wood)によれば、とどのつまり「ジェムと一緒に勝てるか?」ということだった。<sup>110</sup>

マンスフィールドが大統領に提出した報告は、7年の歳月と巨額の援助にもかかわらず、南ベトナムは以前よりも安定を失っていること、国民に責任を負い、国民の欲求に反応する政府が遠い存在になっていること、それがゲリラのせいというよりむしろベトナム政府自身とアメリカの政策に起因することなどを厳しく指摘した。この年初め、サイゴン南西の村アブバックで政府軍が味わった惨敗と合わせて、ジェム政権が直面する政治・軍事両面の困難が浮き彫りにされた。それが仏教徒危機につながったのだといわれる。<sup>111</sup>

マンスフィールド報告に接したジェムは、当然のことながら「非常に狼狽」したとフエのヘルブル(John J. Helble)総領事は伝えた。ジェムはこの報告が「さらに共産主義者を勇気づけてしまう」とこぼし、ニューは「裏切り」だと糾弾した。アメリカがベトナムから手を引く兆しではないかと懸念するベトナム政府高官もいた。ノルディング大使はその回顧録で、この報告がジェムを深く傷つけ、アメリカによる主権侵害についてますます過敏にさせ、自分との信頼関係を損なわせ、しかも「ジェムの棺の蓋に打たれる最初の釘」となったと糾弾する。<sup>112</sup>

3月半ば、いよいよベトナム政府との「対決が近づきつつある」ようにメクリンは感じていた。マンスフィールド報告はジェムに対米協力の道を選ばせる重要な武器となるはずだった。だがそれは腰砕けに終わった。ラスクがノルディングに伝えたように、ケネディ政権はまだこの時点では、「ベトコンによる攻撃からベトナムを守り、ベトナム国民によりよい生活をもたらすという努力について、ジェム政府を完全に支持する」方針から一歩も踏み出せなかったからである。したがって「マンスフィールド報告は共産主義の脅威に対抗してベトナム政府を支持するアメリカの政策の変更を

意味しない」とされた。<sup>113</sup>

ボウルズ (Chester A. Bowles) 駐インド大使は、現在のアメリカの路線が政治的にも軍事的にもジェムに支配されており、失敗の可能性が高いと指摘した。そうなれば「アジアでも米国内でも高価な代償を支払う羽目に陥る」とまで強い警告を大統領に与えたのである。しかしCIAの分析によれば、ジェムの「政治的改善が純粋に軍事面での進捗に追いついていない」状態はまったく変わらなかった。それでもケネディ政権は、とりあえず「もともと不安定な基礎の上に大規模な努力をじょじょに構築する」(マクナマラ) 以外になかったのである。<sup>114</sup>

## 第2章 騒乱の勃発

### 1. 古都騒然

作家の開高健によれば、ベトナムにいる日本人の多くは中部の都市フエを「ベトナムの京都」と呼んでいた。「知性と宗教、学者と高僧の町」だからである。儒教の伝統が強く、仏教の中心地でもあった。<sup>115</sup> そこにゴ・ジン・ジェム大統領の弟トゥック (Ngo Dinh Thuc) がカトリック大司教として君臨していた。ジェムのもう1人の弟カン (Ngo Dinh Can) が、トゥックは「教会と国家を混同」していると述べたように、聖俗両面で彼の影響力は絶大だった。<sup>116</sup> そのカンもまた独自の軍隊や情報機関を擁し、「王様」「將軍」などと呼ばれていた。<sup>117</sup> CIAによれば彼は中部ベトナムに「自立した警察国家」を樹立していた。北緯17度線に近いいくつかの省はトゥック、カンの兄弟が支配していたともいう。また一説には、事実上南ベトナムの北半分はカンが、南半分はニューが牛耳っていた。<sup>118</sup> ジェムの一族支配、カトリック支配の象徴的存在であるこの都市で、ジェム政権を瓦解に導く事件が起きたのである。

1963年5月5日、この「眠たげな町」(メクリン)には白と金色のカトリック旗があふれていた。トゥックの聖職在位25周年の祝典のためである。南ベトナムでは国旗の上位に宗教旗を掲げることは禁じられていたが、ほとんど守られていなかった。<sup>119</sup> だが式典でカトリック旗を目にしたジェムは激怒、翌日には禁止令を額面どおり実施せよと命じた。ところがその2日後、同じフエで釈迦生誕の記念行事が予定されていた。ジェムの命令が届いた時、すでに町は5色の仏教旗で埋め尽くされていたのである。当局は旗を降ろせと命令する。人々は必死に抵抗する。当局はいったん命令を取り消す。だがその前に、警官の一部が仏教旗を引きずり降ろしてしまっていた。<sup>120</sup>

宗教旗禁止の対象となったのは仏教だけではなかった。ジェムの本当の攻撃目標は、フエの支配者であるトゥックやカンだったとの説すらある。ベトナムに国家としての一体性を付与しようと懸命なジェムにとって、ときに中央政府の管理を受けつけない2人は大きな障害だったからである。<sup>121</sup> しかし結果的に、カトリック旗は許可され仏

教旗は禁じられた。たちまち大規模な抗議デモが発生した。僧たちは「いまや戦うべき時だ」と絶叫した。人々は警察や軍、装甲車を前にしてもお構いなく、デモや集会を続け、放送局に押し寄せた。<sup>122</sup> 彼らに向かって軍が発砲、9人が死んだ。群衆を前に怯え、神経質になった一部の暴走だといわれるが、ノルディング米大使がいうようにフエの官吏たちが「愚かなやり方で対応した」ことは間違いない。<sup>123</sup>

一説には、仏教旗の禁止はトゥックがジェムを焚きつけた結果だった。<sup>124</sup> 逆に、仏教徒側が、政府に責めを負わせる意図で、あえて旗をめぐる事件を引き起こしたとの説もある。<sup>125</sup> もともと釈迦生誕記念日は5月1日のはずが、メーデーと重なることから1週間延期された。だが8日は、ディエンビエンフーの戦いでホー・チ・ミン率いるベトミン (Viet Minh) がフランス軍を打ち破ってから9年目の翌日で、仏教行事がその記念行事に転化しはしないかと政府は神経過敏になっていた。それまでも政府は、毎年この時期になると大々的な掃討作戦を実施していた。その力を誇示するためである。<sup>126</sup> それにしても今回の禁止令は最悪のタイミングだった。メクリンの目にそれはアメリカで大統領がクリスマスに賛美歌の禁止令を出すのに匹敵する「政府のへま」に映った。<sup>127</sup> 当時、南ベトナム国民のほぼ7～8割は仏教徒だといわれていたからなおさらだった。<sup>128</sup>

しかしニクソン元大統領はそれを、アメリカがベトナム敗戦で被った後遺症、「ベトナム症候群」を克服するうえで是正しなければならない、誤った認識の1つだとしている。<sup>129</sup> 第1に、南ベトナムを「仏教国」とみなし、国民の大多数がジェム政権に反旗を翻したとすぐさま結論を下すのは間違いだと指摘されている。<sup>130</sup> 本当に仏教徒とみなせる者はせいぜい人口の2～3割、どれほど多く見積もっても全国民1400万人のうち600万人程度にすぎない。<sup>131</sup> しかもその多くの信仰は名ばかりで、実態としては儒教や道教、祖先崇拜、アニミズムなどの混合物とってよい。<sup>132</sup>

第2に、仏教徒危機発生以前には、あからさまな仏教への弾圧はなかった。<sup>133</sup> 一部、熱心なカトリックの官吏の行き過ぎはあったろう。しかしそれは中央政府による組織的弾圧ではなかった。またジェムは仏教に限らずあらゆる宗教を相手に厳しい態度をとったのであり、少なくともカトリックの大統領による仏教徒の抑圧という構図は当てはまらない。ジェムの統治をカトリック支配というのなら、ケネディを大統領に戴くアメリカもそうではないかと、ジェム自身も反論した。<sup>134</sup>

第3に、それどころかジェムは仏教を優遇していた。のちに反ジェム活動の拠点となるサーロイ寺院を含む、2500以上の仏教関係施設を修復・新設したのも彼である。閣僚18人のうち8人、議員113人のうち75人は仏教徒だった。省知事38人のうち26人、軍上層部の19人の将軍のうち16人は仏教ないし儒教・道教などの信者だった。<sup>135</sup>

だから元CIAサイゴン支局長のコルビーは、宗教差別などまったくの「ウソ」だったと主張する。にもかかわらず間違った報道、ないし意図的な歪曲がそうした邪悪な

イメージを米国内に、そして世界につくりだしてしまったというわけである。だからハーキンス将軍はのちになっても「私がベトナムに在任中、迫害などなかった」とし、「嘘だけを報道してピューリッター賞を得た」とハルバースタムを糾弾した。<sup>136</sup>

だがそれでもなお、ジェムが1959年にこの国を「聖母マリアに捧げる」と公式に宣言し、カトリックを事実上「国教」扱いしたことを看過してはならない。<sup>137</sup> ジェム自身が敬虔なカトリックだったからである。加えて、キリスト教だけが共産主義に抵抗できると、彼も彼の一族も確信していたからである。ベトナム南北分割に際して共産主義を忌み嫌い、北から逃れてきた難民（その大部分がカトリック）はジェムの力強い味方だった。とくに政権初期、共産主義と戦う積極的な意欲を示したのは彼らだけだった。<sup>138</sup>

かりに法的な宗教上の差別や露骨な弾圧はなくても、ジェム政権は行政の実際にあたって明らかにカトリックを優遇していた。<sup>139</sup> 土地改革の実施にあたって、彼らの所有地の接収は目こぼしされ、配分ではよい土地が割り当てられた。農民とゲリラの遮断を狙った戦略村建設にともなう強制労働も免除された。アメリカの援助物資も優先的に手元に届いた。<sup>140</sup> 政府の上・中級官吏は3分の2がカトリックだったとの統計もある。<sup>141</sup> 出世のために改宗することは「飯椀改宗（Rice-bowl conversion）」と呼ばれた。「飯椀カトリック（Rice-bowl Catholics）」すなわち改宗者は1963年までに20万人を数えた。ニュー夫人も結婚時に改宗した1人である。<sup>142</sup> 軍内部ではカトリック信仰が強要されたが、じつはその必要などなかった。昇進をめざす者が先を争って改宗したからである。<sup>143</sup> 南ベトナムはまるでカトリックの植民地のようなだといわれた。これ以上の優遇がかえって国民の反感を買い、みずからの不利益になるとカトリック側が恐れたほどである。<sup>144</sup>

対照的に、仏教徒はジェム政権下で「二級市民」扱いだった。それは植民地時代の名残だったから、差別待遇は100年近くに及んだ。仏教徒のデモや反政府運動は「宗教差別に対する長年の悲嘆の反映」だとトルーハート（William Trueheart）代理大使は報告した。5月、ヒューズ（Thomas L. Hughes）国務省情報調査局長からラスク長官にあてた報告によれば、フエ事件はたちまち「国家的危機」となり、カトリックの優越に対する「仏教指導者たちの長きにわたる怒りを結晶化」したのである。<sup>145</sup>

そこには宗教以外の側面もあった。南部人の、ジェムを含む北・中部出身者による支配への憤りである。また、フランス語やカトリック信仰など植民地統治時代を引きずる古い世代と、より民族主義的な新しい世代、ハルバースタムにいわせれば「<sup>マ</sup>二十世紀のアジア人とそれより前のアジア人」の争いでもあった。<sup>146</sup> つまりアメリカの力が及ばないところで事件は発生し、拡大していったのである。

この年秋、ラスク国務長官は「宗教的抗議」として始まった仏教徒のデモに、ほどなく「政治・宗教両面の要素」が加わっていったのだと振り返った。<sup>147</sup> その不満は

1954年、ジェム政権樹立のその日から積み重ねられてきたという。1963年秋、ベトナムを視察したマクナマラとテイラーは、ジェム統治への不満が少なくとも「最近数年間は表面すれすれ」に達していたのだとケネディに報告している。マクナマラの回顧によれば、この時彼はリチャードソン (John Richardson) CIA サイゴン支局長から、仏教徒危機はそれまで「しばらく休眠状態」だった政府への不満を呼び覚ましたのだとの説明を受けていた。<sup>148</sup>

カトリック以外、つまり国民の9割がたがジェムにそっぽを向いたこと。つまり、たとえきっかけが何であろうと、ジェムがすでに「天命」を失ったと彼らの目に映ったこと。それが何よりも重要だった。仏教徒危機とは宗教問題ではなく、まさに政治問題だったのである。<sup>149</sup> 宗教上の差別が本当にあったかどうかは、もはや「アカデミック」な問題でしかなかった。<sup>150</sup>

## 2. 燃え上がる怒りの炎

1963年初めまで、仏教徒は政治的にたいした役割を果たしてこなかった。<sup>151</sup> あまりにも一体感に欠けた、受け身の人々の集合体だったためである。このためジェム政府も彼らの存在を軽視してきた。<sup>152</sup> しかしベトナムにはもともと政治と宗教を区別しない伝統があり、仏教は宗教であると同時に、政治勢力の1つでもあった。仏教指導者が実際に政治権力を求め、また危機に際して重要や役割を演じたことも皆無ではない。<sup>153</sup> ジェム政権下の10年近く、彼らは宗教としても組織としてもじょじょに力を蓄えていた。<sup>154</sup> 5月8日の事件の波紋が急速に広がったのは、仏教徒側が最初から政治目的を持ち、意図的に政府を挑発、人々を扇動したからだとも指摘されている。<sup>155</sup>

事件発生直後のフエはまだ穏やかだった。「危機は終息に近づいている」と、事件直後にフエのヘルブル総領事は判断している。それでも9日、1万人以上が抗議デモに参加するなど、事態はけっして楽観を許さなかった。<sup>156</sup> 10日、仏教徒側は政府に対して5項目の要求を掲げた。①仏教旗掲揚禁止命令の取り消し ②カトリックと同等の権利の保証 ③仏教徒の逮捕および脅迫の中止 ④仏教徒の信仰の自由の容認 ⑤事件の犠牲者に対する補償と責任者の処罰である。15日、仏教指導者の代表がジェムと会見、要求書を手渡した。<sup>157</sup> ジェムは彼らに向かって和解の意志を示したと報告されている。だがこの時仏教徒側は、政府が日本映画『釈迦』(1961年)の輸入を許可したことを非難した。彼らはかねてこの映画が仏陀の生涯を歪曲していると抗議していたのである。だがジェムは「輸入許可すなわち公開ではない」と強硬だった。その後の両者の交渉の行方を暗示させる出来事だった。<sup>158</sup>

なかなか動かぬ政府に業を煮やした人々の抗議行動はさらに続いた。その舞台もフエから各地に広がった。5月30日にはサイゴンで、ついぞ見られなかった政府への抗議デモが発生した。<sup>159</sup> 同じ頃、フエでは約1000人、サイゴンでも数百人の僧侶た

ちが抗議のハンストを行った。<sup>160</sup> 仏教徒側も政府側も慎重な姿勢を保ったため大きな騒ぎにはならなかったが、仏教徒側は「すべての要求が認められるまでデモは続ける」との態度を堅持した。<sup>161</sup> 重要なのは、仏教指導者のハンスト指示から2日間の余裕があったにもかかわらず、政府が何の手も打てなかったことである。ジェム政権は紛争の主導権を仏教徒側に握られ、統治能力の驕りを隠せなくなりつつあった。<sup>162</sup>

6月11日、事態は新局面を迎える。サイゴンで、僧侶や群衆や警官などが見守る中、1人の僧侶が結跏趺坐の姿勢をとった。彼はガソリンを身に浴び、抗議の焼身自殺を行ったのである。<sup>163</sup> ティック（僧侶の尊称）・クアン・ドゥック（Thich Quang Duc）は「仏陀の生まれ変わり」とされた。炎の中でも彼の心臓だけは最後まで灰にならず、硫酸をかけてもけっして溶けなかったという神話が生まれた。<sup>164</sup>

焼身自殺は仏教信仰と相容れない政治への干渉で、けっして正当化されないとの批判もあった。少数の狂信者がクアン・ドゥックに強要した、「カミカゼ」もどきの蛮行だとも非難された。<sup>165</sup> 焼身自殺はむしろジェム政権転覆後のほうが多かったし、1976年の統一後も社会主義政権の仏教弾圧に抗議して、何度も発生している。<sup>166</sup>

しかしジェム政権が被った打撃は大きかった。ノルディング大使のいう「民衆のヒステリー」が発生したからである。その結果、サイゴンは「精神病院さながら」になったとメクリンはいう。<sup>167</sup> ラスク国務長官もこの日ワシントンで、仏教徒問題は「危険なまでに破局点に近づいている」と痛感していた。ゲリラ戦専門家を自認し、国務省政策企画局を率いるロストウは、「6月から事態は崩壊した」と述懐している。<sup>168</sup> 1人の僧の死が世界に衝撃を与え、ケネディ政権のベトナム政策を転換させ、ジェム政権の命運を閉ざしたのである。

焼身自殺の背景には、第1に仏教徒たちが報道の威力を急速に学んだことがある。炎に包まれたクアン・ドゥックほど「最近の歴史の中で世界中いたるところに大きな感情を引き起こしたニュース写真はなかった」とロッジは回顧する。彼らは「驚くべき宣伝の才能」を示し、「米記者たちに対し、みずからを迫害された宗教組織という、現実とは異なる姿に描いた」のだとジョンソン国務次官代理もいう。<sup>169</sup>

第2に、仏教徒たちの組織化が「驚嘆すべき速度」で進み、「この国でベトコン以外に政府が支配できない唯一の大衆運動」に、また「政権への反対運動を一点に集められる唯一の非共産主義勢力」になったことがある。実際にジェム政権を打倒した1963年秋以降、彼らは「国民の中で最も強力な一派」としての存在を確立したとハルバースタムは述べている。それはジェム政権崩壊のほぼ1年後に関高健が描いた状況の原点だった。彼はいう。「この国には四つの政府があるようだ。内閣と、将軍たちと、仏教徒と、ベトコンである。四つのうち内閣と将軍たちはネコの眼よりいそがしく変るからお話にならぬ。仏教徒とベトコンだけが統一力を持っている。農村に浸透しているのもよく似ている」。<sup>170</sup>

第3に、仏教徒内部における急進派、統一仏教教会の勢力拡大である。もともとジェムの過剰な親カトリック政策に危機感を抱いた仏教徒側が自衛のために組織したものである。サイゴンの米大使館が各国の駐在武官に説明したところによれば、「最も小規模だが、最もよく組織された、最も好戦的な」性格を持っていた。<sup>171</sup> その中心ティック・チ・クアン（Thich Tri Quang）は「自立した、ベトナム政府と無縁の僧」として尊敬されていた。フエ事件で「本当の点火プラグ」となったのが彼である。<sup>172</sup>

チ・クアンは元ベトミンで、北ベトナムとの関係が噂されていた。<sup>173</sup> 少なくともそう考えれば、仏教徒の急進派がジェム政権打倒を目標に掲げる理由の説明が見ついた。彼らの目的は中立化による戦争終結と国土の再統一で、そのために反共のジェム政権とそれを支えるアメリカを排除しようとしたのだという。ジョンソン国務次官代理にいたってはのちに、彼らが「ベトナム人の『仏教国家』を樹立し統治しようとしていた」のだと述べている。<sup>174</sup>

### 3. オリーブの枝と矢

ジェム政権もけっして無策ではなかった。5月29日には宗教の自由を保証する声明を発表している。6月4日、政府と仏教徒代表の間に、トゥアン国務相の言を借りれば「ある種の休戦」を意味する「仮合意」が成立した。<sup>175</sup> 5日、11日の2度にわたり、ジェムは宗教の自由を憲法上保証されたものとして再確認するとともに、平静な態度を保ちながら事態解決を図ろうと国民に呼びかけるラジオ演説を行った。<sup>176</sup>

しかし厄介なことに、政府の立場は一貫していた。事件はベトコンが引き起こした、というものである。7月初め、政府の調査委員会も同じ結論に達した。<sup>177</sup> 犠牲者の死をもたらしたのは政府軍の武器ではなく、「ベトコンが投げた手投げ弾」（ジェム）ないしゲリラが使うプラスチック爆弾だったと彼らは主張した。<sup>178</sup> だがそれは多くの目撃者の証言とも米軍事顧問による報告ともまったく食い違っていた。<sup>179</sup> 政府がベトコン黒幕説に固執すればするほど、人々の嘲笑と憤激の対象となった。政府にはかねて「何でもやっかいな事は全部ベトコンのせい」にする性向があったと『ニューヨーク・タイムズ』記者のハルバースタムはいう。<sup>180</sup>

ジェム自身、本当にベトコンの仕業だと信じていたようである。もともと仏教指導者たちは「巧妙にカモフラージュされたベトコンの前線」（メクリン）と、とくにその急進派は「ベトコンの代理として行動している」連中だとみなされていた。<sup>181</sup> 事実上ニュー夫妻の御用新聞である『タイムズ・オブ・ベトナム』は、「ベトコンおよび外国の陰謀家と謀略」を糾弾した。<sup>182</sup> 当時トルーハート代理大使のもとにも、あまりに組織化されたデモや焼身自殺、暴動を見る限り、その背後にいるのはベトコン以外に考えられない、との報告が寄せられていた。<sup>183</sup>

ジェム政権打倒——たしかにノルディングがいうように、民族解放戦線と仏教徒急

進派の目指すところは同じだった。仏教徒危機の発生は、宣伝材料としても反ジェム闘争の手段としても、歓迎すべき事態だったはずである。だが5月末、解放戦線に、せっかくの好条件を利用する動きはまだ見られなかった。7月に入っても、「今までのところ、共産主義者は仏教徒問題を効果的に利用しているとの証拠はない」とCIAは分析した。<sup>184</sup>

彼らはむしろ不意を打たれ、とるべき戦術について逡巡していたといわれている。<sup>185</sup> 仏教徒の中には解放戦線メンバーもいたに違いない。だが、「ベトコンが現段階でいかなる形でも仏教徒に直接の影響力を行使している証拠はない」とトルーハートは報告している。<sup>186</sup> 仏教徒運動の内部に幹部を送り込むどころか、「仏教徒と手を組みそうにない唯一の政治勢力」がベトコンだったとヒルズマン極東担当国務次官補も述懐している。というのは、両者は反政府の立場から民衆の支持を奪い合うという点で、対抗関係にあったからである。事実、仏教徒組織の人気と力が増したため、解放戦線への支持はかえって低下したという。<sup>187</sup> ジェム政権崩壊の兆しと、ベトコンを相手の内戦との間には、少なくともその当初ほとんど関わりはなかったとマクナマラも述べている。W・バンディ国防次官補代理の述懐によれば、当時ワシントンも、仏教徒危機はベトコンの仕業云々よりも「はるかに深い根」を持っていると感じていた。<sup>188</sup>

その根とは、ジェム政権が仏教徒の動きを最初から「政治問題」視したところにある。下手に譲歩すれば彼らの要求はさらに拡大するし、それ以外の勢力も柳の下の泥鰌を求めたろうと見たわけである。CIAは、ジェム政権が「最初から仏教指導者を破壊分子とみなし、力で対処すると決めていた」と分析している。<sup>189</sup> ジェムも、政権内の多くの者も、1955年に宗教教団カオダイ(Cao Dai)やホアハオ(Hoa Hao)らの反乱を粉砕したのと同様、今回も仏教徒など容易にねじ伏せられる、いやそうすべきだと確信していた。<sup>190</sup> 事件がフエ、つまり一族の出身地で起こったことが、彼の面子をいやがうえにも刺激した。しかも、かねてジェムはグエン(阮)朝の都フエをベトナムの歴史的象徴と位置づけ、ベトナム人の誇りある歴史と一体化することでみずからの統治に権威と正当性を付与しようと懸命だったから、なおさらだった。<sup>191</sup>

仏教徒と和解に到達する以前に、ジェムは衣の下の鎧をちらつかせていた。6月3日、フエに戒厳令が敷かれる。政府軍は、寺院周辺を去ろうとしない1000人ほどに向かって、UPI記者シーハンのいう「催涙ガスと棍棒の雨」を降らせた。<sup>192</sup> 前後6回にわたる催涙ガス使用で、67人が病院に運ばれた。<sup>193</sup> 政府は性懲りなく今度もベトコンのせいにした。事件の傷を癒すどころか、政府は空から仏教指導者を非難するパンフレットを撒いた。<sup>194</sup> フエ市民の激怒は政権と軍の兵士たちに向けられた。この街はまさに「爆発寸前の状態」となった。<sup>195</sup>

政府はサイゴンでは話し合いに応じるふりをしながら、フエでは「残忍きわまる手段で運動を弾圧」していると非難された。民衆が軍に公然と敵意を示すようになった

ため、トルーハートはトゥアン国務相に、軍を引き揚げて警察と交替させられないかと打診している。フエを牛耳るゴ・ジン・カン、ジェムがフエに来て「猫一匹集まらないだろう」とあきらめ顔だったという。<sup>196</sup>

民衆の怒りの火に油を注いだのがニュー夫人である。6月7日、彼女が指導する女性連帯運動が仏教徒への非難を決議した。<sup>197</sup> ジェムは事前に知らなかったと弁明したが、アメリカ側の決議取り消し要求にはいっこうに応じようとしなかった。<sup>198</sup> 11日、ニュー夫人は僧侶の焼身自殺を「バーベキュー」と嘲り、「またバーベキューの見せ物があれば拍手をしてやる」とも述べた。<sup>199</sup> この無神経な発言は「共産主義の専制から自由を守る担い手であるはずのベトナム政府の立場を著しく弱めた」だけでなく、ワシントンに、もはやこのままでは「ベトナム政府への援助や支援を続けることはできない」と決意させるにいたる。<sup>200</sup>

#### 4. 説得戦術が頼り

ケネディは1963年初めには、ベトナムがいずれ手に負えなくなるのではと「非常に神経質」になっていたと、国家安全保障会議の一員だったフォレストは回顧する。フエに始まる「感情的爆発」(テイラー)は、サイゴンにもワシントンにも「電撃的ショック」(コルビー)を与えた。その結果、ベトナム問題は「最優先的に扱われた」とシュレジンガー大統領特別補佐官はいう。<sup>201</sup> だが、たしかにケネディはジェム政権の抑圧政策を批判したけれども、5月8日以降しばらくの間、この事態をまださほど重大視せず、たいして注意を払っていなかったと、ケネディの側近ソレンセンは指摘している。米国内の報道についても同じことがいえた。<sup>202</sup>

この頃、ソ連との間には核実験禁止条約締結をめざす交渉、キューバ危機やベルリン危機の事後処理という懸案があった。欧州では多角的核戦力(MNF)の創設やイギリスの欧州経済共同体(EEC)加盟などをめぐり、ドゴール仏大統領の挑戦、西側同盟との摩擦に対処しなければならなかった。アジアではラオス内戦が再発している。米国内では公民権問題が燃え上がりつつあった。その中でベトナムはまだ「低水準の国内の反乱」にすぎず、「本当の戦争ではなかった」から、二義的な関心しか払われなかったのだとソレンセンは述懐している。<sup>203</sup>

ケネディがフエ事件に不意を突かれたのは、1961年秋の介入拡大決定以来、ベトナムを正面から取り上げるのを回避してきたツケでもあった。ケネディはベトナムに「十分な注意を一度も与えなかった」と見るのがシュレジンガーである。少なくとも仏教徒危機が発生するまではそうだった。<sup>204</sup> いやそれどころか、夏を迎えてもなお、対南ベトナム関係の運営は部下任せだったと指摘する向きもある。もしそうなら、1950年代に上院議員として、そしてジェム・ロビーの一員として、アイゼンハワー政権のベトナム軽視を批判した人物としては、迂闊にすぎたといわざるをえない。<sup>205</sup>

その背景には楽観もあった。1963年初めにベトナムを視察したホイラー（Earle Wheeler）陸軍参謀総長はのちに、「軍事面の諸計画は1963年6月までじつにうまくいっていた。われわれは勝っていたのだ。ところがその時、5月に仏教徒の騒動とごたごたが始まり、ジェム政府はしだいに困難に直面することになったのだ」と述べている。戦況の好転を反映してケネディ政権は、フエ事件勃発の2日前には米軍事顧問の引き揚げをめざす検討を本格的に開始している。ヒルズマンによれば、それはちょうどジェムにアメリカ式の反乱鎮圧（Counterinsurgency）を吞ませ、いよいよこれからという時期でもあった。また、ジェムをよく知るコルビーは、彼がこの「乱気流を乗り切れるだろう」と楽観していたという。<sup>206</sup>

だがたとえそうでも、その希望はほどなく崩れ去った。ワシントンにとって5月8日は「歴史が劇的な転換を遂げたように見える日」の1つだったとW・バンディ国防次官補代理はいう。これ以降、ケネディは事態がきわめて深刻であり、ジェムによる政治改革が待たなしの状態なのだとうやく認識したのである。<sup>207</sup>

アメリカ史上初のカトリックの大統領であるケネディは、同じカトリックのジェムが仏教徒を弾圧し、それにアメリカが間接的にせよ加担していることへの批判を心底恐れた。『ニューヨーク・タイムズ』のワシントン支局長ウィッカー（Tom Wicker）が黒人（アフリカ系アメリカ人）を「わが地元の仏教徒」と呼んだように、ジェムに反抗する仏教徒の姿と、米国内で平等を求めて戦う黒人の姿が二重写しになったとすればなおさらだった。<sup>208</sup>

ノルディング大使はジェムに、状況の深刻さをけっして過小評価してはならないと訴えた。宗教上の差別を撤廃し、フエ事件の責任を認め、犠牲者に補償を与え、話し合いによる紛争解決をめざすことなどを求めたのである。<sup>209</sup>だがそのやり方はあくまで、ラスク国務長官が彼に指示したように、仏教徒との和解が「彼ら自身のためでありアメリカの利益でもあることに気づかせる」という、まだ穏やかなものだった。<sup>210</sup>

アメリカが強硬姿勢をとらなかつたのは、第1に、戦争が「重大な段階に入りつつある」という認識、そしてせつかく得られた勝利への「モメンタムを維持するには、ベトナム政府の信頼と協力を得なければならない」という要請のためだった。ノルディング大使も、「助言と説得で政府のパフォーマンスを改善」するのが最善の策だと確信していた。それが『ペンタゴン・ペーパーズ』のいう、アメリカの「抑制外交」を継続する根拠となったのである。<sup>211</sup>

第2に、アメリカが戦争の矢面に立つような事態を避けるうえでも、「政府の支配権をわれわれに取られたくないというベトナム人の敏感さを可能な最大限尊重する」ような方法が得策に思われた。ただしラスクがサイゴンに書き送ったように、アメリカはたしかに「ジェムの敏感さは理解」しながらも、内外の批判を考えればこのままジェム政権支援を続けるのも困難だった。<sup>212</sup>

第3に、仏教徒危機解決に力を発揮しようにも、ベトナムの仏教徒のことなどほとんどワシントンの誰も知らなかった。<sup>213</sup>6月上旬、国務省は「突貫態勢」でベトナムの仏教徒についての研究を用意し、サイゴンに送った。だがトルーハートは、事態がそうした研究が役立つところよりはるか先に行ってしまったと嘆息している。「いったい全体、どうやってこんなことが起こったのだ？これはどういう連中なのだ？なぜわれわれは事前に彼らを知らなかったのだ？」という、ケネディがフォレストルに向かって漏らしたうめきには、まさに悲劇的な響きがある。<sup>214</sup>

それでもまだ初めの頃、南ベトナムの状況はサイゴンでもそれ以外でも「比較的静穏」だった。危機は去ったと見たノルティングは5月23日、かねて予定の休暇をとり、エーゲ海に向かった。だが「嵐の前日」にサイゴンを後にしたことほど大きな間違いはなかったと彼は述懐する。その不在中に、アメリカの対ジェム政策に大きな変化が生じたからである。<sup>215</sup>

## 5. ようやく方向転換の兆し

その変化の主役が代理大使トルーハートである。彼はそれまでの説得路線をがらりと改め、「ジェムが今までに一度も接したことがないほどの率直な言葉で」アメリカの立場を縷々説明し、事態改善を厳しく要求したのである。メクリンはそのやり方を「直接の、無慈悲な、テーブルを叩かんばかりの圧力戦術」であり「主権国家、それも友好国に対してアメリカが滅多にやったことのないような」ものだったと述べている。<sup>216</sup>

南ベトナムの政府は、広範な国民の支持を失い、これまでの成果を台なしにする「本物の、切迫した危険」に直面している。だからジェムは「アメリカがこの問題をいかに重大視しているかを理解」しなければならない。「たいして手間をかけずにこの問題から抜け出せる」などと考えるはならない。<sup>217</sup>宗教上の自由を認め、10/59法令を撤廃し、弾圧を止め、事件の責任者を処罰し、犠牲者に補償を与えなければならない。端的に言えばアメリカはジェムに、仏教徒の要求をすべて呑むよう求めたのである。しかも、この危機によって「アメリカの世界的な責任に影響」が生じており、またベトナム支援には「米議会と国民の十分な支持」が必要だという理由から、双方の合意を共同声明という形で外に示すことを要求し、その声明の内容まで提案した。<sup>218</sup>

フェエ事件の解決だけではない。政府は仏教徒と話し合いを今後も続けるべきであり、相互の意志疎通を図る「制度的チャンネル」を設けなければならない。6月3日に死去した法王ヨハネ23世(John XXIII)を偲ぶ行事に政府がいつさい関与してはならない。<sup>219</sup> 群衆の鎮圧にアメリカが供与したM113装甲兵員輸送車を使ってはならない。部隊の移動に米空軍機が用いることも許されない。<sup>220</sup> とにかくにも仏教徒を刺激しないこと、それが最優先だった。

トルーハートは休暇中のノルティングに何の連絡もとらず、彼を呼び戻す努力もしなかった。W・バンディはのちにそれが「重大な過ち」だったと述べている。当のノルティングは、ワシントンの反ジェム勢力が自分を故意に遠ざけたのではないかと疑い、のちになってもトルーハートの裏切りに不満をぶちまけている。<sup>221</sup>

だが彼を責めるのはお門違いだろう。第1に、彼の転換はワシントンの変化を反映したにすぎない。フエで2度目の事件が起きたとき、ラスクは彼にジェム政権首脳に「最も強い言葉を用いて」必要な手だてを講じさせるよう指令した。ヒルズマンもトルーハートに「断固たるアプローチ」を求めた。だからこそフォレストルはホワイトハウスからトルーハートの「素晴らしい仕事」ぶりを賞賛し、「優れた仕事をさらに続けよ」と指示したのである。<sup>222</sup>

すでに5月末の時点で、ラスク国務長官は、もしこのままジェム政権と仏教徒の対決が続けば「ベトナム政府にとって重大」な事態に成長する可能性があると予想していた。ベトナムでの反乱鎮圧の進捗について協議する場でも、ジェム政権が情勢緩和になかなか動こうとしないために、いずれ「事態が急速に深刻化しうる」ことへの懸念がいやがうえにも高まっていた。政府軍の将軍たちの間にもかなりの動揺が見受けられていたから、もはや猶予はならなかった。<sup>223</sup>

第2に、ノルティングのやり方がこれまでほとんど何の成果ももたらさなかったことは明らかだった。何を要求してもベトナム人が「やさしく微笑み、肩をすぼめれば、それでことは終わり」だったとボール国務次官は述懐する。その結果、ハリマン政治担当国務次官やヒルズマン次官補ら、かねてノルティング路線に異を唱える人々が急速に力を獲得し、ノルティング流のジェム弁護論を徹底的に叩くようになった。<sup>224</sup>

第3に、ベトナムの騒乱をめぐる米国内の報道が、対ジェム強硬論にいつそう拍車をかけたとノルティングはいう。とくに6月11日——ケネディがアメリカン大学で希望に満ちた平和共存演説を行った翌日——の焼身自殺の衝撃は大きかった。ジェム政権への圧力が増大したのは、ラスクが率直に語ったように「これ以上の焼身には耐えられない」からだった。これを機にベトナムという問題が、「南ベトナムの農村」から「ワシントンとサイゴンの執務室と会議室」に移ったのだとコルビー元CIAサイゴン支局長はいう。<sup>225</sup>

チャーチ (Frank Church) 上院議員は焼身自殺について「ローマの闘技場でキリスト教の殉教者たちが手に手をとって歩いて以来ついで見られなかった、ぞっとするような出来事」だと述べ、その原因となったジェムの弾圧を糾弾した。有力各紙はジェム政権およびケネディ政権に批判的な論調を示し、著名な聖職者たちもアメリカのジェム支持政策に抗議の声を上げた。焼身自殺の責任はベトナム政府にはないと論じるノルティングに対し、ラスクは「そんなことはどうでもいい。世論がいまや雪崩を打っているのだ」と語った。<sup>226</sup>

もちろんアメリカ側も、さまざまな要求が「強い薬」も同然で、「ジェムも大変飲みにくいだろう」ことは重々承知だった。だが焼身自殺の報を受けた直後、トルーハートはトゥアン国務相に向かって最後通牒にも等しい通告を行った。政府側に「いますぐ、劇的な、和解を示す動き」がなければ「アメリカ政府は公然とこの問題すべてから身を引く」以外にない。それどころか「ベトナム政府の仏教徒への扱いに反対するという強い調子」をとることになる。<sup>227</sup> それはもちろん国務省からの訓令にもとづいた行動だった。ベトナム政府が「即座に劇的な行動をとり、仏教徒の信頼を獲得する」こと、「仏教徒の要求を完全、無条件に受け入れる」こと、それを「公式かつ劇的な方法で行う」ことが重要であり、ジェムがこの線に応じなければ、ベトナム政府の現在の政策と「アメリカは一緒にやっていけないことを公に表明する必要がある」というものである。<sup>228</sup>

この訓令はケネディが知らぬ間に送られたもので、後になって大統領は激怒したという。実際にその直後ケネディは、すでにジェム政権と手を切るという公式声明の脅しをしているので、これ以上の脅しは絶対にしないよう部下たちに釘を刺している。<sup>229</sup> だがそれは、対ジェム和解戦術への回帰ではなく、むしろ圧力戦術の限界を感じとった彼の嘆息と見るべきではないか。実際にサイゴンからはトルーハートが6月12日、「ジェムがみずからを救うのに、アメリカは合理的に可能なあらゆる手だてをすでに尽くした」と絶望的な報告を送っている。<sup>230</sup>

アメリカが何を求めようとジェムはまったく聞く耳を持たなかった。ベトナム側が何らかの措置を講じるのはいつも事態がどうしようもなくなってから、あるいはアメリカの強硬な要求に直面してからで、その結果「仏教徒に最大のインパクトを与えるには遅きに失する」のが常だった。『ペンタゴン・ペーパーズ』は、ジェムがアメリカは過剰に反応していると考えていたと分析する。頑迷さや誇りのゆえに、ジェムは圧力に屈したくないあまり自殺の道を選んだようなものだと言及する。<sup>231</sup>

ロバート・ケネディはのちに、「ジェムが最小限の譲歩すらしようとしなかった」と指摘した。だがもしそうでも、その原因をつくったのはやはりアメリカだった。ハーキンス将軍は指揮下の全要員に対し、仏教徒問題は「ベトナムの国内問題」でありその「解決の責任はひとえにベトナム政府にある」と指令している。戦争と同じく、政治問題の解決もベトナム人の手で行ってもらわなければならなかったのである。<sup>232</sup>

### 第3章 破局への間奏曲

#### 1. 和解成立

6月16日、フエ事件への対処について、南ベトナムの政府・仏教徒代表による共同声明が発表された。<sup>233</sup> 紛争のきっかけとなった国旗と宗教旗の関係について、ゴ・

ジン・ジェム大統領はかねて仏教徒もカトリック教徒もともに「宗教旗を無秩序に使用」してきたと非難し、国旗が「全国民・全陸軍のわが国・国民の自由を守る戦いのシンボル」だと頑強だった。しかし最終的には掲揚の方式が詳細に定められたことで、今後の紛争を回避する道が開かれた。<sup>234</sup>

カトリックと同等の権利を求めるうえで、仏教徒側はとくに 10/59 法令を問題にした。カトリックへの適用が除外されていたからである。1963 年中ないし翌年初めをめどに新法を制定すること、またそれまではあまり厳格に現法令を適用しないことが合意された（実際の廃止は 1964 年 1 月）。<sup>235</sup>

仏教徒への恣意的な逮捕や圧迫については、政府内に省庁横断の調査委員会が設立されることになった。委員会はグエン・ゴク・ト (Nguyen Ngoc Tho) 副大統領に委ねられた。彼は仏教徒としては政府内で最高位にある人物だった。<sup>236</sup>

仏教徒代表団を率いた穏健派のティック・ティン・キエト (Thich Tinh Khiet) は、この共同声明を「新たな時代の始まり」として歓迎した。ジェム政権は「最大限の譲歩」を行ったとトルーハート米代理大使は評価している。国務省情報調査局も、おおむね政府側が仏教徒側の要求に応えたものだと分析した。<sup>237</sup> 共同声明は、アメリカの圧力が奏功した結果だと指摘されている。<sup>238</sup>

だが「もはや手遅れ」だと、仏教徒急進派のティック・チ・クアンは語った。合意成立までに時間を食いすぎていたからである。たとえば調査委員会の設置も、3 週間前だったら意味があったのだがとメクリンは残念そうである。ジェムが共同声明に応じたのは、あれこれとうるさいアメリカを黙らせるためだけで、和解と呼ぶにはほど遠い内容だったと『ペンタゴン・ペーパーズ』は分析した。<sup>239</sup>

6 月 16 日の合意成立後、ト副大統領は、その実施に際して「誤解がなければ」何の問題も生じないだろうと述べた。しかしすでに交渉過程で、グエン・ジン・トゥアン国務相はトルーハートに、具体的条項について政府と仏教徒で理解が異なっているようだと漏らしている。政府と国民の間に「意志疎通ギャップ」が存在していることは明らかだった。<sup>240</sup>

それがフエ事件の責任問題として表面化した。ジェムは犠牲者に対する補償には応じたものの、本当に重要なのは「補償問題ではなく、ベトナム政府による責任の受け入れ、そして罪を犯した官吏の処罰の両方もしくは一方」(トルーハート)が行われるかどうかだった。<sup>241</sup> 実際に事件の責任者として省知事・知事代理などが更迭された。しかし、ジェムが非を認めたのはあくまでも彼らの対処のまずさ、無神経ぶりについてであり、必ずしも政府が事件の責任を負ったわけではなかった。しかも遅ればせの対処は人々に「何の効果ももたらさなかった」、だから「もっと劇的な行動が必要」だとトルーハートはトゥアンに語っている。<sup>242</sup>

6 月末、「状況は緊迫したまま」だとホワイトハウスのフォレストは記している。

依然として双方に猜疑の念が消えず、6月16日の合意も尊重されない心配が濃厚だったからである。<sup>243</sup> この合意じたい、「ベトナム政府に誠意を示す2週間を与えた」にすぎず、ジェムがこの「猶予期間」(ボール)をどう活用するかという本当の問題はまったく手つかずだった。<sup>244</sup>

ジェムやトゥアン国務相は、トルーハートに向かって政府は合意を守ると請け合った。ト副大統領も仏教徒に対し、同様の保証を与えた。<sup>245</sup> 7月初め、『タイムズ・オブ・ベトナム』は、サイゴンは平穏だと報じ、仏教徒側の政府への信頼の表れだと解釈した。CIAも、このまま休戦状態が続けば、政府転覆の可能性も減少すると見た。<sup>246</sup> しかし仏教徒側は政府が本当に合意を実施するとは考えていなかった。政府には「すぐさま次の試験」が控えていたのである。<sup>247</sup>

政権発足から9年目の記念日にあたる7月7日、ジェムは全国向けラジオ演説で、仏教徒問題はすでに解決したと宣言した。しかし、国際共産主義の手先とその同調者が仏教徒に入り込んでいるという従来の主張を繰り返しており、これにはトルーハートも落胆を隠せなかった。<sup>248</sup> 18日、ジェムは再び放送マイクの前に立ち、紛争解決、今後の仏教徒代表との緊密協力、共同声明の遵守などの意欲を声明した。だがこのジェム演説も曖昧かつ不十分な内容で、何ももたらさなかったと批判されている。<sup>249</sup>

8月7日、ジェムはヒギンズ記者のインタビューに応じ、自分は「つねに平和的な和解政策」を貫いてきたし、その方針が逆転することはないと断言した（『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』8月15日に掲載）。<sup>250</sup> 8月半ば、政府はあらためて和解政策を確認した。記者会見に臨んだト副大統領は、政府・仏教徒双方の理解が深まったと満足げだった。<sup>251</sup>

## 2. 対決に向かう政府と仏教徒

しかし、仏教徒側との合意のインクも乾かぬうちに、ジェム政権は「催涙ガス、棍棒、空への威嚇射撃」という武器を用い始めた。公民活動省の高官の1人が、合意を「尊重するつもりも実施するつもりも政府にはない」といいきったのは、合意成立のわずか4日後だった。<sup>252</sup> 6月19日、焼身自殺したティック・クアン・ドゥックの葬儀に参加した人々は催涙ガスを浴びせられ、殴打され、そして逮捕された。6月末、CIAはジェム政権が仏教徒の要求に応じたのはあくまでも「紙の上で」のことにすぎないと分析した。<sup>253</sup>

ブイ・バン・ルオン (Bui Van Luong) 内相は、仏教徒たちが「空想ででっちあげた不正、逮捕、差別」をあげつらっているとトルーハートに語っている。ケネディは7月4日、サイゴンには、政府は合意を守る気などないのだという噂が流れているとの報告を受けた。<sup>254</sup> 1960年秋のクーデター未遂事件の容疑者たちが突然裁判にかけられたのも、政府側による威圧の手段だった。だがその1人が仏教弾圧の中止を求め

る遺書を残して自殺したため、かえって危機をあおってしまった。<sup>255</sup>

同じフエを支配するジェムの兄弟でも、トゥックは仏教徒粉砕を叫び、カンは交渉を主張した。だがこのためカンは実権を失ってしまったという。<sup>256</sup> かわってニュー夫妻の影響力がますます増大した。彼らはジェムにこれ以上の妥協を強く戒め、合意を無意味にする「意図的なキャンペーン」を展開した。<sup>257</sup> ニューは仏教徒を、カンボジアのシハヌークら「馬鹿ども」に呼応する「中立主義の陰謀家ども」とののしった。夫人も仏教徒を「殺人者ども」と呼び、彼らとの合意に応じたジェムを「臆病者」、骨なしの「クラゲ」呼ばわりする始末だった。<sup>258</sup>

サイゴンの寺院も鉄条網で囲まれたままで、僧たちの拘禁も依然続いていた。仏教徒側の逆襲に備えて大統領官邸の周囲には厳重な警戒態勢が敷かれた。<sup>259</sup> 政府はデモに対して、ときに自分勝手な解釈にもとづき、「素早すぎる」反応を見せたとノルティンは語った。だがにもかかわらず、それはいっこうに効果を上げなかった。それどころか、ジェムやニューのあまりの頑迷さに愛想を尽かした一部の官僚は、ひそかにデモ側に協力、政府内部の情報を流し始めた。<sup>260</sup>

抑圧を続ければ反対勢力に非難の口実を与え、いっそう対立を助長する。何もしなければ内外の批判を呼ぶ。和解の道を選んだところで仏教徒の要求が止まる保証はない。しかもむしろ政府の弱さの表れと受け取られ、要求をエスカレートさせる危険がある。CIAは7月初めにジェム政権が置かれた立場をこう分析した。<sup>261</sup> ほぼ1ヶ月後、ポーランドの国際監視委員会（ICC）代表マネリ（Mieczyslaw Maneli）はハノイで、いまやジェムとニューには国を出るか、力づくで仏教徒を抑えるかの二者択一しかないと言った。もちろんジェムの道は決まっていた。彼は8月7日、「戦争のさなかだというのに、市街でこのような無秩序が続くのを放置できるだろうか？われわれには何が一番大事かを見きわめる義務がある。それはすなわち戦争なのだ」と述べ、国内の安定と政府の権威の回復、法と秩序の確立を最優先する姿勢を示した。友人との会話でジェムは、これ以上デモが続くようなら、連中を「機関銃でなぎ倒してやる」と語ったという。<sup>262</sup>

仏教徒などよりはるかに強力な宗教教団をかつて粉砕した自信はジェムから消えていなかった。「同様に僧どもを打ち破れないはずがないではないか。彼らには武器も軍隊もないのに」と、彼はのちクーデターの首謀者となるズオン・バン・ミン将軍に語ったという。<sup>263</sup> 加えて、ジェムにもニュー夫妻にも、結局のところベトコンが仏教徒を利用しているのだという確信があった。とすれば対決以外に手はなかった。<sup>264</sup>

CIAが6～7月に行ったいくつかの分析によれば、政府と仏教徒の対立が続くうちに、それまで政治に無関心だった人々の間にさえ、反政府の気運が広がっていった。そもそも「宗教上の悲嘆」を是正したいとの欲求に起因していたはずの運動は、もはや「新たな政治勢力」に衣替えしていた。それはまさに広い範囲で反ジェム運動の「焦

点」だったのである。<sup>265</sup>

国務省情報調査局は8月半ばになっても、仏教徒の抗議運動はまだ穏健派の手のうちにあると見ている。だが皮肉なことに政府との合意は、急進派が主導権を握る契機となっていた。合意内容そのものへの不満に加え、その後の政府の行動に不信感が強まったためだと『ペンタゴン・ペーパーズ』は論じている。<sup>266</sup> 仏教徒たちは、もうジェムからこれ以上侮辱されたくないと、対決の覚悟を固めていたという。サイゴンからは、7月半ばまでには、「ベトナム政府転覆をめざす活動家や急進的分子」が支配的な勢力になったとの報告さえあった。<sup>267</sup>

じつは、自分たちが政府に何を求めているのか、仏教徒たちにもよくわからなくなっていたとの指摘がある。だがジェムに同情的なヒギンズ記者は、かつて預言者ヨハネの首が乗せられた「銀の皿ではなく、アメリカの旗にくるまれたジェムの首」を彼らが求めていたのだと確信している。<sup>268</sup> 実際に6月末から7月初め、仏教指導者の少なくとも一部が、ジェム政権の「抹殺」あるいは「打倒」を目標として確立した気配が感じられた。仏教徒運動は政府転覆を「唯一の目的」とする連中の手に落ちたのだとノルティングは非難する。<sup>269</sup> 当時のワシントンでも「ベトナムの仏教指導者が本当に交渉解決を望んでいるのかどうか」に疑問があり、それがサイゴンにも伝えられていた。少なくともヒルズマン極東担当国務次官補がいうように、仏教徒たちが「政治的な血の味をしめた」ことは間違いない。<sup>270</sup>

8月5日、2人目の焼身自殺（54日ぶり）を皮切りに、ほぼ数日おきに各地で焼身自殺が発生した。それは、仏教徒たちが進めてきたサーロイ寺院の「要塞化」とあいまって、自分たちは政府など信用していない、簡単には引き下がらないとの強い意思表示となった。<sup>271</sup> 18日、政府打倒の呼びかけに応じ、サーロイ寺院周辺に2万人が結集、いよいよ仏教徒デモは「手に負えなくなりつつある」とサイゴンから米陸軍省に報告された。CIAも、都市部から地方に騒擾が拡大していく可能性を懸念した。<sup>272</sup>

この年はすべてが「明確に爆発の方向に」向かっていたと、のちテイラー統合参謀本部議長は述懐している。夏になると南ベトナムの首都は「神経質な不安と噂の街」（メクリン）と化した。<sup>273</sup> すでに仏教徒と政府の間には公然たる戦争状態が存在していたという。仏教徒たちは政府にいわば政治戦争ないし神経戦を挑んだのである。<sup>274</sup> 内なる敵との戦いの中で、政府はまるで自殺を望んでいるかのようなだったとハルバースタムはいう。ある若い僧は「バナナの皮を投げてやれば彼らは滑ってしまうだろう」と自信たっぷりだった。<sup>275</sup>

### 3. 馬耳東風のジェム

合意からほぼ1ヶ月後、ノルティングは「われわれの患者は依然深刻な状態にあるが、それでも回復しつつあると思う」と楽観していた。7月下旬には、「この危機か

らじょじょに熱が逃げつつあり、この政府はこれまでの多くの場合と同様、危機を脱出できる可能性が高い」と感じていた。<sup>276</sup>それより先、6月末の時点で、CIAもまた「ジェムがこの嵐を乗り切る確率は高い」と報告している。しかし同時にそこには、政権発足後間もない1955年に彼が経験した宗教教団の反乱以来のどの場合よりも「潜在的にはより大きな危険」が存在していた。それどころか7月初め、ジェムの立場は「かつてないほど危険」な状態に見えるとフォレストは大統領に伝えている。<sup>277</sup>

この頃サイゴンを訪れたボウルズ駐インド大使は、多くの者が「ジェムは終わり」と考えており、このままでは近い将来「政治的爆発」が起きるのではとの不安を隠せなかった。彼の目には、ジェム政権は中国内戦末期、断末魔の蒋介石（国民党）政府と同じに映ったのである。かなりの暴力をとまわずには危機収束は無理ではないかと、マニング（Robert Manning）広報担当国務次官補は大統領に伝えた。かつてジェム政権支援に力を尽くしたランズデール（Edward G. Lansdale）准将は国務省のカッテンバーグに、どうやら政府は「葬式に向かって一步一步進んでいる」ようだと述べている。<sup>278</sup>

ワシントンの第1の懸念は、都市部を舞台とする騒乱が激化し、それが地方に拡大することで「戦争遂行の努力に遅滞をもたらす」ことにあった。「ジェム大統領がもっと効果的な統治を始めない限り、南ベトナムの軍事的立場の改善を助ける方法などなかった」とラスク国務長官は回顧する。<sup>279</sup>ヒルズマンがトルーハートに伝えたように、南ベトナム防衛という「アメリカの努力全体がいま危地に立たされている」とすれば、猶予はならなかった。「仏教徒危機の長期化」と「ベトコンとの生死を賭した戦い」、この2つがジェム政権とアメリカに重い課題としてのしかかっていた。<sup>280</sup>

第2に、近隣の仏教諸国を中心に、あるいは国連を舞台に、国際社会の批判が強まっていた。それは南ベトナムの国際的立場に打撃を与えるばかりでなく、「アメリカの東南アジア政策が将来成功するかどうか、潜在的に重要な影響」があった。<sup>281</sup>

第3に、米国内外を問わず、世論が「アメリカがジェムと親密な関係にあることに対してますます批判的」になっていることを考慮に入れなければならなかった。トルーハートがジェムに伝えたように、米世論は「ほとんど全員一致でベトナムの宗教状況を批判」していたのである。<sup>282</sup>

8月初めのことだが、ニュー夫人はアメリカのテレビ・インタビューで、仏教指導者なる連中がやったのは「僧侶をバーベキューにしたことだけ」で、これからも続くようなら「拍手してやる」と放言し、大反響を巻き起こしている。だがサイゴンからの報告によれば、ジェムもニューも、またト副大統領までもが口を揃えて、彼女の「私人」としての言論を封じることはできないとの態度だった。<sup>283</sup>

すでに政府と仏教徒による共同声明の直後、トルーハートはト副大統領に向かって、5月8日以降の展開が「深く、大きな傷」を南ベトナムに残したとし、ジェムが「ベ

トナムだけでなく、ワシントンでも信頼を大きく失った」ことを強調した。彼はジェムに対しても、せっかく軍事作戦や戦略村計画が「疑いのない進歩」を示しているというのに、仏教徒危機のおかげでベトナム政府への支持が国内外でともに失われるという「非常に悲劇的」な状態が出現していること、しかも「合意を破壊する意図的な努力」が見受けられることを指摘し、現状をなんとか改めるよう要求した。<sup>284</sup> 仏教徒が猜疑心の固まりになっている以上、「仏教徒にベトナム政府の誠実さを心底信じさせる」措置が肝要だった。選挙の実施、公平な裁判の保証、ジェム批判派の入閣など、広範な自由化・民主化を進めることなどである。そうすればジェムは自国民と世界に向かって精一杯の「善意」を示せるはずだった。<sup>285</sup>

逆に、ジェムが要求に応じなければ、もはや彼を支持できないことを「完璧に明らかに」する。アメリカはこうした強硬姿勢を維持した。こうしたあからさまな警告に潜む危険性はわかっていた。しかしジェムの「目の曇りを取るには劇薬が必要」なのだ、ポール国務次官はサイゴンに伝えている。過去の経験からトルーハートもまた、脅しなしにジェムにさまざまな改善を求めても、彼を「動かすどころか、かえってくつろがせてしまう」との見方をワシントンに披瀝した。<sup>286</sup> アメリカ側にいわせれば、こうした強硬姿勢もつまるところ双方の利益のため、「災厄につながる道」を避けるため、「ジェムが政府を維持するのを助けるため」の親身な助言だった。<sup>287</sup>

ノルティングは、「拍車をかければかけるほど、ジェムの歩みはゆっくりになる」と圧力戦術に異を唱えた。彼はのちになっても、「ワシントンがテーブルをがんがん叩くことから始め、ベトナム政府にとうてい無理な譲歩を要求しなかったら」仏教徒危機は解決されたはずだと信じ、ジェム政権と同様にアメリカも仏教徒問題の対処を誤ったと主張した。サイゴンで広報を担当していたメクリンも、「タフ」路線への転換が「惨めに失敗」したと述べている。その結果、ジェム政権と米大使館との関係も「破綻寸前」になった。だから「ノルティングの抑制したやり方のほうが効果的だったかもしれない」というわけである。<sup>288</sup>

6月下旬、ポール国務次官はトルーハートの強硬路線が「ジェムに現実を直視させた」との評価をサイゴンに送っている。しかしそれは、現実を歪曲したものか、あるいは希望的観測にすぎなかった。その数日前、アメリカ側の強い要求に直面したジェムは、質問をはぐらかし、何ひとつ行動を提案せず、また反駁することもなく、アメリカはむしろ「ラオス情勢のほうを心配すべき」ではないかと皮肉った。27日、再度のトルーハートとの会見は大部分ジェムの「独白」に終わり、ジェムは「外からの圧力から守られた方が」仕事が速く進むと主張した。さらに7月3日、米国内世論の問題を持ち出すトルーハートに向かってジェムは、それは「まったく不正確な、しばしば誇張された報道と情報のせいが大部分」だとし、「アメリカ政府がきちんと正すべき」問題だとそっけなかった。<sup>289</sup>

その後も一貫してベトナム側は、仏教徒問題は「国内的性格」の問題だという立場をとり続けた。ケネディがカンボジアのシハヌークに伝えたように、アメリカも南ベトナムの仏教徒問題解決を祈念しつつ、しかし「内政干渉は不穩当」だという立場をとらざるをえなかった。だが実際には、アメリカはおためごかしにジェムが行うべき演説の内容にまで口を出していたのである。<sup>290</sup>

ジェムはトルーハートの面前では「どのようなアイデアでも喜んで考慮する」と応じた。たとえば6月末にはこういつている。自分には「国土を底から民主化する計画」がある。「2、3年のうちには完全な民主主義と自由が期待できるだろう」し、そのために実際に政府は「民主化と個人の自由に向けて、ありとあらゆることをやっている」のだ。ベトナムは「すぐに東南アジア全土の民主主義の模範」となるだろう。

もっとも、彼のいう「民主化革命」の担い手はニュー夫妻が指揮する共和国青年団と女性連帯運動だったから、たいして真実味はなかった。それは、民主化を求めるアメリカの提案を尊重するという意味でもなかった。民主化を進めるのならジェム流でやる、アメリカはいっさい口など出すなという強固な意思表示だったのである。<sup>291</sup>

実際問題として、仏教徒との和解さえこれ以上進める気のないジェムが、より広範な民主化要求を受け入れるはずなどなかった。CIAは6月末、ジェムが「国内政治の支配権を傷つけるような助言を受け入れる可能性はまったくない」し、広範な社会・政治改革を求める勧告にはあくまで抵抗するだろうと見た。実際に同じ頃ジェムは腹心のトゥアン國務相に、アメリカが「自分の基盤を掘り崩そうとしている」と不信感をあらわにした。<sup>292</sup>

8月7日、『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』のヒギンズ記者のインタビューに応じたジェムは、戦争が終われば国を挙げて民主化に努めるつもりだが、「西欧的民主主義」は、「死活を賭した闘いのさなか」にあるベトナムでは無理だと断言した。もしベトナムを「糸のついた操り人形」のようにベトナムを扱うのなら、アメリカもフランスと同じではないか。盲目的に西洋のやり方を模倣したところで、アジアの解決法にはならない。西洋人のいう民主主義を実践しているアジアやアフリカの国を1つでも挙げてみるがいい。しかもベトナムは後進国で、戦時中なのだ。そもそもアメリカ人はこの共産主義との戦争をどこまで理解しているのか？……。ジェムの怒りはとどまるどころを知らなかった。<sup>293</sup>

ジェム以上に苛立ちを見せたのは「個人として長年、アメリカに敵意と疑念を抱く」人物、ニューだった。彼の意を受けた『タイムズ・オブ・ベトナム』は「アメリカと仏教徒への明らかな挑戦」を本格化させていく。<sup>294</sup>トルーハートは7月2日、トゥアン國務相に、「もうどうしようもない」と苛立ちをぶつけた。トゥアン自身、自分もトルーハートもすでに「あらゆる弾丸を撃ち尽くした」以上何もすることはないと嘆息した。<sup>295</sup>7月4日、CIAの分析は、仏教徒問題の「将来の針路は、ほどなくベトナム

ム政府の行動によって大部分が決まる」と判断した。つまりアメリカには何もできないということである。この頃、任務を終えて出国する大尉に向かってある大佐はこう言い放っている。「帰国が間に合ったな。こっちは全部が崩壊していくところだ」。<sup>296</sup>

これらはいずれもジェムに対するアメリカの敗北宣言だった。同時に、堪忍袋の緒が切れたアメリカの、ジェム政権との手切れ宣言でもあった。メクリンによれば、アメリカは「狂人の政府」を相手にしていたのだとシュレジンガーは伝えている。しかもそう感じるのは彼1人ではなかった。ジェム政権と同時に、アメリカ=南ベトナム関係そのものが基地に陥りつつあった。こうしてコルビーがのちに述べたように、南ベトナムの紛争は共産主義者との戦いというより、むしろ「南ベトナム人対アメリカ人」の、そして「アメリカ人同士」の、つまりジェム支持派と反対派の戦いに転じていくのである。<sup>297</sup>

#### 4. 新大使ロッジ登場

1961年5月の着任時からノルティングの任期は2年と決まっており、彼自身も帰国を望んでいた。遅くとも4月末には後任の選定が始まっている。<sup>298</sup>しかしより重要なのは、5月8日以降、事態が急変して後もこの路線に変化がなかったことである。つまり5月末にアメリカが穏やかにジェムと接するのを止め、トルーハートが新方針にもとづく行動をとる以前から、ノルティングは無用の人材だった。ワシントンはかなり早い段階で、事実上対ジェム和解・説得路線に見切りをつけていたのである。

1963年早々、ヒルズマン極東担当国務次官補と、国家安全保障会議の一員フォレストルによる現地の視察報告は、アメリカがこれまでのところ「われわれが擁護する政策を採用するようジェムを説き伏せる目的で、その影響力をすべて活用しているわけではない」と指摘した。ノルティングの怠慢ぶりを糾弾し、それを梃子にジェム全面支持政策の転換を求める攻勢がこうして始まる。<sup>299</sup>積極的にノルティング更迭を目指す動きも表面化した。ボウルズ駐インド大使は3月初め、「わが国の政策変更を象徴するもの」としてノルティング交替を大統領に進言している。「ジェム支持政策とあまりに一体化」(コルビー)した大使を除くことは何よりも急務であり、またジェムに対する明確なメッセージとなるはずだった。<sup>300</sup>

しかもノルティングには不幸なことに、ケネディ政権はジェムを動かせぬ責めを彼ひとりに負わせた。こともあろうに「ジェムと結婚」(ヒルズマン)したような、少なくとも「ジェムの虜囚となっていた」(ハリマン)人物が大使の座にいては、アメリカの影響力などともに機能するはずがない、というわけである。<sup>301</sup>ノルティングはまた、最後までアジアについて何も理解しなかった、最初からケネディの選定ミスだったと散々な評価を受けた。<sup>302</sup>

ケネディ自身は、ノルティングに同情的で、また彼を信頼していたとギルパトリッ

ク (Roswell L. Gilpatric) 国防長官代理は述懐する。ケネディは7月初め、ノルディングが赴任した一昨年5月、「われわれとジェムの関係がどうしようもないほど最低点にあった時から戦争の流れを逆転するのは奇跡に近い」といえる状況では、ノルディングは「素晴らしい仕事をした」と語っている。<sup>303</sup> だがそれでもベトナム情勢が混迷の度を強めるにつれ、ケネディはノルディングをサイゴンに送ったことが間違いだったと考えるようになったという。シュレジンガーによれば、大統領はとくにノルディングが仏教徒危機のさなかに休暇をとりベトナムを離れたことに苛立ちを覚えていた。加えて焼身自殺(6月11日)の衝撃がケネディを待ったなしの状態に追いやった。それがカッテンバーグのいう「超親ジェム」期の終焉をもたらしたのである。<sup>304</sup>

ベトナムのような状況には「普通でない経験を持った、非凡な人物」が必要だったと、戦略村計画を担当していたフィリップスは述懐している。新大使候補として、経験豊かな外交官ガリオン (Edmund Gullion) の名が挙がった。ケネディが下院議員時代の1951年、インドシナ訪問時に接触し、その見識に非常な感銘を受けた人物である。だがもっと大物がよいとラスク國務長官が反対した。彼が白羽の矢を立てたのがロッジである。<sup>305</sup>

ロッジはフランス語に堪能で、ジェムらとの意思疎通が容易と思われた。国連大使など外交経験もあった。サイゴンのアメリカ側組織を束ね、とりわけ軍と密接に協力していくうえで、ハーキンス軍事援助司令官と長年の知己であることも見逃せなかった。マンスフィールド民主党上院院内総務は大統領に、この「素晴らしい決定」を称賛した。<sup>306</sup>

ロッジはケネディ個人としても魅力的な選択肢だった。彼は1952年、ケネディを相手にマサチューセッツ州選出上院議員の地位を失い、60年大統領選挙でも副大統領候補としてやはり一敗地にまみれた人物である。こうした因縁の相手に重要な地位を提供することで、ケネディは政治家としての雅量を示そうとしたのだという。<sup>307</sup>

ケネディはロッジをサイゴンに派遣すれば「共和党の連中を黙らせることができると思ったのだ」と、ケネディの隣人だった『ニューズウィーク』編集長ブラドリーは述懐している。つまり1964年の大統領再選をにらんでベトナム政策への批判を封じ込めるためである。だからそれは「政治的にはよい任命」だったと、ラオス問題などで活躍した外交官サリバン (William Sullivan) はいう。だがコルビーによれば、「ベトナム問題を民主、共和の党派論争の種にすることは避けられても、米政府部内と国内に荒れ狂うジェム賛否論争の激しさは和らげられなかった」のである。<sup>308</sup>

ケネディはベトナム政策の彼方に暗雲をはっきりと予見し、その際は共和党にも責任の一端を負わせたいと考えていたという。「ベトナムのような絶望的なごたごたに放り込んで、ロッジを台なしにしてやりたい」と彼は側近に冗談交じりに語っている(もっとも大統領の弟ロバートは、「その時は勝っていた」)のだから、そうした配慮の

必要などなかったというが)。<sup>309</sup>

ロジ自身、強くこの地位を望んでいた。第1に、困難さのゆえにベトナムでの任務に強い魅力を感じたからである。<sup>310</sup> 第2に、うまくいけば内外の注目と称賛を浴び、いずれ大統領への道も開ける可能性があった。実際にケネディ暗殺直後の世論調査では、共和党内でニクソン前副大統領、ゴールドウォーター (Barry M. Goldwater) 上院議員に次ぐ支持を集めている。<sup>311</sup>

ケネディはロジを選んだ時点ではまだ確固たる新政策を持たず、ベトナムでの今後についてもはっきり心を決めていなかったため、とくにロジには具体的な指示を与えなかったといわれる。<sup>312</sup> だが、「対ジェム制裁のスイッチを入れる」には、ロジが持つ力強さはぴったりだったとメクリンはいう。だからこそハリマンやヒルズマンら対ジェム強硬路線派がこれを支えたし、こうした國務省からの圧力が、ケネディを動かすにいたった。ノルティングに同情的だったギルパトリックが、それでもこの人事を「たぶんかなりよい選定」だったと感じたのもそのためである。<sup>313</sup>

ロジ自身の回顧によれば、派遣直前、大統領は彼に僧侶の焼身自殺の写真を示し、「ジェム政府は最終段階に入りつつあるようだ」と懸念を表明した。だがじつのところ、最終段階に入っていたのは、ケネディ政権の対ジェム政策、そして両政権の同盟関係そのものだった。ボウルズはニューデリーから、「ジェムとその一族がベトナムを統治する限り、東南アジアでわが国の目標を達成することはできない」と警告した。同時に彼は、ロジが「何がしかの魔術で状況を根本から変えられると考えるのは間違い」だとも述べている。この不吉な予見は、ほどなく現実のものとなっていく。<sup>314</sup>

6月27日、新大使任命が発表された。ノルティングは欧州から帰国の船上、ラジオニュースでこれを知った。7月初めに帰国直後、ニューヨークで講演を行った際には、聴衆のほうが自分よりベトナム情勢をよく知っていたと彼は述懐する。<sup>315</sup> ジェム政権にロジ派遣の AGREMAN (正式な赴任受け入れ) 要請は20日。ジェムが新大使派遣に同意したのは22日。だがその直後、トゥアン國務相はトルーハートに、アメリカの圧力を感じ取ったジェムは「最大級の頑迷さ」で対抗するだろうと語っている。「ロジを10人でも送ってくるがいい。だが私は自分もこの国も侮辱させはしない」とジェムはその意気込みを示した。<sup>316</sup>

建前としては、「共産主義者の攻撃に対抗するベトナムの政府と国民を支援するというアメリカの一貫した政策には変化はない」とされた。だから新大使は「ベトナムを支援し、ベトナム政府と完全かつ効率的に協力するというアメリカの政策を実施」していくはずだった。<sup>317</sup> ロジはノルティングへの引き継ぎで、長期的なアメリカの政策には変更はないと請け合った。ノルティングも、大使交替が政策変更を意味しないとジェムに保証した。だが当のジェムはまったく信じようとしなかった。<sup>318</sup>

ロジはアイゼンハワー政権下で国内の人種差別問題への積極的な取り組みを主

張し、またアフリカ諸国との友好関係樹立にも熱心だった人物だとの評価もある。<sup>319</sup> だが一方、アジアでの経験が皆無で、大使として事態を判断する十分な基礎を持たなかったこと、ベトナムという土地柄をまったく理解していなかったこと、国連大使時代にも発展途上世界への関心も、そこで勃興する民族主義への理解もまるでなかったことなどが強く批判されている。ただし、たとえそうにしても、大きな外交問題として浮かび上がりつつある場所にそうした人物を新大使として送り込んだ責任は、ほかならぬケネディにある。<sup>320</sup>

結果的に、ロッジは問題解決に貢献するどころか、事態を悪化させただけだと批判されている。ハーキンス司令官は、ノルティングが出国しなかったら「状況はもっとよかったはず」だという。<sup>321</sup> ロッジは筋金入りの一匹狼で、他人の助言を容易に受け入れず、部下を管理するすべも十分備えておらず、そのつもりもなかった。唯我独尊のロッジはまるで「総督」だとニュー夫人やノルティングは皮肉っている。<sup>322</sup> ジェム政権相手ならまだしも、アメリカ側にも「意志疎通という明確な問題」(ギルパトリック)が発生していた。最も重要なパートナーであるはずのハーキンス軍事援助司令官との間は断絶状態。大統領が何かを尋ねてもろくに返事を寄こさない有様だった。<sup>323</sup>

ケネディ兄弟は、ロッジ派遣後ほどなくその更迭を考えたがロバートは述懐している。<sup>324</sup> だが大統領はロッジにきわめて大きな自由裁量権を与え続けた。辞任でもされれば、この政権内の「歩く政治的地雷」(ヒギンズ)を踏む羽目になってしまうからである。<sup>325</sup> マクナマラ国防長官は「国務省を管理できず、ロッジを監督できなかった」と、ラスク国務長官を批判する。しかしそれもケネディが政治的思惑を優先するあまり、「民主党政権の管理下にない」(コルビー)人物を送ったからである。<sup>326</sup>

## 5. 最後の努力もむなし

ケネディ・ジェム両政権の本格的決闘に先だつ、いわば最後の幕間の主役となったのはノルティングである。ワシントンでの協議を経て、彼は7月11日に再びサイゴンの土を踏んだ。ロッジ着任はまだ1ヶ月以上先の予定だった。最後にもう一度ジェム説得を試み、同時に彼のアメリカへの信頼を回復しようというわけである。<sup>327</sup>

トゥアン国務相は、いまやノルティングとジェムの「個人的友好関係」だけが頼みだとし、できるだけ早く彼をサイゴンに戻して欲しいとアメリカ側に働きかけていた。だがワシントンではフォレストルが、ジェムがアメリカは今後も自分を支持するものと受け取るのではないかとの危惧をぬぐえなかった。ノルティング自身のちに、ハリマン政治担当国務次官ら反ジェム派はいまさら自分の出番を好まなかったし、実際にサイゴンに戻る際には国務省内に歓迎の声などまったくなかったと語っている。<sup>328</sup>

7月28日、ノルティングはUPIとのインタビューにこう答えた。「私自身、きわめて率直にいわせてもらえば、当地での2年半の勤務の中で宗教迫害の証拠などただの

一度も見たことがなかった。実際のところ、ベトナム国民のあらゆるレベルで、かなりの程度宗教的寛容が見受けられると感じている」。それは「アメリカ＝ベトナム間の協力の破片を拾い集める」努力の一環だった。<sup>329</sup> ジェム政権がこれに手放しで喜び、仏教徒側が猛反発したのはいうまでもない。ワシントンでは激怒したハリマンが、ノルティングをすぐに呼び戻せとわめきたてた。<sup>330</sup>

ノルティングは、ジェムが「仏教徒の扇動について抱く怒りと疑念には十分な根拠がある」のだとワシントンを説得しようとした。少しのち、ワシントンへの帰任後にも、「これは宗教迫害の問題ではない。仏教徒は迫害など一度もされていない」と力説し、ジェム政権の行動は「仏教の名を借りた政治運動」の排除なのだとした。この年夏にサイゴンを訪れたヒギンズも同じく、ワシントンで受けた説明と違い、仏教徒とカトリックが緊密に協力しあっているさまを見て驚いたと述べている。<sup>331</sup>

ノルティングのやり方は以前と変わらなかった。ジェムを「十分リラックスさせて船の舵を取らせ、正しく意味のある針路に向かわせる」こと、「静かに働きかける」ことが大事だ。したがって「アメリカとベトナムの分裂の脅しを繰り返すべきではない」。少なくともジェムはようやく仏教徒との和解への道に明確にコミットしたのだ。その方向に向けてベトナム政府をさらに支援しなければならない。こうした努力の結果、とくに最後の時期になって「たがいの尊敬と個人的信頼」が戻り、ジェムが説得によく反応するようになったとノルティングは回顧する。<sup>332</sup>

しかしそれは事実を反映していない。ジェムは、ベトナムはもう「20年も熱い戦争」をしているというのに、今になって友人、つまりアメリカから「ベトナム政府と国民を相手にした冷たい戦争」が仕掛けられるとは何事であるかと激怒した。ニューもアメリカ側関係者に、「ジェム大統領は多くを約束しないが、数少ない約束は時間をかけて熟考の末に行ったものだ。だが一度約束したらそれは完全に尊重されるのだ」と請け合った。後は自分たちに任せて口を出すな、といわんばかりだった。<sup>333</sup>

ラスクはノルティングに、「仏教徒の正当な苦情にきちんと対処すべく、行動や声明によって事態を解決するよう、ジェムに圧力をかけ続けることが肝要」だと指示した。ノルティングはこれに対していま少しの静観を求めつつ、ジェムに向かっては「政治的危険の融解に最もかなうような政策と行動」を求めた。離任間近いある日にはこう語っている。「あなたはどうするか決めなくてはならない。それもきっぱりとだ。アメリカに関する限り、あなたは和解政策を堅持し完全に実施すること、そしてそれを何らかの形で公けに示すことが必要だ。さもなくば、アメリカはあなたを支持できない」。<sup>334</sup>

ノルティングの再登場が無意味とも思える高圧的な発言だった。それは彼とジェムが置かれた切迫した事情の反映である。「ジェムがすぐに適切な行動をとらなければ、ベトナム政府の宗教問題への対処を強く批判する声明を出さなければならない」とラ

スクはサイゴンに伝えた。彼は8月16日の記者会見で、アメリカは仏教徒問題の悪化に「非常に落胆」していると述べた。<sup>335</sup>

ノルティング出国間際の8月12日、ジェムはアメリカの助言を受け入れ、仏教徒との和解をあらためて声明すると約束した。ノルティング出国にあたって『タイムズ・オブ・ベトナム』は、彼を「信頼と理解の時代の象徴」と称賛した。しかしノルティングは、いかに尽力しても、自分が「2年半の間、慎重に築き上げてきた信頼は戻らなかった」と述懐する。<sup>336</sup> もはや両国は「合同事業のパートナー」と呼ぶにふさわしい状態ではなくなっていた。マンスフィールドはケネディに、ベトナムですでに「賽が投げられたというわけではないが、それに非常に近い状態」だとの見方を伝えた。<sup>337</sup>

ジェムは彼の献身に報いるべく、新設の戦略村を「ノルティング村」と命名した。だが不幸なことに、記念式典の前日、米軍ヘリの誤射で農民数人が負傷し、当日にはノルティングを護衛するトラックが子供に怪我を負わせた。この事件は、大使の車が子供を轢き殺したと誤報され、少なからぬダメージを残した。しかもノルティング村はほどなくゲリラに蹂躪されてしまう。ノルティングのサイゴンにおける最後の日々は「触る物すべてが砂になっていくよう」だったとメクリンは描写する。<sup>338</sup>

8月15日、ノルティングはベトナムを去った。彼はぎりぎりまで出国を延ばそうとしたが、ワシントンに拒否された。とくにハリマンやヒルズマンは1日も早くノルティングをベトナムから出そうと懸命だった。<sup>339</sup> コルビーによれば、アメリカには2人の大使を同時に赴任先に置かない伝統があるからだった。だがその頃、仏教指導者たちはジェム政権転覆など「時間の問題」だと確信しているように見えた。<sup>340</sup> ケネディ政権はこの重要な1週間を大使不在のうちに迎えるのである。

## 第4章 襲われた寺院

### 1. ついに武力を発動

仏教徒危機の「クライマックス」は突然やってきた。それもきわめて「暴力的なドラマ」で幕を開ける。<sup>341</sup>

8月20日深夜、ゴ・ジン・ジェム大統領は戒厳令の発布を決定した。翌朝6時、彼は全国に向かってラジオでこう宣言した。自分は3ヶ月半の長きにわたり仏教徒問題の解決に尽力してきた。だが治安と秩序の回復、国家防衛、共産主義打倒、民主的自由の確立などのため、いまや戒厳令が必要となったのだ。軍も、「封建主義者・植民地主義者・共産主義者の仲間となってわが国を危険に突進させようとしている連中」を相手に戦うよう、国民に向かって呼びかけた。<sup>342</sup>

戒厳令のもと、軍は治安維持に全責任を負った。午後9時～午前5時が外出禁止となったばかりでなく、必要ならいつでも法律の適用を停止できることになった。集会

も、印刷物の刊行も禁止され、報道は完全に軍の管理下に置かれた。空港は閉鎖され、民間航空機の発着が禁止された。<sup>343</sup>

戒厳令の実施はごく短期間のはずだった。チャン・バン・ドン将軍は、2～3日であらゆる制限はなくなるだろう、最大限でも8月末に予定の選挙までだと述べている。戒厳令下で行われても「自由な選挙とみなしてもらえない」からである。ちなみに、ハーキンス軍事援助司令官はこれに「まるでこれまで自由選挙があったような言い方だが」とコメントしている。<sup>344</sup>

戒厳令発布は、より重大な、もう1つの事件をともなっていた。20日深夜から翌日未明にかけて、サイゴンのサーロイ寺院をはじめいくつかの寺院が急襲されたのである。だが逮捕者は1400人に及び、数十人の僧侶が負傷、各地の寺院は一気に封鎖されるという、かなりの規模の行動だった。作戦の目的は「仏教徒の騒乱を効果的に組織し継続する能力を持つ、少数の仏教指導者の身柄を確保」することにあった。<sup>345</sup>

攻撃を受けた寺院は合計12カ所。ベトナム全土に散在する4800近い寺院からすれば、ほんのわずかにすぎないと、『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』のヒギンズ記者はジェム政権を弁護している。本当に破壊されたのはサーロイ寺院だけだとジェムもうそぶいた。「連中は仏塔の上から人々の頭上に物を落としているから」というのが愚にもつかぬその理由である。<sup>346</sup> 政府は、寺院襲撃には何の問題もないという立場だった。逮捕者はきちんと面倒を見ているし、大部分はほどなく釈放したというわけである。<sup>347</sup>

行動の理由として第1に、大統領の弟で政治顧問のニューは、仏教徒どもの無数の活動が「宗教と関わりなどなく、政府の転覆と国家の治安攪乱をめざしている」ことを挙げた。ジェムも、僧侶たちは「狂乱と騒擾という荒々しい空気を意識的に作りだした」のだと仏教徒側に責めを帰した。実際に、仏教徒側にも政府との協力を呼びかける動きがあったのだが、若い僧など、すでに政府不信に凝り固まった人々が従おうとしなかったといわれる。<sup>348</sup>

ニューは指揮下の共和国青年団に対するラジオ放送で、サーロイ寺院こそ世上に「混乱をもたらす拠点」だと断言した。『タイムズ・オブ・ベトナム』はそれを共産党の組織にならって「サーロイ政治局」と呼んだ。ヒギンズも、そこは「聖なる場所」どころか反ジェム運動の「政治的司令部」だったと批判している。ヒルズマン極東担当国務次官補によれば、フエではチュダム寺院がサイゴンにおけるサーロイ寺院と同様の役割を担っていた。<sup>349</sup>

サーロイ寺院などの内部からは、およそ信仰の場にふさわしくない物品が多数発見された。短剣、機関銃、プラスチック爆弾、地雷、通信機、手投げ弾(塩・胡椒・チリソース・赤唐辛子・カレー粉などで製造したもの)などである。もっともチャン・バン・ドン将軍の回顧によれば、「発見」された武器の一部は警察がこっそり持ち込んだものだった

た。<sup>350</sup>

第2に、ジェムは相変わらず、仏教指導者が共産主義者の影響を受けていると考えていた。政府にとって僧侶とは、「黄色の服を着たアカ」つまり僧服に身をくるんだ共産主義者にほかならなかったのだという。<sup>351</sup> テイラー統合参謀本部議長も同じ見方だった。ハーキンス将軍も、仏教徒や学生の中に共産主義者が多数浸透しているとワシントンに報告した。<sup>352</sup>

CIAの分析でも、仏教指導者内部へのベトコンの浸透はたしかに「ありうる話」だった。サーロイ寺院からは大量のベトコンの文書も見つかっている。<sup>353</sup> ラジオは仏教徒組織内部で「恥知らずにも共産主義の手先として活動している裏切り者」をあぶり出そうと国民に呼びかけた。<sup>354</sup> だがじつのところ、確たる証拠などほとんどなかったようである。しかもいくつかの報告では、民族解放戦線はせつかくの政情不安につけ込むのに失敗しているようだった。<sup>355</sup>

8月20～21日の行動は、仏教徒に対する「宣戦布告」(メクリン)だった。少なくとも、アメリカの「強硬な助言」にもかかわらず反対勢力を「力で抑圧する決意」は、太平洋を越えてアメリカにも明確に伝わった。<sup>356</sup> ジェムは英大使館員の1人に、仏教徒のデモが共産主義者に有利な不穏な状況をつくりだしており、このまま放置するわけにはいかないと説明している。CIAによれば、ニューはこれ以上仏教徒に譲歩をすることが政府の弱さの表れに見えるのを何よりも恐れた。<sup>357</sup> 抗議運動を最小限にとどめられるという楽観もあり、この「外科手術」——ニュー夫人の言によれば「浄化作戦」——に踏み切ったのである。<sup>358</sup>

軍事的見地からいえば、作戦は大成功だった。メクリンは寺院襲撃が「ベトコンとの衝突ではまず見られないほどてきぱきと」実施されたとし、その相違の理由を「たぶんベトコンなら撃ち返してくるから」だとのちに皮肉っている。1週間後、ジェムは「仏教徒問題はいまや完全に解決された」と豪語した。<sup>359</sup> ハーキンス司令官によれば、24時間もしないうちに軍は秩序を確立し、完全に状況を支配していた。夜間外出禁止の時間帯も、24日には午後11時以降に短縮された。<sup>360</sup>

しかし政府と仏教徒の和解の道はこれで完全に断たれた。政府への国民の支持も大きく損なわれた。だから寺院襲撃は「ジェム体制の終わりの始まり」だったとロジは回顧するのである。<sup>361</sup> 5月以降、政府が着実に歩んできた自滅への歩みがこうして一挙に加速した。ジェムやニューはサーロイ寺院などを舞台に勝利を得たかもしれないが、結果的にはより多くを失ったのである。

## 2. ニューと軍の暗闘

軍首脳が戒厳令計画を立案したのは8月10日頃。18日夜、10人の将軍が打ち揃ってジェムに面談、決断を要求する。ブイ・バン・ルオン内相によれば、彼らは20日

にも再度、戒厳令を求めてジェムを「一日中責めたてた」のである。<sup>362</sup> 全権を委任されなければ治安に責任はとれないと迫る彼らに、ようやく真夜中になってジェムも折れた。<sup>363</sup>

軍首脳が戒厳令をこれほど必死に求めたのには理由がある。第1に、ゲリラと戦う自分たちの「後方地域の治安を確保するため」だった。これ以上の騒乱の拡大は何としても防がなければならなかったのである。<sup>364</sup> 仏教徒危機が生み出した都市の不穏な状況は「国土の安全にとってもベトコンとの闘いのうえでも、潜在的には重大な脅威」視された。ハーキンズ司令官も、「自分は軍の権力奪取に賛成するわけではないが……事態が制御不能となりつつあるのは明らかであり、なんらかの権威的方法を確率する必要があった」と彼らを弁護している。<sup>365</sup>

第2に、チャン・チエン・キエム (Tran Thien Khiem) 将軍によれば、仏教徒危機があと数週間も続けば、軍内部の士気が著しく低下することは間違いなかった。「袋小路の長期化」が軍全体の士気にもたらす悪影響は、当然のことながら軍首脳の強い関心事だった。<sup>366</sup> もっともある米陸軍の将軍は、戒厳令が続くことがむしろ士気低下につながると見ていたが。<sup>367</sup>

第3に、それは権力への第一歩でもあった。ジェムは依然状況を掌握しているように見えたが、グエン・ジン・トゥアン国務相にいわせれば、彼の決定はすべてドン、ジン両将軍の手を経た情報にもとづいていた。だから法的には大統領の命令でも、実際には軍が実権を握ったも同然だった。<sup>368</sup> それまで軍はジェムのやり方に批判的だったし、仏教徒が兵士の大部分を占めていたから、今後ジェムが仏教徒問題への対処でどこまで彼らを頼れるかも「まったく不明」だと国務省情報調査局は結論づけた。<sup>369</sup>

ニューは自分が「戒厳令とも寺院襲撃とも無関係」だと述べている。だが彼が戒厳令発布の「予備的な段階で関与」した可能性は早くから取り沙汰されていた。<sup>370</sup> 早くも8月初め、彼は宗教的な反政府勢力への反撃の可能性を示唆し、具体的行動の1つとしてサーロイ寺院の破壊を挙げていた。<sup>371</sup> 夫人を使って反仏教徒運動を展開したのも、行動を求める将軍たちをジェムに引き合わせたのも、すべて仏教徒粉砕のため練りに練られた計画だったとの情報もあった。寺院襲撃直後、彼は「仏教徒とアメリカ人に教訓を与えてやった」のだと語ったと伝えられる。<sup>372</sup>

寺院襲撃事件後ほどなく、その実行犯は当初いわれた軍ではなく、秘密警察と特殊部隊だったことが判明した。特殊部隊は空挺部隊の軍服を着て偽装のうえ行動に出たのである。<sup>373</sup> 現政府に代わりうる唯一の存在である軍に責めを負わせ、せめて政府と同程度の汚名を着せることはニューの利益にかなっていたからである。<sup>374</sup>

米国務省はほどなく、戒厳令は軍の主導によるものだが、寺院襲撃は軍とは無関係に秘密警察と特殊部隊が行ったとの結論に達した。これを受けてフォレストは大統領に、ニューが「対仏教徒作戦全体の背後にいる黒幕」だと報告している。<sup>375</sup> 25日、

国務省は全世界の米代表部に、「諸外国の政府が、戒厳令の宣言と仏教寺院の襲撃を区別することが重要だと考える。この2つは別物であり、違う部隊によって行われたからである」と伝達している。2日後にも、寺院襲撃に「軍はまったく関与していない」ことを再確認した。<sup>376</sup>

秘密警察も特殊部隊もニューの指揮下にあり、とくに後者は大統領から直接命令を受けるため軍の管理下になかった。それは事実上ニューの「私兵」だったのである。だから今回の行動は、ケネディがお気に入りの特殊部隊「グリーンベレー (Green Berets)」を使って黒人を弾圧したようなものだとされる。<sup>377</sup>

8月21日を境に、ニューの権力は大幅に増大したといわれる。いや、襲撃が行われたことじたいがニューの勢威を示す確かな証拠だとされた。<sup>378</sup> 寺院襲撃をジェム自身が知っていたかどうかも定かではなかった。この事件がニューによる「8月20日のクーデター」と呼ばれるゆえんである。<sup>379</sup>

軍は、寺院襲撃などまったく知らなかったという態度を維持した。<sup>380</sup> だがもしそうなら、首都近辺を掌握したトン・タト・ジン (Ton That Dinh) 准将が寺院襲撃直後、「怪我人が2人出ただけ」の「治安維持活動・警察活動」だったとそぶいたことや、彼がこの行動は軍の責任で行ったものと言明、自分は仏教徒、共産主義者、そして外国の干渉から祖国を救ったのだと大見得を切ったことの説明がつかない。<sup>381</sup> ごく一部の将軍 (たとえばジェムお気に入りのジン将軍) には事前に知らせがあり、少なくともその黙認があったとも見られた。<sup>382</sup>

じつは軍も行動に移る予定で戒厳令を求めたのだが、ニューの特殊部隊に先手を打たれてしまったのだという説もある。トゥアン国務相が「ニューは軍をうまくひっかけた」と語り、またレ・バン・キム (Le Van Kim) 将軍が軍は「トリック」にかけられたのだと述べている。チャン・バン・ドン将軍も自分たちは「政府にだまされた」と述懐している。<sup>383</sup> 逆に、寺院襲撃はあくまで軍の責任であり、ニューに責めを負わせるのは逆に歴史の歪曲だと主張する者もいる。<sup>384</sup>

いずれにせよ事件直後、内外で軍を非難する声が高まったのはいうまでもない。ドン将軍のように、寺院襲撃後「軍服を着るたびに恥ずかしい思いをした」者もいた。キム将軍は国民が「軍にそっぽを向いている」ことに焦り、早く真相を明らかにしない限り「共産主義者との戦争に重大な障害」が出ると懸念した。当然のことながら、軍内部で政府、とくにニューへの憤りが強まった。<sup>385</sup> 一時的な勝利と引き換えに、ニューは軍との関係においてもみずからの首を絞めたのである。

### 3. いよいよ高まる危機

あるベトナム人外交官によれば、今回の事件は1956年の「ハンガリー動乱の鎮圧と同じくらい衝撃的」だった。<sup>386</sup> プー・バン・マウ外相は抗議のため剃髪、辞任した。

だがジェムは彼の辞表を受理せず、病気による休暇の形にした。マウはインドに向けて出国するはずが逮捕、自宅監禁の憂き目にあう。<sup>387</sup>

ワシントンでは、駐米大使と国連駐在オブザーバーをつとめるチャン・バン・チュオン夫妻が辞任した。2人はニュー夫人の両親である。こちらは怒ったジェムが辞任を認めず「解任」した。<sup>388</sup> チュオンは、ジェムが権力を握る限りベトコンに「勝てる可能性など100に1つもない」と断言した。夫人は赴任直前のロッジ新大使に向かって、ジェムとニュー夫妻は国を出なければいずれ殺されると予言していた。<sup>389</sup> 娘であるニュー夫人は父を「臆病者」と、母を「狂信的仏教徒」と痛罵した（ただし仏教についての知識は「5歳の子供のほうがまし」だと付け加えた）。<sup>390</sup>

グエン・ゴク・ト副大統領も「早い時期に政治から身を引きたい」「もうこんなことは続けられない」などと漏らしていた。<sup>391</sup> 事件直後のトゥアン國務相もトルーハートの目には「まるで打ちのめされた人間」のように見えた。<sup>392</sup> 抗議の剃髪はマウだけではなく、ジェムの周辺でもあいついで職を辞する者が現れた。政府の仕事は事実上止まり、ある閣僚などはしかたなく推理小説を読みふけていたという。<sup>393</sup> 南ベトナムに「政府」と呼べるものは、事実上もはやジェムとニュー夫妻くらいしか残っていなかったのである。

寺院襲撃の翌日、ハーキンス将軍はテイラー統合参謀本部議長とフェルト (Harry D. Felt) 太平洋軍司令官にあて、ジェムは急速に状況を制御できなくなりつつあるようだと書き送った。<sup>394</sup> サイゴン情勢がはらむ「微妙さ」と「危険」はワシントンにも余すところなく伝わった。ラスク國務長官は全世界の米代表部に対し、「流動的で急速に変化しつつある」南ベトナム情勢について警告を発した。<sup>395</sup> ロバート・ケネディ司法長官はのちに、8月末以降、情勢が「大きく漂流し始めた」と述べている。現状の不安定さはむろん、それが「今後につながる第一の段階」にすぎないことが、より大きな問題だった。<sup>396</sup>

8月21日を境に、サイゴンは「恐怖の都市」と化したと『ニューヨーク・タイムズ』のハルバースタム記者は述懐している。メクリンはのちにそれを「狂気じみた不思議世界」と呼んだ。<sup>397</sup> 戒厳令直後、在ベトナム米政府関係者の家族には自宅から出ないよう、また公用外出に際しては群衆を避けるよう警告が与えられた。政府関係者、民間人を問わず、ベトナムへの旅行は控えるよう求められた。<sup>398</sup> 万一に備えてアメリカ人の緊急脱出計画も練られ、沖縄には海兵隊2個大隊が24時間体制で待機した。<sup>399</sup>

寺院を攻撃目標にしたことで、憤激の聲が仏教徒以外からもわき起こった。チャン・バン・ドン将軍が、もし仏教指導者が多数の群衆を率いて大統領官殿に行進し始めても、軍はそれを阻止しないと語ったほどである。<sup>400</sup> 加えてそれは、ジェム独裁そのものへの批判という火に油を注いだ。アメリカ人に向かって、共産主義体制下のハノイのほうが自由を享受できると公言するベトナム人も現れた。<sup>401</sup>

ちょうど夏休みを終えた学生がサイゴンやフエに戻り、大挙して独裁反対を叫び始めた。政府は大学を閉鎖する。学生デモがいつそう激化する。それが大量逮捕を生む。抗議行動は高校や中学校にも広がった。<sup>402</sup> 8月末から9月初めにかけて弾圧と抗議が繰り返される中、政府の拙劣な対応が、学生たちを政治勢力として舞台に登場させる「触媒」となってしまったのである。<sup>403</sup>

8月31日には議会選挙が予定されていた。25日のサイゴン放送は、内務省が予定どおりの実施を指示したと伝えたが、その2日後には「一時的撤回」を報じた。<sup>404</sup> ノルディング前大使はワシントンで、「選挙にはたいして意味はない。政府の構成にも変化は生じない」とジェム弁護に躍起になった。<sup>405</sup> だがそれは少なくとも、政府による秩序回復の試みが当初の思惑より長い時間を要することを、そして南ベトナムの政治指導力に危険な真空地帯が生じつつあることを意味していた。

9月を迎える頃、ジェム政権が「潜在的にはこれほど危険にさらされたことはない」というのがCIAサイゴン支局の判断だった。9月中旬、カンボジアのある新聞は、ジェム政権という名の舟は「まだ転覆はしていない」が「仏教徒の嵐の中で揺れている」と報じた。この頃、国務省情報調査局長のヒューズがラスク長官に伝えたように、寺院襲撃という暴挙の結果、南ベトナム国内の緊張は「ほとんど反乱寸前」に達していたのである。<sup>406</sup>

9月14日、政府は2日後に戒厳令を解除すること、27日に議会選挙を行うことを発表した。<sup>407</sup> 民族解放戦線の妨害にもかかわらず、選挙の投票率は高かった。公約どおり選挙が行われたことで、アメリカ側に驚きが見られたほどである。ただし、ニュー夫妻がともにほぼ100%の得票率を誇るという代物だった。たとえばニュー夫人の選挙区では有権者の少なくとも半分は解放戦線の支配下だったにもかかわらず、である。<sup>408</sup> だが何れともあれ、10月7日には新議会が開かれた。大学も再開され、仏教徒や学生も釈放された。少なくとも表面的には「平常」回復の手だてが着々と講じられていた。<sup>409</sup>

だが、サイゴンはまだ「恐怖と不安」の支配下にあった。政府の弾圧はけっして終わっておらず、まだ1000人以上の僧が獄中にとどめられていた。<sup>410</sup> 政府はついに小学生までも取り締まるようになった。学校周辺では放置された何百台もの自転車が目撃されている。<sup>411</sup> 子供を送ってきた車が短時間学校周辺に駐車しただけで逮捕される有様だった。<sup>412</sup>

9月末にサイゴンを訪れたマクナマラ国防長官に向かって、ローマ法王庁代表のアスタ (Salvatore Asta) は「表面の静けさのもとで『締め付けの強化』がある」し、人々は「目の前の悪魔」つまりジェム政権より「見知らぬ悪魔」のほうがまだとこぼしていると語っている。<sup>413</sup> もしこの頃の南ベトナムが平穏だったとしても、それは「緊張の空白期間」(ヒルズマン) にすぎなかった。マクナマラとテイラーは帰国後、「都市中心部における政治的緊張はきわめて強く、騒擾・抑圧・辞任のサイクルがいつな

んどき沸騰してもおかしくない」と大統領に報告した。<sup>414</sup>すでに仏教徒たちは、宗教上の平等を勝ち取るには「政権の変更」しかないと意を決したようだった。<sup>415</sup>

10月5日、寺院襲撃事件以来初めて（通算6人目）の焼身自殺が発生した。メクリンはそれを「狂気の時期における最後の出来事」だったと述べている。それまでの仏教徒鎮圧の活動に真っ向から挑戦された政府は、ますます抑圧政策にのめり込んだ。27日には7人目が炎に包まれた。学生の抗議行動は続き、しかも解放戦線に身を投じる学生が増えつつあった。<sup>416</sup>

ジェムの統治は急速に自壊していく。公式通貨は額面上1ドル＝73ピアストル、闇市場でも通常は90ピアストル程度のはずが、価値低落の結果1ドル＝150ピアストル前後となっていた。当時民族解放戦線の一員だったチュオン・ニュー・タン（Truong Nhu Tang）は、1963年秋のジェム政権が「政治的にも心理的にも崩壊しかけていた」と回想する。つまり政権の基盤を掘り崩そうとする彼らの努力を、皮肉なことにジェムらが「大いに助けてくれた」のである。<sup>417</sup>

ケネディの懸念もまた「和らくどころではなかった」とテイラーは回想する。だがその懸念はある1点に集中していた。仏教徒危機が、そしてジェム政権の体たらくが、戦争遂行に悪影響を与えはしないか、である。<sup>418</sup>9月末から10月初め、サイゴンやフエに比べればまだ農村部では仏教徒問題への関心は低く、軍事作戦にも深刻な影響は出ていなかったとマクナマラおよびテイラーは述べている。しかし政治的緊張が継続もしくは増大すれば、いずれ何らかの「処方箋」が必要になるはずだった。<sup>419</sup>また、アメリカがジェム政権の行動を容認することは、アメリカの撤退と同様、戦争遂行には「災厄的」な影響があるはずだった。<sup>420</sup>

#### 4. ニューの大誤算

ノルティング前大使出国後の空白を狙った寺院襲撃は、新大使ロッジの「着任前に既成事実を突きつける」意図の表れである。大使の不在は「行動を起こすのに理想的な瞬間」（メクリン）だった。作戦が成功すればジェム政権の正しさ、賢明さをアメリカ人に教え込むことになり、彼らはベトナムの内政問題に積極的に手を出せなくなるだろうというわけである。<sup>421</sup>ジェムはヒギンズに向かって、行動するなら大使不在の時期のほうがアメリカを困惑させないはずだと、妙な配慮を披瀝した。ニューも「ロッジの到着前に片を付けようとした」のだと、ロッジに向かって率直に語っている。<sup>422</sup>トン・タト・ジン將軍は、クーデターを起こすためにやって来るロッジの裏をかいてやったのだと自慢気だった。<sup>423</sup>

サイゴンの米大使館も情報機関も、完璧に不意打ちを食らった。彼らがいかにサイゴンの政治的現実から遊離していたかを示す、「ベトナム介入史の中で最も皮肉な、また悲劇的な」失態だったと『ペンタゴン・ペーパーズ』は批判している。<sup>424</sup>作戦

直前に米大使館や米高官の自宅などの電話線が切断されたから事態の把握は難渋をきわめ、ロッジ到着を待ちわびるしかなかった。<sup>425</sup>

クーパーがいうように「完璧な驚愕に見舞われた」点では、ワシントンもサイゴンと変わらなかった。ホワイトハウスでは連日会議が繰り返されたが、事実の把握そのものも容易ではなかったとテイラーはいう。<sup>426</sup>当初はジェムとニュー夫妻のどちらが本当に主導権を握っているのか、ワシントンでも判然としなかった。ケネディ政権首脳は、ニューが軍に命じて襲撃を行わせたのか、それとも軍がニューやジェムを操っているのかもわからず、「一体誰が責任を担っているのか」を見定めようと大わらわだだった。それはケネディ政権が発足早々に経験したキューバ侵攻（ピッグズ湾事件）に匹敵する危機、しかもはるかに重大な失態だったといわれる。<sup>427</sup>

ノルティングは、ジェムによる仏教徒との和解の約束を手土産に、「ベトナムで本物の勝利を勝ち取った」と確信してサイゴンを後にしていた。寺院襲撃の知らせをハワイで受けた時の反応を、彼は「呆然」「驚愕」「激怒」といった言葉で表現している。彼のみならず、アメリカ人にとってこの寺院襲撃は、真珠湾奇襲も同然の破廉恥きわまりないアメリカへの挑発、「アジアではおそらく最大級の侮辱」（メクリン）だった。<sup>428</sup>

事件の詳細が判明するにつれ、アメリカがそれまで精一杯支えてきたパートナーに手ひどい裏切りを受けたという憤りが増大したとコルビーは回顧する。軍事援助司令部のハーキンス将軍はノルティングに、国務省が「ベトコンよりもジェムのほうを敵だと考えているようだ」と書き送った。少なくとも8月21日以降、両国の関係は「完全に行き詰まった」と、ロッジもクーデター後にワシントンに報告している。<sup>429</sup>

ニューはこれまでと同様、今回もアメリカは自分たちの行動を黙認するものと考えていたという。もしそうならニューは大誤算を犯したことになる。だがそうさせたのも、1963年8月に至るアメリカの弱腰ぶりだった。幸か不幸か、寺院襲撃事件のおかげで、少なくともジェム政権にどう対処すべきかという問題は片づいたのだと『ペンタゴン・ペーパーズ』はいう。ロッジにいわせれば、ケネディはジェムへの「無批判的な支持」というそれまでの路線をがらりと変えようとしていた。<sup>430</sup>

国務省はすぐさまジェム政権の約束違反を指摘し、仏教徒抑圧政策に遺憾の意を表明した。もともとは仏教徒弾圧は「許容できない (cannot be condoned)」という表現だったが、サイゴンからトルーハートがもっと強い表現を求め、最後は「遺憾 (deplores)」に落ち着いた。<sup>431</sup>

25日、ベトナム作業班長代理ヒーブナー (Theodore J. C. Heavner) がシアトルで、ベトナム政府による暴力的行為や宗教への抑圧に遺憾の意を示した。27日にはマニング広報担当国務次官補がニューヨークで同様の演説を行った。<sup>432</sup> 国務省は不快感を示すため、辞任したチュオン駐米大使の後任、ド・バン・リ (Do Van Ly) の受け入れをずるずると引き延ばした。南ベトナム外務省がアグレマンを要請したのは8月

27日。だがり大使のワシントン入りは10月に入ってからだ。<sup>433</sup>

8月26日、「アメリカの声 (Voice of America)」放送が、政府軍は戒厳令にこそ関与したが、寺院襲撃事件には参加するどころかまったく知らなかったこと、ニュー指揮下の秘密警察がその実行犯であることを報じた。<sup>434</sup> ジェムに対する「公然たる政治戦争」(ヒギンズ)における、ワシントンからの宣戦布告だった。この瞬間にアメリカは反政府、すなわち軍に味方する側に身を投じた。ジェム放逐への賽はこの時投げられたのだといわれる。<sup>435</sup>

じつは事件直後、VOA放送は南ベトナム政府側の説明を鵜呑みにし、軍に責めを帰していた。<sup>436</sup> これではたまらないと、将軍たちが放送の訂正を求めたのである。たとえばチャン・バン・ドン将軍は、軍はいま国民に誤解され、責められているが、それはアメリカ政府のせいだと訴えている。<sup>437</sup> 寺院襲撃がアメリカに対する平手打ちだったとすれば、VOA放送はその返礼だった。当然のことながらジェムは猛反発、ベトナムではVOA放送を聴いただけで逮捕されるようになる。<sup>438</sup>

怒ったのはロッジも同様である。26日午前9時にチュオン・コン・クー (Truong Cong Cuu) 新外相を、11時にジェムを訪れ、信任状を提出する予定だったからである。VOA放送はその直前、朝8時(ワシントン時間は25日夜8時)の出来事だった。強硬路線によってジェムを不意打ちするロッジの計画が台なしにされたわけである。<sup>439</sup> ジェムの怒りのために信任状提出は延期されるのではないか、それどころかロッジに危害が加えられるのではないかと懸念が生じた。不測の事態に備え、軍事援助司令官ハーキンスがロッジとの同行を避けたほどである。もはやそれは、同盟国の大統領と大使の関係ではなかった。26日、国務省は公式に、寺院を襲撃したのが軍ではなく特殊部隊だと発表した。<sup>440</sup>

サーロイ寺院が攻撃された時、2人の僧が壁を乗り越え、隣接する米経済援助使節団 (United States Operations Mission) の建物に逃げ込んでいた。USOMビルは大使館と同様外交特権に守られていたが、ニュー夫人は「USOMビルの外交特権など無視して軍隊を送り、坊主を逮捕したい」と歯がみをしていた。2人のうちの1人が仏教徒急進派の指導者ティック・チ・カンと見られたからである。<sup>441</sup> 政府は2人を渡せと要求したがアメリカ側は警察の立ち入りを拒み、警察が建物を包囲した状態で両者の交渉が続いた。アメリカ側は2人の身の安全が保証されないこと、大使が到着していないことなどを理由にその後も引き渡しに応じなかった。<sup>442</sup>

ロッジはもともと9月赴任の予定だったが、風雲急を告げるサイゴン情勢を前に、国務省内でハリマンやヒルズマンらが必死に繰り上げを求めている。<sup>443</sup> それでも大使として必要な準備や、ケネディ政権が外交官に義務づけた反乱鎮圧講座などを済ませるとすれば、出立は8月中旬以降が精一杯だった。ホノルル、東京を経由してロッジがサイゴンのトンサンニュット空港に降り立ったのは、22日午後9時30分のこと。

戒厳令のもと、夜間外出禁止が発令されてから30分後の街路には、兵士の姿しか見えなかったとロッジは回顧する。それが彼に、この政府はとっくに国民の支持を失っているのだと確信させた。<sup>444</sup>

サイゴン到着から一夜明けた朝、ロッジはジェム政権に「意図的な侮辱」を加えた。信任状提出に先だて、2人の僧を訪問したのである。新大使はUSOMビルに「たまたま立ち寄る」だけだとアメリカ側は説明した。だがジェムの面目は丸つぶれとなった。<sup>445</sup> 警官たちはUSOMの車を見つけては止めさせ、内部を念入りに搜索するなど、「上からの命令」による嫌がらせに余念がなかった。<sup>446</sup>

僧たちはさらに1人増え、9月2日に大使館に身柄を移された。政府は直接間接に彼らの引き渡しを要求し続けたが、ロッジは応じなかった。<sup>447</sup> うち2人はほどなく出身の寺に戻ったが、チ・カンのみはクーデター発生まで大使館にとどまった。このため大使館は「仏教徒ヒルトン (Buddhist Hilton)」とあだ名された。それはアメリカのジェム政権に対する「明白な決意」の表れだったとロッジはのちにいつている。<sup>448</sup>

## 5. ジェムとロッジの断絶

着任早々、ロッジは仏教徒弾圧への、そしてジェム政権そのものへの嫌悪感を露骨に示し始めた。<sup>449</sup> ケネディの側近ソレンセンによれば、ロッジはサイゴンの国務省・国防省・CIA関係者の中でも「最もジェムに非友好的」な人物だった。ロッジ到着の日こそ、ジェム終焉の始まりだといわれる。メクリンによれば、サイゴンのアメリカ人たちは、「こちら側の君主」がベトナム人の君主を痛い目に合わせようとしているのだと冗談を飛ばした。<sup>450</sup>

じつはサイゴンに着く以前から、ロッジはジェムを見捨てていたのだともいう。それどころかヒギンズ記者は、ロッジが「徹底的な外科手術」の命を受け、ジェムとニューの排除が必要だと確信して赴任したのではないかと主張している。<sup>451</sup> ロッジ着任後のサイゴンはそれほど敵意剥き出しの空気に満ちていたのである。ジェムやニューとロッジの間に次々と問題、いや紛争が生じていったのも無理はない。

ロッジとジェムの初顔合わせは、信任状が提出された8月26日。それは最悪の遭遇だった。2時間あまり、ジェムはアメリカの内政干渉に非を鳴らし、仏教徒など国民のごく一部にすぎないと主張し続けた。ベトナムは「低開発の国」であり、きちんと教育を受けた人材が不足している、部下たちは大統領声明を起草することさえできないのだと、言い訳も忘れなかった。この出会いはロッジに、アメリカがどう行動しよう、ジェムの統治は「明らかに最終段階に入っている」との印象を与えた。<sup>452</sup>

2日後、カッテンバーグとの会見でジェムは、「この9年間の汗と血が、仏教徒のふりをした扇動者の小集団の生け贄になるのなら、いますぐ死んでもいい」とまで断言した。3時間の会見でカッテンバーグは何度か口を挟むのがやっとで、ジェムの「神

経症がますます増大」していると感じた。ロッジも、ジェムとの会見についてこう回顧している。この独裁者は「ただ天井を見上げ、子供時代のことを話すか、あるいはベトナムの歴史を語るかで、ケネディ大統領が私に彼と検討して欲しいと思っていた問題について、私と論じることにはまったく応じようとしなかった。それは、アメリカ大統領の代理たる者を遇する正しいやり方とは思えなかった」。<sup>453</sup>

これではアメリカの要求を通す以前に、まともな意志疎通などあきらめざるをえなかった。事実、ロッジはこれ以降ほぼ2ヶ月にわたって、事実上ジェムとの関係を断つ。ジェムはこちらの求めることを何1つしようとせず、これでは会いに行ったところで物の役には立たない。もちろんドアは開けておくが、最初に向こうがノックしなくては駄目だというわけである。<sup>454</sup> いまはジェムに安心より不安を与えたほうが得策だ。対話を重ねても、過去と同じ話を繰り返すだけではかえって逆効果だ。ジェムのもとを訪れるのは「とんでもない時間の浪費」でしかない。それくらいなら他にもっと役立つ仕事をしていたい。ロッジはワシントンにこう伝えた。<sup>455</sup>

だが、ジェムの側からロッジに接触を求めることは「降伏」を意味していた。それをロッジも知っていたとメクリンはいう。とすれば体面にこだわるジェムにとってそれはそもそも不可能な要求だった。彼が本当にロッジへの接触を求めたのは10月も末近く、クーデターを数日後に控えた時期だった。沈黙の力で相手方の変化を促す戦術が奏功したとしても、すでに手遅れだったのだとカッテンバーグはいう。<sup>456</sup>

それまでの間ワシントンは、ラスク國務長官が繰り返し表明したように、「ロッジ＝ジェム間のチャンネルをまだ活用できていない」こと、2人が「意味のある会話ができずにいる」ことに気が気ではなかった。<sup>457</sup> たとえどのような欠陥があろうと、ジェムこそが「本当に焦点となる人物」だったから、接触なしに済ますことができるとはテイラー統合参謀本部議長には思えなかった。マクナマラも、ロッジやハーキンスがすぐにベトナム側と意志疎通を図るべきだと主張した。<sup>458</sup>

ラスクはロッジに、ジェムとの「率直かつ重大な話し合い」を求めた。具体的には、国民と一致団結させるためにも和解的行動をとるようジェムに働きかけよとの指示である。<sup>459</sup> 法令10/59の廃止や寺院の修復、学生の釈放や大学の再開、報道検閲の廃止、USOMに避難した僧たちの安全保証、仏教徒側との真摯な交渉など、すぐにでも実行してもらわなければならないことが山ほどあった。<sup>460</sup> ロッジには、CIAのある報告書によれば、この困難な状況から「出口を見つける真摯な努力」を払うことが求められたのである。<sup>461</sup>

仏教徒問題以外でも、さまざまな措置が必要だった。たとえば、将軍たちや民間の指導者を入閣させるなどの措置により政府を活性化すること。一族や与党カンラオ、秘密警察などのあり方、などについても再検討すること。戦争の勝利に不可欠な、国内外での支持を集めること。<sup>462</sup> ジェム自身が「大統領らしく振る舞い始め、戦争に

邁進する」こと。どんなことでも「劇的な、象徴的な動き」を示し政府のイメージ向上を図ること。<sup>463</sup> そのためにはロッジに「タフな交渉」を、そして「ジェムと格闘」をしてもらわなければならなかった。<sup>464</sup> 戒厳令のもとで検討されたアメリカ人家族の出国計画も、もし大々的に行えばアメリカ側にジェムやニューと全面対決の用意があると示すことになり、「圧力をかける武器」としての効果が期待されていた。だからラスクはロッジの影響増大の手だてとして、家族全員を出国させるのが「望ましい」と伝えていた。<sup>465</sup>

サイゴンの暑い、そして熱い夏が終わる頃には、すっかりジェム包囲網——国務省にはハリマン次官やヒルズマン次官補、ホワイトハウスにはフォレストル、サイゴンにはロッジ大使ら——が完成していた。彼らはジェムに、米軍事顧問に損害が出ているのに仏教徒弾圧が続くようではジェム政権支援は困難であること、アメリカが支持できるような行動がどうしても必要なことを理解させなければならなかった。<sup>466</sup>

その原動力は、ジェム政権が10年近く積み重ねてきた成果の「すべてが崩壊の危機にさらされている」という焦燥だった。そればかりではない。アメリカがジェムの弾圧を黙認した、あるいはジェムに向かって何がしかを要求しながら結局は腰砕けとなったという「間違っただけ」を内外に与えること、アメリカがジェム政権と同じ穴の貉だと見られることも禁物だった。<sup>467</sup>

キング (Martin Luther King, Jr.) 牧師の「私には夢がある (I have a dream)」という演説で知られる、人種差別に反対するワシントン大行進は寺院襲撃の1週間後 (8月28日) だった。米国内の黒人差別と南ベトナムの仏教徒弾圧が重なり合い、世界中でアメリカのイメージを低下させることは避けなければならなかった。だが9月初め、メクリンは、ベトナム内外でアメリカのイメージと威信にはすでに大きな傷がついたと分析している。<sup>468</sup>

サイゴンには、CIAは寺院襲撃を事前に知っていたのだ、いやそもそもアメリカが企んだものだという噂が流れた。<sup>469</sup> 特殊部隊にアメリカが資金供給していることは周知の事実だったから、民衆の怒りはジェム政権だけでなく、むしろアメリカに向けられた。<sup>470</sup> サイゴンからは「アメリカへの敵対というところまでは行っていない」が少なくとも「アメリカが責めを負わされる寸前」だと、フエからは反米感情が「これまでにないほど高まっている」と、不吉な報告が寄せられていた。戦略村担当のフィリップスは9月初めワシントンに戻り、ベトナムの国民と政府の間だけでなく、ベトナム人とアメリカ人の間にも「信頼の危機」が発生したと報告した。<sup>471</sup> ケネディがワシントンからサイゴンの状況を制御するすべを失いつつある中、アメリカはテイラーのいう「災厄の秋」に突入していく。<sup>472</sup>

## 第5章 決別の時

### 1. 圧力強化を選択

9月中旬、ホワイトハウスから依頼を受けたヒルズマンが、今後の圧力強化戦術を具体化した。まず対話による説得から始め、じょじょに圧力を上げていく4段階の計画である。<sup>473</sup> ヒルズマンは、この計画が持つ「物資面への影響は非常に限られている」が、「大きな心理的影響」が期待されると説明した。ラスク國務長官も、それがジェムに対して「重要な心理的インパクト」を与えるものだと述べた。<sup>474</sup>

だがそれは机上の計画以上のものではなかった。9月初め、ロッジはサイゴンから、アメリカの影響力は「非常に小さい」と報告している。CIAサイゴン支局も、過去の経験から「楽観の根拠はほとんどない」とした。ラスクも、「本当にジェム政府に食い込むような圧力の手だてを見つけるのは困難」だと承知していた。ジェム一族にとって、アメリカの圧迫に屈することなど「ほとんど不可能」な選択肢なのだとメクリンも見ていた。<sup>475</sup>

それどころか逆効果となる恐れもひしひしと感じられていた。8月末の段階でラスクは、ジェムにやり方を変えるよう求めたところで「ニューの即座の行動を招く」だけだとの懸念を表明している。ヒルズマンも、圧力戦術が「戦争遂行の勢いを削いでしまう」恐れは承知していた。だが「おそらくすでにそれは生じている」のだから、もはや躊躇してはならないとも考えていた。<sup>476</sup>

ノルティング前大使が強硬路線に必死に反対したのはいうまでもない。ジェムは「押されれば行動しない」し、むしろ「不幸な反動」を招くばかりだろう。最後通牒など出すべきではない。「最大級の制裁」を発動したところで役には立たない。<sup>477</sup> だが、ワシントンで彼を相手にする者はほとんどいなかった。出席すべき会議の通知ももらえず、気づいた大統領が急ぎ呼びにやらせたこともある。反ジェム派の筆頭格ハリマンなど、大統領の面前でノルティングを悪しざまにののしった。ある人が彼に、ノルティングをほめたところ、いきなり補聴器をとりはずしてしまったという（ハリマンは耳がやや不自由だった）。<sup>478</sup>

それでも、寺院襲撃事件からほぼ9月下旬にいたるまで、ケネディ政権は「不決断の1ヶ月」を過ごしたとマクナマラ国防長官は述懐する。その原因の第1は、ケネディ自身が確固たる方針を決めていなかったことにある。9月も半ば近く、マクナマラやラスクは、アメリカがベトナムでどのような問題に直面しているのか、そして何を指しているのかを、はっきりさせなくてはならないと述べていた。ちなみに米上院外交委員会が『ペンタゴン・ペーパーズ』をもとに行った研究では、9月1日～10月1日が「政策の模索」期とみなされている。<sup>479</sup>

第2に、8月末にマニング広報担当國務次官補が述べたように、アメリカはけっし

て「主権国家であるベトナムを運営してはいない」のだという大前提があった。9月末に南ベトナムを訪問したマクナマラもジェムに向かって、これは「基本的にベトナム人の戦争」でありアメリカができるのは「助力だけ」なのだと言説した。<sup>480</sup>

だがそれにしては、説得でジェムを変えることもできたのに、力づくで彼を圧迫しすぎたのではないか。これが、当時戦略村計画を担当していたフィリップスによる反省の弁である。アメリカは南ベトナムを支援するだけで、内政には干渉しないはずだったのだから、1963年後半のアメリカの行動は約束違反だ。だから仏教徒危機の原因は、ケネディ政権の「猪突猛進野郎たち (Gung-ho boys)」の忍耐力のなさにある——ノルティングものちにこう批判している。強硬な圧力路線への傾斜は、8月末に決行予定だった南ベトナム軍首脳のジェム政権打倒クーデターが腰砕けに終わったことから進むべき方向を見失い、手詰まり状態に直面したケネディ政権の焦りを反映していたともいわれる。<sup>481</sup>

第3に、圧力戦術そのものに、依然として大きな制約があった。戦争にも反乱鎮圧作戦の実施にも「最小限の影響」を及ぼすにとどめること、とりわけこの政治戦争で重要な、「村落に住むちっぽけな人々」に被害を及ぼさないことである。だからハーキンス軍事援助司令官も、仏教徒問題の現状が「これほどうまくいっている戦争に打撃を与える」として、その解決に向けてジェムを動かそうとしていた。<sup>482</sup> 南ベトナム国内でこれ以上の騒擾を招いたり、ジェム政権に北ベトナムとの取引など「急進的な動き」をとらせたりするのも同様にまざった。<sup>483</sup>

9月17日、国家安全保障会議はヒルズマンの原案を検討し、「圧力と説得」路線を承認した。だがM・バンディにいわせれば、圧力が功を奏するかどうかは「誰にも予測できない」けれども、とりあえず「ニューの権力封じ込めを開始」してみようという、暗中模索も同然の状態だった。9月から10月にかけて、ケネディはジェムへの依存からじょじょに手を引こうとしたが、同時に南ベトナムを即座に崩壊させるわけにはいかなかったと、大統領の側近だったソレンセンはいう。<sup>484</sup>

米国内の世論や新聞報道も、ジェム政権に改革を強く求めるべきか、あきらめてこのままジェムとうまくやっていくべきかで分裂していた。支援を続ければアメリカが抑圧に荷担していると非難され、政権転覆に貢献すれば内政干渉だと糾弾される。強硬手段、たとえば援助停止の拳に出れば共産主義と戦っている国を弱体化させ、手を引けば公約を果たさないと後ろ指をさされる。アメリカは八方ふさがりだった。<sup>485</sup>

意見の不一致、つまり圧力戦術への躊躇や不満があったのは政権内部も同じである。それはケネディも重々承知していた。だからこそ、圧力計画を決定すると同時に、最終的な決断は先延ばしにされた。また、現状をより正確に把握し、新たな方針のもとに政権を一致団結させるべく、マクナマラとテイラー統合参謀本部議長をサイゴンに派遣したのである。それは国務省とホワイトハウスが主導した圧力政策に、とりわけ

国防省の賛同を求める手段だったという。<sup>486</sup>

形のうえでは、マクナマラとテイラーの派遣は、ケネディがロッジと協議を経て決定したはずだった。だが当のロッジは2人の派遣に強硬に反対していた。軍最高首脳である2人がジェムに会えば、アメリカの「許しと忘却」のしるしと受け取られ、ジェムは「すべてが終わって、きれいになった」と思うだろう。これまで自分がとってきた「沈黙政策」の効果も失われてしまう。<sup>487</sup> だがケネディは構わず2人を送った。ワシントンを守るで相手にしないロッジに、ケネディが怒りを爆発させた結果だともいう。ロッジはロッジで不快感をあらわにしたといわれる。<sup>488</sup>

だが結果的に2人の派遣はロッジに幸いした。マクナマラは南ベトナムの政情不安、それが戦争と米世論に及ぼす悪影響、ジェム政権と国民の乖離、両国政府間に顕在化した「信頼の危機」などについて、ジェムの理解と共感を得ようと懸命になった。だがジェムはみずからの政策の賢明さと、戦争の進展ぶりをまくしたてるばかりで、ペンタゴン最高首脳の2人をあきれさせた。仏教徒問題の解決にせよ統治方法の改善にせよ、ジェムは「何ひとつ約束しなかった」とマクナマラは回顧する。それどころか、仏教徒への自分の対応は「優しすぎた」とジェムが語るのを聞いて、マクナマラは「ぞっとした」という。<sup>489</sup>

それは「まったくもって憂鬱な晩」(テイラー)だった。だがそれが、ケネディ政権の重要人物であるマクナマラに圧力戦術を受け入れさせたとシュレジンガーは述べている。帰国した2人の報告を受け、10月2日、国家安全保障会議は圧力戦術に本格的に乗り出すことを確認した。『ペンタゴン・ペーパーズ』にいわせれば「困難かつ危険な道」の始まりである。<sup>490</sup> だがじつはそれ以前に、ケネディ政権はジェム政権との対決に向けていくつかの階段を上がっていたのである。

## 2. 援助停止を検討

8月26日、VOA放送は、寺院襲撃の実行犯である秘密警察と特殊部隊をジェムが除去しない場合、対ベトナム援助が削減される可能性があると報じた。メクリンによれば、寺院襲撃の件と同様、事前に何の相談も受けなかったロッジは激怒した。ジェムに対しても、また反政府クーデターを画策中の將軍たちに対しても、援助停止が持つはずの「びっくり効果」が台なしになったからである。しかもその反動として流血の事態も予想された。事実、ベトナム人たちは、アメリカはもうジェム政権との関係を断ったのだと判断したとヒルズマンはいう。<sup>491</sup>

ケネディのいうこの「まずい信号」は、じつは手違いによるものだった。UPIの報道が十分なチェックなしに流されたのである。<sup>492</sup> 国務省は後始末に大わらわとなった。ロッジに向かっては、すぐさま今回の放送に遺憾の意を示すとともに、今後はワシントンとサイゴンで声明の不一致が生じないよう最大限努力すると約束した。<sup>493</sup> 報道

機関に対しては、アメリカはベトナム援助の削減など考えていない、援助についてはいかなる決定もなされていないとの表明が続いた。<sup>494</sup>

メクリンによれば、当時ベトナムでは、VOA 放送は「信じられないほどの威信」を持っており、とくに農村はその「一語一語を頼りに」していた。<sup>495</sup> だからたとえ一瞬でもそれがジェム政権に敵対的な行動を報じると、弾圧政策の代名詞であるニューをアメリカが追い出してくれるとの期待が高まった。<sup>496</sup> 誰よりもニューがそれを敏感に感じとり、「VOA はベトナム政府の倒壊を望んでいるのだ」と反撃した。<sup>497</sup>

しかし援助削減の報は翌日には取り消された。これではかえって大きな失望を呼び起こしかねないとカッテンバーグやヒルズマンは心底懸念した。サイゴンからは、そもそもアメリカの援助がなければ寺院襲撃など起きなかったのだという批判がベトナム人の間で生じていることが報告された。<sup>498</sup> VOA 放送の失態は、アメリカをますます袋小路に追いこんでしまう。

だがそこには単純な手違いと片づけられない側面があった。ケネディ政権はラオスで1962年、ジュネーブ協定による停戦を呑もうとしない右派の指導者ノサバン(Phoumi Nosavan)を相手に、援助停止という脅しをかけたことがある。だからベトナムでも同じ手を使うのではとの憶測は早くからあった。ジェムも8月初め、援助停止の噂についてヒギンズに不安げに尋ねていた。同じ頃、ドュバリエ(François Duvalier)の独裁に反対し、ハイチ向けの経済援助も全面停止されている。<sup>499</sup> ワシントンにとっての問題は、南ベトナムへの援助停止という鉄槌をいつ、どのような形で振り下ろすか、だけだった。

9月2日、著名なキャスター、クロンカイト(Walter Cronkite)によるテレビ・インタビューでケネディは、南ベトナム政府の「政策と、おそらく人の変更」が必要だろうと語った。それはアメリカの公式な立場を表明したものとして、全世界の米外交使節団に送られた。<sup>500</sup> じつはインタビュー用にM・バンディが作成した原稿では、米軍事顧問の増派や犠牲者の増大などアメリカの「大規模な努力」に触れた後、「成功に不可欠の条件がもはや存在しないのに、こうした努力を続けるのは困難」という明確な発言が用意されていた。さすがにケネディは、最後通牒も同然のこうした言葉を削除した。だがその1週間後、彼は別のテレビ・インタビューで援助削減の可能性を否定したものの、「現段階では」と付け加えるのを忘れなかった。<sup>501</sup>

テレビを用いた圧力戦術は、同盟国を相手にすべきことではなかった、あるいはせつかくの断固たるメッセージがきちんとジェムに伝わらず効果がなかった、との批判がある。ケネディ自身、2度目のテレビ・インタビューの翌日、「われわれは何度も公式声明をしてきたが、何も点火しなかった」と苛立ちをあらわにしていた。<sup>502</sup>

ベル(David Bell)国際開発局(AID)長は9月8日、ABC放送のインタビューで、「その国の政策が、われわれが支援できるような結果を生み出さないのなら、援助継続に意

味があるだろうか？」と語った。ロッジもジェムに、援助停止は「きわめて現実的な可能性」だと脅しをかけた。<sup>503</sup> 今後の援助を止めるだけではない。これまでに引き渡した物資の返還を求める。あるいは米軍の直接介入をちらつかせる。両国間の「意志の対決」の中で、可能なすべてを「アジア式政治ゲーム」の道具として用いる必要があった。トゥアン国務相がフィリップスに、援助が削減されればベトナム人にもアメリカが本気だとわかるだろうと述べたように、その効果はある程度期待されていた。<sup>504</sup>

12日、ラスクはロッジに対し、「次の数日間のうちに」援助をめぐって「根本的な決定」がなされる見込みだと伝えた。だが援助停止をちらつかせることと、実際にそうした行動に踏み切るものの間には大きな違いがあった。8月末、マクナマラはジェムとの交渉を「援助停止から始めるべきではない」と主張しており、ラスクもこれに同意見だった。<sup>505</sup> 第1に、非共産主義の主権国家、それも「共産主義者という敵と本物の戦争を行っている政府」（メクリン）に対する制裁には不快感が否めなかったからである。とくにペンタゴン内部で反対論が強かったと、ケネディの側近中の側近だったオドンネル（Kenneth P. O'Donnell）やパワーズ（David F. Powers）はいう。<sup>506</sup>

第2に、援助停止がジェムとニューを「コーナーに追いつめる」結果、いわば窮鼠猫を噛む反応を生じさせる危険があった。アメリカとの全面対決や北ベトナムとの取引などである。<sup>507</sup> マッコーン（Jonh A. McCone）CIA長官の報告では、ロッジもトルーハートも「この政権では戦争に勝てない」し、「時はほとんど失われている」と焦燥をあらわにしていたが、同時に援助停止が「予想できず、制御もできない事態」を生じさせる可能性も懸念していた。<sup>508</sup>

第3に、アメリカの最優先課題、すなわち戦争の遂行と究極の勝利の障害となる恐れがあった。ギルパトリック国防次官は、軍事援助が滞れば「ベトナムでの戦争遂行は止まってしまう」、少なくとも「すぐに、著しい影響」が生じると論じた。経済援助使節団を率いるブレント（Joseph L. Brent）も同様に、「ベトコンとの戦いを遂行する南ベトナムの能力のうえで即座に影響が出る」と懸念した。<sup>509</sup> そもそも南ベトナムの軍が活動できるのは「大部分がアメリカの軍事援助計画のおかげ」だった。たとえ部分的停止でも、1ヶ月後には陸軍の機動力、空輸能力、航空支援能力、メンテナンス能力などに大きな影響が生じるはずだった。半年も経てば、航空機や車両を用いた作戦は大幅に減少し、軍事作戦のテンポは急落するだろうと見られた。全面停止ともなれば、その影響は想像するも恐ろしかった。トゥアン国務相はジェムとニューに、非軍事部門の援助が止まっても半年は持つだろうが、軍事援助が停止されれば「即座に崩壊がもたらされる」と報告している。<sup>510</sup>

第4に、援助が止まれば南ベトナムの経済と国民生活に大きな打撃となるはずだった。ラスクは、中国内戦でアメリカが蒋介石への援助を止めた結果、毛沢東に勝利への道を開いてしまったとして、「共産主義者による奪取につながるような誘惑」を断

つべきだと主張した。ケネディもテレビ・インタビューに答えて、「弱体な政府がますます事態を制御できなくなった」中国内戦の再現は望まないと語っている。<sup>511</sup>米国内世論の大勢も、共産主義の勝利を阻止するには援助を続けるべきだという意見だった。だからロッジもサイゴンから、「都市のちっぽけな民衆を飢えさせない」よう配慮を求めたのである。<sup>512</sup>

第5にアメリカは、深刻なジレンマに直面していた。ラスクが回顧するように、援助を停止しなければジェム政権の抑圧政策を支持することになるが、援助を停止すれば反政府クーデターを刺激するということである。実際にサイゴンでもワシントンでも、すでにジェムに見切りをつけた者は少なくなく、彼らはそれが「政府転覆に十分な触媒」(マッコーン)になると期待していた。ただし、8月末にラスクがサイゴンに伝えたように、新政府樹立が用意万端となるまで「時を待つ必要」があった。<sup>513</sup>

### 3. 伝家の宝刀を抜く

ケネディ政権が求めたのは、ジェム政府にアメリカの不快感をはっきりと伝え、だが軍事面への影響を最小限に食い止める、ぎりぎりの政策だった。それはロッジがいうように「困難な、おそらく不可能な」道だった。しかし「きわめて重要な」課題でもあった。こうしてカッテンバーグのいう「サラミ方式 (salami-slicing)」、つまり援助の選択的停止が採られた。10月5日のことである。<sup>514</sup>

対象は商品輸入援助計画 (Commercial Import Program) だった。それはベトナム版「マーシャル・プラン (Marshall Plan)」とも呼ばれる。1950年代末から70年代初頭にかけてアメリカが全世界で活用した援助方式である。南ベトナムは、アメリカがドルで購入した物資を輸入する。それを売却してベトナムの通貨ピアストルに換える。それを政府軍将兵の給与や必要な物資購入に充てる。<sup>515</sup> その額は年にほぼ1億ドルから1億5千万ドル。南ベトナムの輸入の約4割に相当し、政府軍の予算はほとんどこれでまかなわれていた。<sup>516</sup> これが選ばれたのは、インフレなどの影響が出るには翌年春頃までかかり、「短期的には深刻ではない」と思われたためである。しかも、この援助があってさえなお南ベトナム政府の予算はぎりぎりだったから、心理的には大きな影響が期待されたからである。<sup>517</sup>

この決定はとくに公表されることなく「静かに実行」(シュレジンガー)された。ジェムの面子への配慮と、彼にいま一度仏教徒政策や政府の改革などについて再考を促す機会を与えるためである。<sup>518</sup> 決定の2日後には報道機関に漏れてしまったが、国務省スポークスマンはそれでも表向き、援助計画についてはまだ再検討中だとした。<sup>519</sup>

だがケネディ政権はまたも不手際を演じた。大統領が最終決断をする前、9月上旬にはベトナム側との協議が中止され、14日には、1850万ドル分が「凍結」されてしまう。「何をしたって?」「商品援助を停止しました」「いったいまた誰がそんなことをしろといっ

たのだ？」「誰も。自動的な政策です。相手国と齟齬をきたした時はいつもそうしています」「何ていうことだ。君のしたことがわかるかね」——『ニューヨーク・タイムズ』記者ハルバースタムが伝える、大統領とベル国際開発局長との会話である。<sup>520</sup>

もう1つ、援助停止の対象があった。CIAが負担する、特殊部隊の給与である。金額としては月25万ドル程度にすぎない。だが、ニューに率いられ、寺院襲撃の直接の当事者だった部隊への援助が9月分も従来どおり支払われたことで、CIAに、ということアメリカに対して強い批判が出ていた。<sup>521</sup> 特殊部隊への援助停止は、制裁の対象を戦争遂行を阻害しないが、ニューの政治権力維持に貢献している部分に限るという方針にも合致していた。<sup>522</sup>

アメリカは彼らが政府軍参謀本部の指揮下に入り、そして実際に戦場に投入されない限り、これ以上支援はできないとの態度をとった。<sup>523</sup> この方針がジェム政権に通告されたのは10月17日。<sup>524</sup> 特殊部隊がジェム政権、とくにニューの権力保持に貢献するばかりで、共産側との戦いに役立たずなのは、以前からの現象だった。この時期にあらためてこの問題を持ち出したのは、ジェムとニューへのアメリカ側の不満の表明にはほかならない。マッコーンCIA長官やテイラー統合参謀本部議長は反乱鎮圧の進捗への影響を懸念したが、多勢に無勢だった。<sup>525</sup>

フィリップスは大統領に、特殊部隊への援助停止が持つ「重要な政治的・心理的効果」が「ベトナム全土」に拡がることは確実と請け合っている。それはラスクがロッジに伝えたように「ニュー孤立化の段階的計画」の重要な一部だった。ハルバースタムによれば、部隊もその指揮官レ・クアン・トゥン (Le Quang Tung) 大佐も、ゴ一族による統治の、そしてとりわけ弾圧政策の象徴として、軍にも民衆にも憎まれていたからである。商品輸入とあわせて、これがまさにアメリカの「いまわの際の努力」だったとクーパーはいう。<sup>526</sup> だが逆にいえば、これが機能しなければ打つ手はまったく残っていなかった。ケネディ政権は本当に瀬戸際にあったのである。

#### 4. 追いつめられるケネディ

ケネディが援助停止という強硬手段に訴えざるをえなかったのは、ジェム政権の仏教徒抑圧政策が、彼ら以上にアメリカを追いつめていたからである。8月21日の寺院襲撃はアジア全土に非難の嵐を巻き起こした。<sup>527</sup> 隣国カンボジアはすぐさま南ベトナムとの断交に踏み切った。かねて両国は国境紛争や少数民族の迫害、北ベトナムからカンボジア領内を経由するゲリラへの補給路（いわゆる「ホー・チ・ミン・ルート (Ho Chi Minh Trail)」）や民族解放戦線の「聖域」の存在などをめぐって対立を抱えていた。<sup>528</sup>

カトリックの総本山であるバチカンからは、法王パウロ6世 (Paul VI) がベトナム国民に向かって遺憾の意を表明した。バチカン法王庁はジェム政権と距離を置くよ

うになり、そもそもの騒擾の原因となったフェのゴ・ジン・トゥック大司教をローマに召喚した。<sup>529</sup>

寺院襲撃事件がベトナム国民を政府から離反させただけでなく、世界中でジェムのイメージに大きな打撃を与え、「深刻な反動」を生じさせたことは、ワシントンもすぐさま感じとっていた。<sup>530</sup> その1週間後、マロウ (Edward R. Murrow) 情報文化局 (USIA) 長は、世界中の報道がほぼ一致してジェムおよびアメリカを批判していると大統領に報告した。アメリカがジェム政権への援助を続ける限り、世界はアメリカに抑圧の責任を帰すに違いなかった。<sup>531</sup> ラスクが全世界の米代表部に伝えたように、「南ベトナムにおけるアメリカの特別な立場」を考えればやむをえなかった。つまり仏教徒危機とは、ケネディ政権の内外でのイメージの危機でもあった。<sup>532</sup>

8月末、ラスク国務長官はジェム政権に「国際的な立場を向上させる体系的な努力」を求めるいっぽう、「ベトナム政府が変われば世界世論も変化するかもしれない」との期待を抱いていた。<sup>533</sup> だが9月初め、CIA サイゴン支局はそれも「もはや手遅れ」かもしれないと危惧している。ワシントンでも、南ベトナムで好ましくない事態が続くことが、ドゴール仏大統領のインドシナ中立化提案 (8月29日) とあいまって「アジアや欧州でわが国の政策に大きな逆転を現実にもたらす」可能性が懸念された。<sup>534</sup> その中心舞台となりつつあったのが国連である。

8月末、ウタント (U Thant) 事務総長はジェムに国内の人権尊重を呼びかける書簡を送った。だがジェムの反応は、仏教徒の迫害などないし、この問題は解決済みだというものだった。<sup>535</sup> 9月に入ると、アジア・アフリカ諸国は南ベトナムの仏教徒問題を国連総会の議題に取り上げるようウタントに求めた。ジェム政権が思い切った手だてを講じない限り、国連で非難決議の可決は確実と見られた。13日、ウタントは公然と南ベトナムおよびアメリカの介入政策を非難し、事態解決のため国際会議開催を提唱した。<sup>536</sup>

寺院襲撃事件直前、仏教国であるセイロン (現スリランカ) は国連に、南ベトナムの仏教徒抑圧について調査を要求していた。その後、調査要求に同調した国は56にのぼる。サイゴンのトルーハート代理大使は、国連事務総長の代理をオブザーバーとしてグエン・ゴク・ト副大統領率いる調査委員会に加えるなど、何とか仏教徒問題を国連での議論の「ど真ん中からはずす」道を模索していた。<sup>537</sup>

ジェム政権は先手を打って、国連調査団を招請した。つぶさに実情さえ見れば、仏教徒迫害など存在していないことがわかるだろうとニュー夫人は自信満々だった。<sup>538</sup> 10月8日、調査団の派遣が決まった。だがその結果、仏教徒問題に限らず、アメリカの南ベトナムへの関与、ベトナムの統一・中立化まで議論の対象となり、いわばパンドラの箱が開いてしまったのだという。<sup>539</sup>

アフガニスタン代表が率いる調査団は10月24日から11月3日にかけて南ベトナム

ムを訪れたが、宗教迫害の確たる証拠は見つけられなかった。ノルディングやヒギンズなどジェム擁護派は、これを根拠にケネディ政権のジェムへの対応を批判している。だがすでにジェム政権が倒れた後の報告書に、アメリカも世界もたいして興味は示さなかった。<sup>540</sup>

国際世論と並んで、米国内の世論はベトナムへの対応を決めるいくつかの「基本要因」の1つだとヒルズマン極東担当国務次官補はいつている。<sup>541</sup> 寺院襲撃とそれに続く逮捕劇では、アメリカが供与し、横腹に両国の協力関係を示す握手の図柄が描かれたトラックが使われた。[図-1] 米国内の報道では、ジェム政権のイメージはもはや「修復不能」になったとの論評も現れた。<sup>542</sup>

1万5千人にのぼる国内の聖職者たちは数回にわたり、新聞の全面広告でアメリカのジェム支援政策に反対した。ジェムと同じカトリックの組織も弾圧に反対の声を上げた。ベル国際開発局長はテレビ・インタビューで「いかなる国でも抑圧を支援しない」と言明した。<sup>543</sup>

米国民の怒りは宗教弾圧という個別の政策だけでなく、ジェムの独裁そのものにも向けられた。ハノイ政権とサイゴン政権、両者を比べても、アメリカの戦争を正当化するほどの違いはないという論評が現れたほどである。9月から10月にかけて、ジェム政権の株は「最低点」に陥ったとカッテンバーグは述べている。<sup>544</sup>

米国内の世論は、野蛮な寺院襲撃に衝撃を受けつつも、南ベトナムを失えば大打撃となることを認識していた。要するに「これで勝てるのか？」という疑問が日増しに



図-1 対ベトナム援助のシンボルマーク  
United States Operations Mission to Vietnam, "Annual Report for Fiscal Year 1960," *President John F. Kennedy's Office Files, 1961-1963*, Bethesda, Md.: Univ. Publications of America, 1989 (microfilms), pt. 5, 27: 706.

大きくなりつつあったのである。<sup>545</sup>そこで本当に批判されていたのはジェム政権ではなく、ケネディのベトナム政策だった。そしてその結果もたらされた南ベトナムの混乱だった。<sup>546</sup>

自分たちが直面する問題は「われわれはベトナムで勝てるのか」と並んで、「米国内で批判を封じ込められるのか？」なのだとラスクはいつている。言葉を換えれば、フォレストルが述べたように「ベトナム人が自分たちで問題を解決できるかどうかを見きわめるうえで、米世論が十分な時間を与えてくれるかどうか」だった。グエン・ゴク・ト副大統領がサイゴンでロッジに語ったように、すでにアメリカ＝ベトナム関係は両国それぞれの「国内政治」の問題となっていたのである。<sup>547</sup>

国際世論と同様、米世論のこうした動向、とくに「議会における嵐の警報」(ヒルズマン)が、ジェムを動かす武器として利用された。<sup>548</sup>8月26日、赴任早々のロッジはジェムに、アメリカは「世論の支持なくしては議会の支持も得られず、議会の支持がなければ資金を得られない」と、財布の面から事態改善への圧力をかけた。翌日にはニューに向かって、「議会と世論の支持なくしてアメリカ政府は外交政策を運営できない」と訴えた。ラスクはその後もロッジに、アメリカが世論という困難な問題に直面しているのだと理解させるよう求めている。<sup>549</sup>ケネディ政権は頑迷固陋なジェムと米世論・議会との板挟みとなり、文字どおり悲鳴を上げていたのである。

ケネディはその任期をつうじて議会との関係維持に苦しみ続けた。ケネディが立法を要請した法案の可決率は1961年には48.4%、62年には44.6%だったが、63年には27.2%に急落してしまう。しかも1963年秋、部分的核実験停止条約の批准や公民権法案、減税法案などをめぐって、議会は激しく大統領と対立していた。<sup>550</sup>

財政赤字や対外収支の赤字への懸念が強まったことから、対外援助にも大なたが振るわれた。対外援助への議員たちの猛烈な敵意は「1963年の反乱」と呼ばれたほどである。<sup>551</sup>そこにベトナム情勢の悪化が加わった。9月初め、上院外交委員会極東小委員会での証言に臨んだヒルズマンは、ジェムとニューがアメリカを導きかねない「災厄コース」に、そして彼らを支え続けるアメリカの政策に議員たちが抱く「広範囲な疑念」を痛感せずにはいられなかった。<sup>552</sup>

ジェム政権支持を止めるのは「早ければ早いほどよい」と主張したモース(Wayne Morse)上院議員。兵力も援助もすべて引き揚げるべきだと論じたマクガバン(George S. McGovern)上院議員。彼らはいずれものちに反戦議員としてその名を馳せる。しかしヒルズマンの回顧によれば、彼ら以外の、かつて親ジェム派だった議員でさえ、援助停止を要求するようになった。こうした空気を反映して、10月にはザブロッキ(Clement J. Zablocki)下院外交委員会極東小委員長率いる調査団が南ベトナムを含む東南アジア視察を行った。彼らの結論は、国内の安定と、責任ある、そして人々の欲求に反応できる政府が存在しない限り、ベトナムで決定的勝利など無理だというもの

だった。<sup>553</sup>

それに先だつ9月初め、サイゴンを訪れたクルラック将軍に向かってロッジが述べたように、ジェムに対して「最もインパクトがあるのはたぶん米議会の反応」だと思われた。ワシントンではベル対外援助局長が、ジェム政権が政策を変えなければ議会が援助を止めるかもしれないと示唆した。<sup>554</sup> ロッジはジェムやニューに向かって、いまや議会には「緊急の危機」が発生しており、このままでは援助停止決議は避けられないと断言した。9月末、マクナマラとともにサイゴンを訪れたテイラーはジェムに、「米国内で深刻な信頼の危機が醸成されている。これに対応することがベトナム政府にとって非常に重要である」と力説した。<sup>555</sup>

ケネディ自身、議会の決議が対ジェム交渉の役に立つと確信していたが、それには「全体の状況をわれわれが制御する必要」があった。ところが、政権の目的にかなう形で議会を「制御することは困難」（ベル）に思われた。とりわけケネディは、共産主義と戦っている政府、しかもその戦いをうまく進めている政府のあり方などに疑念を差し挟むべきではないといった論法で、政権肝入りの援助停止決議案が万が一にも否決された場合の打撃を強く懸念した。<sup>556</sup>

そこで大統領のいわば代理人となったのが、チャーチ上院議員である。彼は9月12日、22名の共同提案者とともに、「南ベトナム政府が国民抑圧政策を改め、国民の支持を得る効果的努力を行わない限り、軍事・経済援助を継続しない」とする決議案を上院に提出した。<sup>557</sup> 同日の記者会見でケネディは、アメリカは南ベトナム支援を続けるべきだが、同時に「援助は最も効果的なやり方で運用されるべき」だと述べた。サイゴンではロッジがさっそくこの決議案を使い、ジェムにあらためてさまざまな要求を突きつけた。<sup>558</sup>

じつはこの決議案の作成にあたっては、ヒルズマンを中心に政権側が緊密に協力していた。いや、事実上それは国務省が起草したものだった。<sup>559</sup> ケネディは表向き戦争に悪影響を及ぼすとして援助停止には反対の意思表示をしながら、決議案提出の前日にはそれを支持することを決めていた。というよりチャーチは政権からの「青信号」を待って決議案を上程したのである。<sup>560</sup> もっとも実際には可決前にジェム政権が崩壊してしまい、それが本当に効果を発したかどうかはわからずじまいだった。

## 5. 猛反発に直面

商品輸入計画の停止がすぐに国民生活に害をもたらしたわけではない。だが10月下旬までには物不足とインフレ、そして財政危機の兆しが見えつつあった。<sup>561</sup> たとえば援助停止の対象の1つ、コンデンスミルクが止まったため、サイゴンのカフェではミルクの販売を制限するようになった。<sup>562</sup>

戦争遂行への悪影響も出始めていた。ジェムが11月1日朝に語ったところによれば、

物不足が兵士や民兵の生活に重荷となっていたからである。<sup>563</sup> ノルディング前大使は、援助停止がベトナムの貧しい人々を直撃したとのちに批判した。10月初め、ソ連との関係改善を反映して、ケネディ政権はソ連への小麦売却を許可した。だからその一方で同盟国に援助停止という措置をとることには米国内で異論もあった。<sup>564</sup>

CIAの分析官クーバーによればこの決定は、1954年以来初めて、アメリカがサイゴン政権に明確に反対の立場をとったという意味で、大事件だった。メクリンにいわせれば、ジェムはこの時、アメリカの絶対的支援という「毛布」を失った（スヌーピーで知られる漫画『ピーナッツ (Peanuts)』の登場人物、ライナスがいつも手放さない毛布を指す)。援助停止の心理的効果はじつに「巨大」で、南ベトナムの実業界を経由して大統領宮殿への圧力となったと彼はいう。<sup>565</sup>

クーデター後、サイゴンからの報告では、商品輸入援助の停止には「非常な心理的効果」があったとされた。ベトナム人たちはインフレで生活が苦しくなることには困惑を覚えつつも、ジェム政権に改革を求める圧力として援助停止を是認していた。<sup>566</sup> サイゴンの街は、ジェム政権があとどれだけ生き延びれるかという憶測で持ちきりだった。何か「大きな政策転換」があったと感じたのは米国民も同じである。<sup>567</sup>

ロッジ大使はのちに、商品輸入援助の停止が「成功の徴候を示し始めていた」と述べている。コーマーによれば、彼はそれが自分の「最大の成功の1つ」だったと誇りに思っていた。10月頃、あまりにも遅ればせではあったものの、ジェムに対する圧力がようやく効果を発揮するようになったとワシントンは見ていた。<sup>568</sup>

10月27日、ジェムはロッジをダラトへの視察旅行に招待した。マクナマラとテイラーの訪問以来、ほとんど1ヶ月ぶりに2人が顔を合わせたことになる。しびれを切らし、不安にさいなまれたジェムが、ロッジの意図どおりついに折れたのである。それというのもロッジにいわせれば、商品輸入援助の停止でジェムが「自分の立場が考えていたほど強くないと気づいた」せいだった。アメリカの圧力戦術がようやく実を結んだように見えた、米上院外交委員会の研究も述べている。<sup>569</sup>

11月1朝、ジェムはロッジにこう語った。「ケネディ大統領からの提案はすべて真摯に受け止め、実施するつもり」だとケネディに伝えて欲しい。「自分に何をして欲しいかいつてももらえればそれを実行する」。<sup>570</sup> こうしてジェムは白旗を掲げた。だがあまりに遅すぎた。政府打倒のクーデターが始まるのはそのわずか2時間ほど後のことである。

しかも、こうしたジェムの殊勝な言葉を額面どおりに受け止めることはできない。10月27日のジェムとの会談はロッジを苛立たせた。ジェムが対米関係修復の具体的な措置を何ひとつ提案しなかったからである。「大統領閣下。私が行った提案をことごとく、閣下は却下されました。閣下のお力で可能な、アメリカの世論に好ましい印象を与えるようなことを、何か1つでも思いつかれることはありませんか」。ロッジが

そう聞くと、ジェムはいつものように「うつろな表情で話題を変えた」という。<sup>571</sup> 11月1日にも、特殊部隊への援助停止は「まったく間違っただけ」やり方だと反発していた。ケネディの助言に従うという意思表示こそしたものの、「タイミングの問題」があるとの但し書きがついていた。<sup>572</sup>

ヒルズマンは、結局のところ援助停止にも「本物の影響力はなかった」と回顧する。特殊部隊への援助を止めても、ニューは他のところから資金をまわせたからである。商品輸入についても、すでにサイゴンの倉庫は物であふれていたからジェムやニューにどこまで影響があったかは疑問だったとクーパーはいう。プレント経済援助使節団長がクーデター後に分析したところでは、援助停止がベトナム経済に与えた影響はたいはさほど根の深いものではなく、インフレも想定内の範囲におさまっていた。<sup>573</sup>

チャン・バン・ドン将軍によれば、ジェムは、アメリカの言いなりになって援助をもらい続けるか、逆らって援助を止められるかというジレンマに直面していた。そして「アメリカの援助を受け取り、同時にあからさまな、そして不快な条件を受け入れる以外にほとんど選択肢はなかった」という。<sup>574</sup> だがそれは事実と反している。早くも9月下旬、ベトナム政府はサイゴンのフランス大使館に新たな借款について問い合わせている。ニューはアメリカの援助がなくてもやっつけよう、物資や資金の節約を命じた。政府官僚は自発的な給与削減を求められている。<sup>575</sup>

援助停止は「ジェムを変えるほどの圧力にはならなかった」が、それでも「かなりの象徴的かつ心理的なインパクト」があったとヒルズマンは述懐する。だが、この荒療治の結果、ジェムとニューの「ガードをますます固くさせるのに成功しただけ」だったとコルビー元CIAサイゴン支局長はいう。<sup>576</sup> 10月初め、南ベトナム政府の、アメリカおよびサイゴンの米出先機関に対する不満は「かなりのエスカレーション」を示していた。しかもジェムはますます自分の殻に閉じこもり、政府が「嘘つきで犯罪者」（ヒルズマン）となるのを放置した。<sup>577</sup> つまりアメリカが最も恐れたこと——ニューがいよいよ実質的な政府の中核となる——が生じてしまったのである。

アメリカは援助停止の公表には慎重だった。だが10月7日、『タイムズ・オブ・ベトナム』は一方的に援助停止を報じ、あわせてアメリカが戦争遂行を阻害していると糾弾した。同日、議会の開会に臨んだジェムは諸外国からの援助や米軍将兵の犠牲に言及したものの、その調子は従来と比べておざなりだった。<sup>578</sup> ジェムはCBSテレビのインタビュー（ベトナムでは10月17日に公表）に答えて、「アメリカの援助があるとなかろうと、この戦いは継続する」と大見得を切った。ニューも同日、援助停止によってアメリカが戦争に悪影響を与え、この国の分裂と反政府クーデターを企図していると非難した。<sup>579</sup> ジェム政権は猛然とアメリカに牙をむき、徹底抗戦の構えを示したのである。

9月、政府官僚はアメリカ人との接触を禁じされた。彼らはアメリカ人と同席する

ことを恐れ、たとえ親友でも会おうとしなくなった。<sup>580</sup> 10月末のことだが、ある米記者が16歳のベトナム人女学生とロッジが並んだ写真を撮った。するとその数分後、秘密警官か特殊部隊員とおぼしき者によって彼女は逮捕されてしまった（翌日に釈放）。<sup>581</sup>

10月26日、ベトナム共和国（1955年成立）は8回日の建国記念日を迎えた。従来、アメリカは祝典のため航空機や船舶を供給していたが、この年に限ってはいっさい協力がなかった。<sup>582</sup> ジェム政権も「対米関係の長く、冷たい冬」への備えを着々と固めていた。<sup>583</sup> すでに両国の間には、政治的な交戦状態が存在していたのである。

## おわりに

### 1. 挫折したアメリカ式統治法

1962年のラオス休戦成立に貢献したハリマンは、外交の妙諦とは「防火対策」、つまり破綻の前に手を打つことだという。<sup>584</sup> もしそうなら、彼自身も関与したケネディ政権のベトナム政策は落第だった。とりわけ1963年5月以降のほぼ半年、後手後手にまわるばかりで、アメリカの進むべき針路を示すこともできなかったからである。

アメリカがベトナムでめざしたのは、強力で民主的な政府を維持すること、その政府に人々の支持を確保すること、そして民族解放戦線によるゲリラ戦争の脅威を打破することだった。だからケネディは反乱鎮圧戦略の名のもとに、アメリカ式戦争をベトナムで展開しようとした。同様に、ベトナムは政治戦争の舞台でもあったから、アメリカ式統治法が試された。いや、試されたという言い方は正しくない。その成功にはほとんど何の疑いも差し挟まれなかったからである。

1951年、共産主義に対抗できる民族主義の不在を批判した下院議員。1954年、強力な反共国家建設を目指してジェム擁立を支えた上院議員。同じ人物が今度は大統領として、1963年にはジェム政権の自滅と、みずからの政策の崩壊を目撃する羽目に陥った。ケネディに挫折をもたらしたのは、ほんらい敵であるはずの民族解放戦線でも、彼らを支援する北ベトナムでもなかった。冷戦の相手である中国やソ連でもなかった。アメリカと盟友関係にあったはずの南ベトナム、その統治者であるジェムとの関係の破綻こそが、すべての原因だった。

ケネディ・ジェム両政権の関係はドライブにたとえられたことがある。両者はたしかに同じ車に乗っていたかもしれないが、誰が運転するか、どこに向かうか、どの経路をたどるかなどで、いさかいが絶えなかったというわけである。ケネディ政権はジェム政権と手を携えて、南ベトナムの農民の「ハーツ・アンド・マインズ」を勝ち取るべく、政治戦争を展開しているはずだった。しかしそれはジェム政権を相手のもう1つの政治戦争、それも「長期の消耗戦争」ともなっていた。<sup>585</sup> とはいえ同盟国を

相手に米軍を投入して勝利をおさめるというわけにもいかず、ケネディ政権はジェム政権打倒クーデターの成功に一縷の望みを託したのである。

かつてジェム政権支援に尽くしたランズデール准将は、仏教徒危機が燃え上がった頃、1961年以来何度も問題を指摘してきたが「多くが是正されないまま」だったと国務省のカッテンバーグに語っていた。破局の年、1963年をつうじてケネディ政権がジェム政権に要求し続けたのは、要するに「大々的な支援増大と引き換えに、彼が1961年秋にテイラー将軍に行った改革の約束を守れ」ということだったと、サイゴンで広報を担当していたメクリンはいう。<sup>586</sup>

のちに平定作戦の責任者となるコーマーは、ジェムを「もっと積極的に、われわれが求める方向に本当に押しやらなかった」ことを失敗の1つに挙げている。1963年初秋、ケネディはジェムがまったくアメリカ側の言い分に耳を傾けなくなる以前に、政治・経済・社会分野の努力をもっと築かなかったことで自分を責めていたと、側近のソレンセンはいう。とすれば、マクナマラ国防長官が1960年代中頃以降のベトナム介入についていった言葉——「政治的流砂という基礎の上に、勝利を目指す軍事的努力を計画する」——はケネディにもそっくり当てはまった。ランズデールがのちに、次の機会にはアメリカが「こうした紛争の政治的基盤を忘れないよう望む」と述べたのも、それがまさにベトナムでの失敗の根幹にあると見たからである。<sup>587</sup>

もしゲリラに盟友がいたとすれば、ジェムこそその名にふさわしかったといわれる。だがアメリカはそれでも彼を支え続けた。ジェム統治が機能しないとわかった後も、少々彼に固執しすぎたかもしれないとメクリンは後悔している。<sup>588</sup> それはジェムに代わりうる指導者の不在が原因だった。つまりジェムを支えても、その首をすげ替えても、その先にあるのは底なしの泥沼だったのである。とすればケネディは曖昧な様子見戦術を継続し、とどのつまりは時間を空費するしかなかった。ソレンセンはこう述懐している。「選択の自由を保持しておくため困難な決定を先へ延ばし、当座は比較的重要な措置を大勢の流れに沿って出していった結果、彼はベトナム問題全体の方向を逆転させることが、ますます困難になってしまった」。<sup>589</sup>

だが、いま少し早めに行動しておれば……という考え方は、アメリカがそう決意しさえすれば即座に問題を解決できたはずだとの前提に立っている。じつのところアメリカは1961年以来どころか、ジェム政権を擁立した1954年からこの問題につきまといわれ、しかもまるで解決策を提示できなかったのである。<sup>590</sup> 国力や世界的威信などの点では、たしかにアメリカは巨人だったかもしれない。だが対南ベトナム関係という観点からいえば、アメリカこそ弱者だった。ケネディの弟ロバートはのちに、同盟国に気遣う必要もなく、新聞もない共産主義体制をうらやむような発言をしている。ことジェムとの関係でいえばそれは本音だったろう。結局のところケネディは、反共国家の維持を優先し、ジェムの独裁に目をつぶり続け、「自由の存続と成功を確保

するためには……いかなる友をも支援」するという就任演説の公約に固執するしかなかったのである。<sup>591</sup>

## 2. 民主主義移植の可能性を確信

テイラー統合参謀本部議長は、のちベトナム戦争が激化しつつあった頃、アメリカは東南アジアに「小アメリカ」をつくるつもりはないと述べている。だがアメリカは、みずから信じる価値、民主主義的な統治形態を最善のものと信じ、それをベトナムの地に移植しようとした。「ワシントンは当時、自由世界と呼ばれていた諸国が、アメリカを模範に自己改造することを期待していたし、モスクワはモスクワで、共産世界がソ連を見習ってくれることを期待していた」とシュレジンガーはいう。ベトナムで戦略村計画などを担当したフィリップスは、アメリカが「10年近く、慎重に、また苦勞して、このきわめて脆弱な新国家を建設しようとしてきた」と振り返っている。ランズデールがいうように、第二次世界大戦の敗戦国である日本や西ドイツを民主国家として復興させ、またかつての植民地フィリピンに民主主義を教えた記憶が彼らに自信を与えていたのである。<sup>592</sup>

しかもアメリカは、ベトナム人も自分たちと同じく自由と民主主義を渴望していると信じ切っていたとマクナマラはいう。ベトナムという異質な世界を欧米諸国と同じように扱ったこと。そう扱えると信じたこと。ベトナム人が必ず共産主義を拒否し民主主義を選択する、したがって南ベトナムを世界の民主化のいわばショウケースにできると無邪気に信じ込んだこと。失敗の本質的な原因として、これらが批判されている。<sup>593</sup>『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』記者ヒギンズのいう「西洋たるワシントンと東洋たるサイゴンの心理ギャップ」は思いのほか大きかったのである。大統領に昇格直後のジョンソンは側近に「ベトナムをたった一夜でアメリカのようなものにするは無理」だと漏らしていた。しかしのちに南ベトナムで権力を握るグエン・カオ・キ将軍は、「東洋人の顔に西洋の仮面をつけさせることが不可能だと、アメリカ人はけっして理解しなかった」と回顧している。<sup>594</sup>

1963年8月末、チュオン・コン・クー外相はロッジ大使に、CIAが「この国を『子供』の国扱いするのは止めさせて欲しい」と訴えた。彼が強調したのは、そうした行動がベトナム人の尊厳を傷つけるものであり、これではアメリカはかつてのフランスと変わらないということだった。いやCIAに限らない。アメリカ政府全体がそうだった。ケネディも、その前任者も、後継者もそうだった。コーマーは、じつに20年というもの、アメリカは南ベトナムの「保護者であり、銀行家であり、補給源であり、顧問であり、戦争の協力者」だったと述べている。<sup>595</sup>

実際に、ワシントンからサイゴンに向かっては、経済、社会、政治、軍事などあらゆる分野にわたる「絶え間のない助言の流れ」(ラスク)が存在していた。マクナマ

ラは1963年秋、南ベトナムの「封建時代が生んだ政治・社会・経済的組織」を「いかに20世紀に連れてくるか」が問題だと語った。テイラーがのちに語ったように、ベトナムに限らず「不安定でおくれた政府の脆弱性にまつわる、平和への潜在的な脅威」が問題である以上、アメリカはその是正に乗り出さざるをえなかった。<sup>596</sup>

ケネディは1963年6月、有名なアメリカン大学における演説で、アメリカは「世界を多様性にとって安全にするのを助ける」のだという遠大な目標を掲げている。<sup>597</sup> だが、そこでいう多様性とは共産世界との平和共存を認めるという点についてのみだった。南ベトナムないしジェム政権に独自の政治・社会体制を容認するつもりなどさらさらなかったのである。端的に言えばケネディ政権にとって南ベトナムとはたんなる地理的名称にすぎず、国家主権などそこには存在しないも同然だった。

ヒルズマン極東担当国務次官補は1963年秋、ジェム政権が仏教徒危機の解決や広範な民主的改革を呑むかどうかについて、次のような見通しを抱いていた。ジェムがいうことを聞く確率が4割。ジェムがアメリカの求めに肯んじず、その結果しびれを切らせた将軍たちが動く、つまりクーデターの可能性が4割。何も起こらない確率が2割。ただしその場合、半年から1年でベトナムが失われるか、アメリカ自身が戦争に乗り出すかしかないだろう。<sup>598</sup>

だが、アメリカの意図どおりジェム政権が行いを改める確率がそれほど高かったとは思えない。そのためにアメリカが用いられる手段がきわめて限られていたからである。メクリンによれば、アメリカはジェム擁立以来、大使が代わるごとに強硬な圧力路線と柔軟な説得路線を切り換えて用いてきた。そして1963年8月、これまでにない強硬路線をひっさげ、まさに満を持してロッジが登場する。[表-2] だが、いずれのやり方も結局まるで役に立たなかった。

クーデター直後、ロッジがワシントンに伝えたように、援助停止という最も強硬な手段でさえ、戦争遂行を危険にさらさず、ベトナム人の生活水準を低下させないという条件がはっきりとついていた。<sup>599</sup> だから「わが国の行動にはほとんど効果はなかった」(ラスク) のである。完全に出て行くという選択肢以外、サイゴンで影響力を発揮する手段などなかったのだとクーパーはいう。<sup>600</sup> だがそれは無理な相談だった。そんなことをすれば即座に南ベトナムが崩壊、共産化しかねなかったからである。ア

表-2 対ジェム路線の変遷と駐サイゴン大使

年	路線	大使
1954～1955	タフ	コリンズ (J. Lawton Collins)
1955～1957	ソフト	ラインハート (G. Frederick Reinhardt)
1957～1961	タフ	ダーブrow (Elbridge Durbrow)
1961～1963	ソフト	ノルティンク
1963	タフ	ロッジ

Mecklin, *Mission in Torment*, p. 38 より筆者作成。

アメリカは8月下旬、隣国の仏教徒問題解決を要求するカンボジアのシハヌークに、「ベトナム政府は独立国家の政府であり、アメリカはその行動をほとんど制御できない」と回答している。<sup>601</sup> それは言い訳でしかなかったが、同時にこの本質を突いていた。

反乱鎮圧戦略の成功は、現地の政府に依存していたから、サイゴン政権との関係が鍵だった。<sup>602</sup> そこでアメリカは多重的なジレンマの虜囚となっていた。勝利に不可欠な改革を、ジェムが圧力を受けることなしに実施するなどありえない。だが圧迫があまりに過ぎると、ジェムがアメリカにそっぽを向き、その結果戦争にも敗れる可能性がある。<sup>603</sup> 改革前に援助を行えば、ジェムは改革の必要などますます感じなくなってしまう。だが改革しないからといって援助を止めてしまえば、状況がいっそう悪化し、改革そのものが無意味になってしまう。<sup>604</sup> いうことを聞こうとしないジェムを動かすには強力な手だてが必要だが、アメリカが前面に踊り出ればジェムがその傀儡に見えてしまう。援助停止はジェムを動かす唯一の手段だったが、同時にジェム打倒を目指す勢力を後押しする可能性が高い。<sup>605</sup> ケネディが直面したのは、アメリカにいっこうに協力してくれない「協力者」を相手に、その存在を引き続き受け入れ現状でよしとするのか、あるいは情勢悪化や介入深化などの危険を冒してその打倒を図るのかという、ベトナムに限られない問題だった。<sup>606</sup>

### 3. 自己抑制と責任転嫁

仏教徒危機が頂点に達し、ワシントンが騒然としていた1963年8月末、カッテンバーグはケネディ政権の面々がいかにベトナムの風土や歴史を知らぬまま大きな災厄に突進しようとしているかに驚愕し、恐怖心を抱いたとのちに語っている。ギルパトリック国防長官代理も、ベトナム介入の本格化にあたってアメリカは、まるでベトナムが白紙状態でそこに存在し、したがってアメリカは何でも好きなことをそこに書き込めるような錯覚にとらわれていたと述懐する。国防省の国際安全保障局（ISA）で極東問題を担当していたハインツ（Luthur C. Heinz）が述べたように、アメリカは「わが国が受け継いできた民主的な遺産」とベトナム人の「専制的な遺産と数世紀に及ぶ生活様式」との「相互作用」に直面していた。<sup>607</sup> いや、その中でもがき苦しんでいたというべきだろう。

ただここで注意すべきことだが、ケネディ政権内部に異質な社会への理解、ないし理解の努力がなかったわけではない。だがより重要なのは、それがかえって仇となってしまったことである。ノルティングはマクナマラに向かって、「フォードのエンジンをベトナムの牛車につける」ことに警鐘を發した。だがその彼がジェム政権への圧力を中和する役割を演じたのはすでに見たとおりである。公正、自由な選挙は民主主義の根幹のはずだったが、ロジ大使ものちに、ベトナムのような国では重要なことを決めるのに選挙がいいやり方だと人々は思っていないのだと語っている。米国内に

も、アメリカ式の「鑄型」に彼らが無理矢理はめ込むのは間違いだと論じる者がいたが、やはりジェムの「民主的な独裁制」を弁護する立場だった。<sup>608</sup> だがそうした言い分に耳を傾ければ傾けるほど、改革を求める圧力の矛先は鈍らざるをえなかったのである。

アメリカがその威信をかけ、南ベトナムに巨額の援助を供給している以上、アメリカにはもっと影響力があるはずではないか。米国民が抱いた当然の疑問だった。だがケネディは、「何もかもわが国が思うような行動をとらせることは期待できない。彼らには彼らの利害があり、個性があり、伝統がある。すべてをわれわれのイメージでやるわけにはいかない」と答えている。<sup>609</sup> そうした謙虚さはベトナムでこそ必要だった。だがそれゆえにアメリカは、ベトナムで目指すものを達成する力を失った。

コマーはのちに、ベトナム政府の失敗が「どの程度までアメリカの失敗なのか」、いま考えてもわからないと述懐している。かりにアメリカが失敗したとすれば、理念や目標が間違っていたわけではなく、「実施面」の過ちだったともいう。<sup>610</sup> だがジェムを専制君主にしてしまったのはケネディだった。ジェムの限界が誰の目にも明らかになった時、その袋小路からの離脱の道を選ばなかったのも彼だった。仏教徒危機はたしかにケネディを困惑させたけれども、それは政策の根本的な再検討にはつながらなかったのである。<sup>611</sup>

ケネディやその側近たちは、1961年春のキューバ侵攻失敗の際、ずさんな計画を立案・実施し、間違った情報を提供したなどとしてアイゼンハワー政権、CIA、軍首脳などを槍玉に挙げた。進歩のための同盟（Alliance for Progress）による大々的な中南米援助計画が頓挫した時も、政権内部で責任のなすり合いがあったという。<sup>612</sup> ベトナムでも彼らは、眼前に展開される不快な事実からひたすら目をそむけようとした。正しいはずの政策が機能しない責めは、ノルディングの間違ったやり方に帰せられた。さもなくば、サイゴンのジェム政権に戦争を勝利に導ける力があるかどうか、だけが問題視された。統治の非効率ぶり、国民の信頼を失ったこと、戦争敗北の可能性が高まってきたことが、ケネディ政権とジェム政権との関係形成に「決定的」だったと、クーデター直後にラスクは振り返っている。<sup>613</sup>

ある国務省員は、宗教危機の原因は要するにジェムがアメリカの助言を聞かなかったことだと語った。フォレストルものちに、5月8日から11月1日までの約半年、「なんとかなる程度のごたごた」が「制御不能のごたごた」に急速に姿を変えたのは、ジェムとニューのせいだと述べている。<sup>614</sup>

問題はけっしてアメリカにはない。すべての原因は戦争の遂行や国土の統治にかんするジェムの失敗にある。さもなくば政府の実権を握るニュー夫妻のせいだ。彼らのやり方を変えられないとすれば、別の連中を擁立すればよい。戦争がうまくいかないのも、政府軍の体たらくも、戦略村の挫折も、仏教徒危機を終息に導けないのも、す

べて現地の政府が「弱体で、非効率」であるせいだった。<sup>615</sup>

そう考えることはケネディに多少の心の慰めを与えたかもしれない。だが、それが説得にせよ圧力にせよ間接的な手段で正せないとすれば、あとはアメリカが大々的、直接に介入に乗り出すしかなかった。ジェム政権を相手に、仏教徒危機を解決できず、そして両国の間の溝を埋められなかったことが、すべての始まりとなった。1963年11月、ケネディはジェムという名の、そして仏教徒危機という名の災厄から逃れることはできた。だがそれは別の、さらに大きな災厄への第一歩だったのである。

これ以降、誰がサイゴンで権力を握っても、アメリカは同じ目に遭わされた。いや台湾の蒋介石、韓国の李承晩、カンボジアのシハヌーク、エジプトのナセル (Gamal Abdel Nasser)、イランのモサデグ (Muhammad Mossadegh)……。アメリカはつねに、アメリカがその国を救うためには望ましいと考える手だてに、その国の政府が抵抗するという「奥の深い諸問題」に直面してきた。<sup>616</sup> 朴正熙の韓国、ソモサ (Anastasio Debayle Somoza) のニカラグア、マルコス (Ferdinand Marcos) のフィリピンでも事情は同じだったと、W・バンディ国防次官補代理は述懐している。<sup>617</sup> アメリカがジェムを相手に経験した失敗とは、まさに冷戦政策の、そしてアメリカ外交の根幹と深い関わりを持っていたのである。

## 注

<sup>1</sup> George C. Herring, *America's Longest War: The United States and Vietnam, 1950-1975*, New York: A. A. Knopf, 2nd ed., 1986 (orig., 1979), p. xi. Sam C. Sarkesian, *Unconventional Conflicts in a New Security Era: Lessons from Malaya and Vietnam*, Westport, Conn.: Greenwood Press, 1993, p. 85. Robert Buzzanco, *Masters of War: Military Dissent and Politics in the Vietnam Era*, New York: Cambridge Univ. Press, 1996, p. 115. Timothy J. Lomperis, *The War Everyone Lost — and Won: America's Intervention in Viet Nam's Twin Struggles*, Baton Rouge: Louisiana State Univ. Press, 1984, p. 56. 吉澤南『ベトナム戦争——民衆にとっての戦場』吉川弘文館, 1999, pp. 16-7. 拙稿「反乱鎮圧戦略の挫折——ケネディとベトナム戦争・1963年」『筑波法政』38号(2005年3月)を参照。

<sup>2</sup> 朱建栄『毛沢東のベトナム戦争——中国外交の大転換と文化大革命の起源』東京大学出版会, 2001, pp. 23-4.

<sup>3</sup> 当時の政権参画者の発言としては以下を参照。Robert S. McNamara (with Brian VanDeMark), *In Retrospect: The Tragedy and Lessons of Vietnam*, New York: Times Books, 1995, p. 96. Kenneth P. O'Donnell & David F. Powers (with Joe McCarthy), *Johnny, We Hardly Knew Ye": Memories of John Fitzgerald Kennedy*, New York: Pocket Books, 1973 (orig. Boston: Little, Brown, 1972), p. 444. Pierre Salinger, *John F. Kennedy: Commander in Chief*, New York: Penguin Studio, 1997, p. 82. シオドア・C・ソレンセン (山岡清二訳)『ケネディの遺産』サイマル出版会, 1970, p. 178. 研究者などによる言及としては以下を参照。Tom Wicker, *JFK and LBJ: The Influence of Personality Upon Politics*, New York: W. Morrow, 1968, p. 190. William J. Rust, *Kennedy in Vietnam*, New York: Charles Scribner's Sons, 1985, p. 181. Lawrence Freedman, *Kennedy's Wars: Berlin, Cuba, Laos, and Vietnam*, New York: Oxford Univ. Press, 2000, p. 417. R. B. Smith, *An International History of the Vietnam War*, London: Macmillan, 1985, vol. 2, p. 142. Gerard J. DeGroot, *A Noble Cause?: America and the Vietnam War*, Harlow, U.K.: Pearson

Education, 2000, p. 3. Stephen G. Rabe, "John F. Kennedy and the World," James N. Giglio & Stephen G. Rabe, *Debating the Kennedy Presidency*, Lanham, Md.: Rowman & Littlefield Publishers, 2003, p. 64. 仲晃『ケネディはなぜ暗殺されたか』日本放送出版協会, 1995, pp. 31-2. 井上一馬『ケネディ——その実像を求めて』講談社現代新書, pp. 157-8. 拙稿「大規模介入と完全撤退の狭間——ケネディのベトナム政策をめぐる」『筑波法政』39号(2005年10月)を参照。

<sup>4</sup> Antonio Varsori, "Britain and US Involvement in the Vietnam War during the Kennedy Administration, 1961-63," *Cold War History*, vol. 3, no. 2 (Jan. 2003), p. 103. 研究者などによる1963年11月のクーデターと戦争のアメリカ化、ケネディの責任への言及については以下を参照。U.S. Senate Committee on Foreign Relations, *U.S. Involvement in the Overthrow of Diem, 1963*, Washington, D.C.: U.S. Government Printing Office [以下USGPOと略記], 1972, pp. v, 25. Fredrik Logevall, *The Origins of the Vietnam War*, Harlow, U.K.: Pearson Education, 2001, p. 39. Gary R. Hess, *Vietnam and the United States: Origins and Legacy of War*, Boston: Twayne Publishers, 1990, p. 77. Louise FitzSimons, *The Kennedy Doctrine*, New York: Random House, 1972, p. 211. Peter Schwab & J. Lee Shneidman, *John F. Kennedy*, New York: Twayne Publishers, 1974, p. 112. John H. Davis, *The Kennedys: Dynasty and Disaster 1848-1983*, New York: McGraw-Hill, 1984, p. 375. James N. Giglio, *The Presidency of John F. Kennedy*, Lawrence: Univ. Press of Kansas, 1991, p. 253. Christopher Matthews, *Kennedy and Nixon: The Rivalry That Shaped Postwar America*, New York: Simon & Schuster, 1996, p. 232. Seymour Hersh, *The Dark Side of the Camelot*, Boston: Little, Brown, 1997, p. 416. Robert Dallek, *Flawed Giant: Lyndon Johnson and His Times 1961-1973*, New York: Oxford Univ. Press, 1998, p. 98. Wicker, *op. cit.*, p. 183.

<sup>5</sup> Paul M. Kattenburg, *The Vietnam Trauma in American Foreign Policy, 1945-75*, New Brunswick, N.J.: Transaction Books, 1980, p. 119. ウィリアム・E・コルビー(大前正臣・山岡清二訳)『栄光の男たち——ウィリアム・コルビー元CIA長官回顧録』政治広報センター, 1978, p. 175. Nolting in Michael Charlton & Anthony Moncrieff, *Many Reasons Why: The American Involvement in Vietnam*, New York: Hill & Wang, 1978, p. 86. Rufus Phillips, "The Cyclops," Al Santoli, *To Bear Any Burden: The Vietnam War and Its Aftermath in the Words of Americans and Southeast Asians*, Bloomington: Indiana Univ. Press, 1999 (orig., E. P. Dutton, 1985), p. 86.

<sup>6</sup> McNamara, *op. cit.*, pp. 320-1. Henry Kissinger, *Diplomacy*, New York: Simon & Schuster, 1994, pp. 656-7. Henry Kissinger, *Ending the Vietnam War: A History of America's Involvement in and Extrication from the Vietnam War*, New York: Simon & Schuster, 2003, p. 37. William Colby (with James McCargar), *Lost Victory: A Firsthand Account of America's Sixteen-Year Involvement in Vietnam*, Chicago: Contemporary Books, 1989, p. 169. Frederick Nolting, *From Trust to Tragedy: The Political Memoirs of Frederick Nolting, Kennedy's Ambassador to Diem's Vietnam*, New York: Praeger, 1988, p. 137.

<sup>7</sup> DeGroot, *op. cit.*, p. 80. Frances FitzGerald, *Fire in the Lake: The Vietnamese and the Americans in Vietnam*, New York: Vintage Books, 1973 (orig., New York: Atlantic-Little, Brown Books, 1972), p. 327. Sarkesian, *op. cit.*, p. 86. Fredrik Logevall, *Choosing War: The Lost Chance for Peace and the Escalation of War in Vietnam*, Berkeley: Univ. of California Press, 1999, p. xvii. Leslie H. Gelb & Richard K. Betts, *The Irony of Vietnam: The System Worked*, Washington, D.C.: Brookings Institution, 1979, p. 93.

<sup>8</sup> Geoffrey Warner, "The United States and Vietnam 1945-65, Part II: 1954-65," *International Affairs*, vol. 48, no. 4 (Oct. 1972), pp. 602-3. Montague Kern, Patricia W. Levering & Ralph B. Levering, *The Kennedy Crises: The Press, the Presidency, and Foreign Policy*, Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, 1983, p. 141. William Prochnau, *Once Upon a Distant War*, New York: Times Books, 1995, p. 155.

<sup>9</sup> W. W. Rostow, *The Diffusion of Power: An Essay in Recent History*, New York: Macmillan, 1972, p. 290.

<sup>10</sup> Special National Intelligence Estimate [以下SNIEと略記] 53-2-63, "The Situation in South Vietnam," July 10, 1963, U.S. Dept. of Defense, *United States-Vietnam Relations 1945-1967: Study Prepared By the Department of Defense* [以下USVRと略記], USGPO, 1971, Book 12, p. 531. Colby, *op. cit.*, p. 129.

<sup>11</sup> Lyndon Baines Johnson, *The Vantage Point: Perspectives of the Presidency 1963-1969*, New York: Holt, Rinehart & Winston, 1971, p. 60. 宮内勝典『焼身』集英社, 2005, p. 138.

<sup>12</sup> Chester L. Cooper, *The Lost Crusade: America in Vietnam*, New York: Dodd, Mead, 1970, p. 208.

<sup>13</sup> デービッド・ハルバスタム (泉鴻之・林雄一郎訳)『ベトナム戦争』みすず書房, 1968, p. 149. Garry Clifford & Kenneth J. Hagan, "JFK: A 'Can-Do' President," Jeffrey P. Kimball, ed., *To Reason Why: The Debate about the Causes of U.S. Involvement in the Vietnam War*, Philadelphia: Temple Univ. Press, 1990, p. 185.

<sup>14</sup> Geoffrey D. T. Shaw, *Ambassador Frederick Nolting's Role in American Diplomatic and Military Policy toward the Government of South Vietnam, 1961-1963*, Winnipeg, Manitoba, Canada: Univ. of Manitoba, Ph.D. dissertaion, 1999, p. 301.

<sup>15</sup> John Mecklin, *Mission in Torment: An Intimate Account of the U.S. Role in Vietnam*, Garden City, N.Y.: Doubleday, 1965, p. 229. Cooper, *op. cit.*, p. 208.

<sup>16</sup> Logevall, *op. cit.* (1999), p. 39. Kattenburg, *op. cit.*, p. 119.

<sup>17</sup> Philip E. Catton, *Diem's Final Failure: Prelude to America's War in Vietnam*, Lawrence: Univ. Press of Kansas, 2002, p. 205.

<sup>18</sup> John F. Kennedy, "America's Stake in Vietnam," Wesley R. Fishel, ed., *Vietnam: Anatomy of a Conflict*, Itasca, Ill.: F. E. Peacock, 1968, p. 144. 拙著『1961 ケネディの戦争——冷戦・ベトナム・東南アジア』朝日新聞社, 1999を参照。

<sup>19</sup> Robert W. Komer, *Bureaucracy at War: U.S. Performance in the Vietnam Conflict*, Boulder, Colo.: Westview Press, 1986, p. 26.

<sup>20</sup> ベンジャミン・C・ブラドリール (大前正臣訳)『ケネディとの対話』徳間書店, 1975, p. 72. Arthur M. Schlesinger, Jr., *A Thousand Days: John F. Kennedy in the White House*, Boston: Houghton Mifflin, 1965, p. 982. Forrestal, Oral History [以下OHと略記], I, p. 10, Lyndon B. Johnson Library, Austin, Tex. [以下LBJLと略記]

<sup>21</sup> Theodore C. Sorensen, *Kennedy*, New York: Harper & Row, 1965, p. 649. Roger Hilsman, *To Move a Nation: The Politics of Foreign Policy in the Administration of John F. Kennedy*, New York: Dell Publishing, 1967 [orig., Doubleday, 1964], pp. 460-1. Rusk, OH, p. 53, John F. Kennedy Library, Boston [以下JFKLと略記。一部は*The John F. Kennedy Presidential Oral History Collection*, Frederick, Md.: Univ. Publications of America, 1988 (microfisches)]. Henry Cabot Lodge, *The Storm Has Many Eyes: A Personal Narrative*, New York: W. W. Norton, 1973, p. 208.

<sup>22</sup> Telegram, CINCPAC to DIA 132315Z, March 13, 1963, *Declassified Documents Reference System*, Arlington, Va.: Carrolton Press [以下DDRSと略記] (microfisches), Retrospective [以下Rと略記]-81G. "JCS Report on South Vietnam," n.d. [Jan. 1963], U.S. Dept. of State, *Foreign Relations of the United States, 1961-1963* [以下FRUSと略記], vol. 3, USGPO, 1991, p. 82. Address by Rusk, April 22, 1963, U.S. Dept. of State, *Department of State Bulletin* [以下DSBと略記], May 13, 1963, p. 729.

<sup>23</sup> Memorandum of Conversation at White House, April 4, 1963, *FRUS*, 3, p. 198. Nolting in Charlton & Moncrieff, *op. cit.*, p. 86.

- <sup>24</sup> Ken Post, *Revolution, Socialism and Nationalism in Viet Nam*, Aldershot, U.K.: Dartmouth Publishing, 1990, vol. 4, p. 148. Address by Hilsman, June 14, 1963, *DSB*, July 8, p. 48. Address by Heavner, Aug. 25, 1963, *ibid.*, Sept. 9, 1963, p. 396. Letter, Harkins to Diem, Feb. 23, 1963, *FRUS*, 3, p. 121.
- <sup>25</sup> National Intelligence Estimate [以下NIE と略記] 53-63, "Prospects in South Vietnam," April 17, 1963, *FRUS*, 3, p. 234.
- <sup>26</sup> U. Alexis Johnson (with Jef Olivarius McAllister), *The Right Hand of Power*, Englewood Cliffs, NJ.: Prentice-Hall, 1984, p. 411. Victor Perlo & Kumar Goshal, *Bitter End in Southeast Asia*, New York: Marzoni & Munsell Publishers, 1964, p. 62. Catton, *op. cit.*, p. 4.
- <sup>27</sup> David Halberstam, *The Best and the Brightest*, New York: Random House, 1969, p. 206. 小沼新『ベトナム民族解放運動史——ベトナムから解放戦線へ』法律文化社, 1988, p. 139.
- <sup>28</sup> 小沼新「解放闘争の組織化」谷川榮彦(編著)『ベトナム戦争の起源』勁草書房, 1984, p. 145. 小沼, 前掲, p. 215.
- <sup>29</sup> ハルバスタム, 前掲, p. 38. Schlesinger, *op. cit.*, pp. 543-4. Richard Nixon, *No More Vietnams*, New York: Arbor House, 1985, p. 40. Memorandum of Conversation with Nhu, April 12, 1963, *FRUS*, 3, p. 222.
- <sup>30</sup> Marguerite Higgins, *Our Vietnam Nightmare*, New York: Harper & Row, 1965, p. 175.
- <sup>31</sup> Tran Van Don, *Our Endless War: Inside Vietnam*, San Rafael, Ca.: Presidio Press, 1978, p. 52. 石井米雄(監修), 桜井由躬雄・桃木至朗(編)『ベトナムの事典』同朋舎, 1999, p. 107. 小沼, 前掲, p. 148.
- <sup>32</sup> Robert Scigliano, *South Vietnam: Nation Under Stress*, Boston: Houghton Mifflin, 1964 (orig., 1963), p. 94. Michael E. Latham, *Modernization as Ideology: American Social Science and "Nation Building" in the Kennedy Era*, Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, 2000, p. 186.
- <sup>33</sup> ハルバスタム, 前掲, p. 47. Mecklin, *op. cit.*, p. 50.
- <sup>34</sup> Nguyen Cao Ky, *How We Lost the Vietnam War*, New York: Scarborough House, 1978 (orig., *Twenty Years and Twenty Days*, Stein & Day, 1976), p. 28.
- <sup>35</sup> Matthew B. Masur, *Hearts and Minds: Cultural Nation-Building in South Vietnam*, Ph.D. dissertation, Ohio Univ., 2004, p. 34. Lloyd Gardner, "Cold War Counter Revolution, 1960-1970," William Appleman Williams, ed., *From Colony to Empire: Essays in the History of American Foreign Relations*, New York: John Wiley & Sons, 1972, p. 460.
- <sup>36</sup> Tran Van Don, *op. cit.*, p. 66.
- <sup>37</sup> Marc Jason Gilbert, "The Cost of Losing the 'Other War' in Vietnam," Marc Jason Gilbert, ed., *Why the North Won the Vietnam War*, New York: Palgrave, 2002, p. 159. 中野亜里「ベトナムの革命戦争」中野亜里(編)『ベトナム戦争の「戦後」』めこん, 2005, p. 34.
- <sup>38</sup> 小沼, 前掲, p. 194. ニール・シーハン(菊谷匡祐訳)『輝ける嘘』集英社, 1992, 上, p. 216. Robert Shaplen, *The Lost Revolution: The U.S. in Vietnam, 1946-1966*, New York: Harper & Row, rev. ed., 1966 (orig., 1955), p. 157.
- <sup>39</sup> 小沼, 前掲, p. 195. 真保潤一郎『ベトナム現代史——帝国主義下のインドシナ研究序説〔増補版〕』春秋社, 1978, p. 248. Spencer C. Tucker, ed., *Encyclopedia of the Vietnam War: A Political, Social, and Military History*, Santa Barbara, Ca.: ABC-CLIO, 1998, vol. 2, p. 463. 丸山静雄『ベトナム戦争』筑摩書房, 1969, p. 17.
- <sup>40</sup> Stanley I. Kutler, ed., *Encyclopedia of the Vietnam War*, New York: Charles Scribner's Sons, 1996, p. 346.

- <sup>41</sup> アーサー・シュレジンガー Jr. (横川信義訳) 『にがい遺産——ベトナム戦争とアメリカ』 毎日新聞社, 1967, p. 51. 小沼, 前掲, p. 143.
- <sup>42</sup> ジョン・ケネス・ガルブレイス (西野照太郎訳) 『大使の日記』 河出書房新社, 1973, p. 257. Nguyen Cao Ky, *op. cit.*, p. 32.
- <sup>43</sup> Weldon A. Brown, *Prelude to Disaster: The American Role in Vietnam 1940-1963*, Port Washington, N.Y.: Kennikat Press, 1975, p. 145. Scigliano, *op. cit.*, p. 56.
- <sup>44</sup> Nolting, *op. cit.*, p. 60. Memorandum, Hilsman & Forrestal to President, Jan. 25, 1963, *FRUS*, 3, p. 58. Bernard B. Fall, *The Two Viet-Nams: A Political and Military Analysis*, New York: F. A. Praeger, 1963, p. 386.
- <sup>45</sup> Mecklin, *op. cit.*, p. 316. Anthony James Joes, *The War for South Vietnam: 1954-1975*, New York: Praeger, 1989, p. 69. Joseph Buttinger, *Vietnam: A Dragon Embattled*, New York: F. A. Praeger, 1967, vol. 2, p. 965.
- <sup>46</sup> James William Gibson, *The Perfect War: Technowar in Vietnam*, Boston: Atlantic Monthly Press, 1986, p. 82.
- <sup>47</sup> CIA Information Report TDCS DB-3/655,301, June 28, 1963, *FRUS*, 3, p. 424.
- <sup>48</sup> Nguyen Cao Ky, *op. cit.*, p. 32. Denis Warner, *The Last Confucian*, New York: Macmillan, 1963, p. 65. Prochnau, *op. cit.*, p. 17.
- <sup>49</sup> Rostow, *op. cit.*, p. 292. Nolting, *op. cit.*, p. 81. Cooper, OH, p. 38, JFKL.
- <sup>50</sup> Warner, *op. cit.*, pp. 71, 73, 95.
- <sup>51</sup> Neil L. Jamieson, *Understanding Vietnam*, Berkeley: Univ. of California Press, 1995 (orig., 1993), p. 237. Cooper, *op. cit.*, pp. 206-7.
- <sup>52</sup> Nguyen Cao Ky, *op. cit.*, pp. 33-4. Tran Van Don, *op. cit.*, pp. 50-1. Sir Robert Thompson, *Make for the Hills: Memories of Far Eastern Wars*, London: Leo Cooper, 1989, p. 136. Robert Scigliano, "Vietnam: A Country at War," *Asian Survey*, vol. 3, no. 1 (Jan. 1963), p. 54.
- <sup>53</sup> 小沼, 前掲, p. 143. Joes, *op. cit.*, p. 67.
- <sup>54</sup> ハルバスタム, 前掲, p. 38. McNamara, *op. cit.*, pp. 41-2.
- <sup>55</sup> Douglas Pike, *Viet Cong: The Organization and Techniques of the National Liberation Front of South Vietnam*, Cambridge, Mass.: M.I.T. Press, 1966, p. 73. ソレンセン, 前掲, p. 186.
- <sup>56</sup> バーナード・フォール (松元洋訳) 『ベトナム戦史』 至誠堂, 1969, p. 202. 小沼, 谷川前掲 (1984), pp. 144-5.
- <sup>57</sup> 丸山, 前掲, pp. 62-3. 大森実 (監修) 『泥と炎のインドシナ』 毎日新聞社, 1965, p. 149. Harriman, OH, p. 107, JFKL.
- <sup>58</sup> FitzGerald, *op. cit.*, p. 171. Scigliano, *op. cit.*, p. 59. SNIE 53-2-63, July 10, 1963, *USVR*, 12, p. 534.
- <sup>59</sup> 丸山静雄 『東南アジア』 みすず書房, 1962, p. 116. Tran Van Don, *op. cit.*, p. 54.
- <sup>60</sup> Nguyen Cao Ky, *op. cit.*, p. 33. Mecklin, *op. cit.*, p. 32. U. Johnson, *op. cit.*, p. 411.
- <sup>61</sup> Tucker, *op. cit.*, 2, p. 476. ハルバスタム, 前掲, p. 46.
- <sup>62</sup> Nguyen Cao Ky, *op. cit.*, p. 33.
- <sup>63</sup> Edwin E. Moïse, *The A to Z of the Vietnam War*, Lanham, Md.: Scarecrow Press, 2005, p. 71.

『NAM——狂気の戦争の真実』同朋舎, 1990, p. 31.

<sup>64</sup> Telegram, U.S. Embassy, Saigon [以下Saigon と略記] to Dept. of State [以下DOS と略記] 371, Aug. 29, 1963, *FRUS*, 4, p. 18. Hilsman, *op. cit.*, p. 476. ハルバスタム, 前掲, p. 183. Sarkesian, *op. cit.*, p. 147.

<sup>65</sup> Memorandum, Hughes to Rusk, Sept. 15, 1963, *FRUS*, 4, p. 213.

<sup>66</sup> Nolting, *op. cit.*, p. 101. Colby, *op. cit.*, p. 102.

<sup>67</sup> Telegram, Saigon to DOS 346, Aug. 27, 1963, *FRUS*, 3, p. 653. ハルバスタム, 前掲, p. 41.

<sup>68</sup> Memorandum, Forrestal to Harriman, March 8, 1963, *FRUS*, 3, p. 143. Higgins, *op. cit.*, p. 170.

<sup>69</sup> Colby, *op. cit.*, p. 37. Cooper, *op. cit.*, p. 214. ピーター・アーネット (沼澤治訳) 『戦争特派員——CNN 名物記者の自伝』新潮社, 1995, p. 79. McNamara, *op. cit.*, p. 42.

<sup>70</sup> Mecklin, *op. cit.*, p. 51. ハルバスタム, 前掲, p. 44.

<sup>71</sup> Terrence Maitland, Stephen Weiss & Editors of Boston Publishing Co., *The Vietnam Experience: Raising the Stakes*, Boston: Boston Publishing, 1982, p. 65.

<sup>72</sup> ハルバスタム, 前掲, pp. 39, 45. Maitland, et al., *op. cit.*, p. 65.

<sup>73</sup> Prochnau, *op. cit.*, p. 122. Scigliano, *op. cit.*, p. 64.

<sup>74</sup> McNamara, *op. cit.*, p. 42. Kutler, *op. cit.*, p. 359. コルビー, 前掲, p. 131.

<sup>75</sup> Masur, *op. cit.*, pp. 1-2, 200. Michael Field, *The Prevailing Wind: Witness in Indo-China*, London: Methuen, 1965, p. 319.

<sup>76</sup> Memorandum of Conversation at DOS, July 5, 1963, *FRUS*, 3, p. 466. Schlesinger, *op. cit.*, p. 538.

<sup>77</sup> Mecklin, *op. cit.*, p. 50. ハルバスタム, 前掲, p. 46.

<sup>78</sup> Fall, *op. cit.*, pp. 266-7. Prochnau, *op. cit.*, p. 201. Perlo & Goshal, *op. cit.*, p. 45. 丸山泉「内戦政策の破綻」谷川, 前掲, p. 225

<sup>79</sup> Maurice Matloff, ed., *American Military History*, Washington, D.C.: Office of Chiefs of Military History, U.S. Army, 1969, p. 624. Field, *op. cit.*, p. 320. Nguyen Cao Ky, *op. cit.*, p. 33. Hilsman, *op. cit.*, p. 476.

<sup>80</sup> SNIE 53-2-63, July 10, 1963, *USVR*, 12, p. 535. ハルバスタム, 前掲, p. 40.

<sup>81</sup> CIA Information Report TDCS-3/541,020, March 20, 1963, National Security Files, Country Series [以下NSFC と略記], Box 197, Folder "Vietnam vol. X, 3/20/63-3/29/63," JFKL. [*Vietnam: National Security Files, 1961-1963*, Bethesda, Md.: Univ. Press of America, 1991 (microfilms) (以下NSF と略記), Reel 4: Frame 343-4]

<sup>82</sup> Memorandum, Hilsman & Forrestal to President, Jan. 25, 1963, *FRUS*, 3, p. 59.

<sup>83</sup> Memorandum, Mecklin to Manell, March 15, 1963, *ibid.*, 3, p. 154. Hilsman, *op. cit.*, p. 468. シュレジンガー, 前掲, p. 44. Mecklin, *op. cit.*, pp. 39, 42.

<sup>84</sup> コルビー, 前掲, p. 123. William Henderson & Wesley R. Fishel, "The Foreign Policy of Ngo Dinh Diem," Fishel, *op. cit.*, p. 218.

<sup>85</sup> Cooper, OH, p. 39, JFKL. Geoffrey Warner, "The United States and the Fall of Diem: I, The Coup That Never Was," *Australian Outlook*, vol. 28, no. 3 (Dec. 1974), p. 245.

<sup>86</sup> *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 2.

- <sup>87</sup> Telegram, Saigon to DOS 882, April 5, 1963, *FRUS*, 3, p. 212. Memorandum of Conversation with Nhu, April 12, 1963, *ibid.*, 3, p. 224. Mecklin, *op. cit.*, pp. 46-7.
- <sup>88</sup> Telegram, Saigon to DOS 852, March 28, 1963, *FRUS*, 3, p. 184. McNamara, *op. cit.*, p. 42. Nolting, *op. cit.*, p. 16.
- <sup>89</sup> Memorandum, Mecklin to Manell, March 15, 1963, *FRUS*, 3, p. 155. 強調は原文。
- <sup>90</sup> 丸山, 谷川前掲, p. 205. Douglas A. Borer, *Superpowers Defeated: Vietnam and Afghanistan Compared*, London: Frank Cass, 1999, p. 105. Thomas C. Reeves, *A Question of Character: A Life of John F. Kennedy*, New York: Free Press, 1991, p. 289.
- <sup>91</sup> Robert F. Kennedy, *To Seek a Newer World*, Garden City, N.Y.: Doubleday, 1967, p. 226. ソレンセン, 前掲, p. 185. Bundy, OH, p. 10, LBJL. Komer, *op. cit.*, pp. 32, 69.
- <sup>92</sup> Nolting, *op. cit.*, p. 93. Telegram, Saigon to DOS 852, March 28, 1963, *FRUS*, 3, p. 184. Halberstam, *op. cit.*, p. 208.
- <sup>93</sup> Estimates by CIA Saigon, n.d. [Aug. 1963], *FRUS*, 3, p. 572. Telegram, Paris (Delegation at SEATO Council) to DOS Secto 19, April 10, 1963, *ibid.*, 3, p. 220. Shaplen, *op. cit.*, p. 166.
- <sup>94</sup> William Conrad Gibbons, *The U.S. Government and the Vietnam War: Executive and Legislative Roles and Relationships*, Princeton, N.J.: Princeton Univ. Press, 1986, pt. 2, p. 192. Shaplen, *op. cit.*, p. 155. Harkins, OH, p. 52, Military History Institute, Carlisle, Pa. [以下MHIと略記]
- <sup>95</sup> David F. Schmitz, *Thank God They're on Our Side: The United States and Right-Wing Dictatorships, 1921-1965*, Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, 1999, p. 4 et passim. Schlesinger, *op. cit.*, p. 769. Drachnik, OH, p. 15, JFKL.
- <sup>96</sup> Robert S. McNamara, James G. Blight & Robert K. Brigham, *Argument Without End: In Search of Answers to the Vietnam Tragedy*, New York: Public Affaris, 1999, pp. 22, 385. McNamara, *op. cit.*, pp. 100-1. Cooper, *op. cit.*, ch. 6.
- <sup>97</sup> Airgram, DOS to All Posts CA-8486, Feb. 8, 1963, NSFC, 197, "Vietnam General 2/1/63-2/27/63," JFKL. [*The John F. Kennedy National Security Files, 1961-1963: Vietnam First Supplement*, Bethesda, Md.: Univ. Press of America, 2004 (microfilms) 〈以下NSFSと略記〉, 2: 483].
- <sup>98</sup> Nolting, *op. cit.*, pp. 59-60. Fall, *op. cit.*, p. 271. George W. Ball, *Diplomacy for a Crowded World: An American Foreign Policy*, Boston: Little, Brown, 1976, p. 52. Catton, *op. cit.*, pp. 2, 25, 209.
- <sup>99</sup> Scigliano, *op. cit.*, p. 158. Hess, *op. cit.*, p. 68. Gerald C. Hickey, *A Window on a War: An Anthropologist in the Vietnam Conflict*, Lubbock: Texas Tech Univ. Press, 2002, p. 93.
- <sup>100</sup> シーハン, 前掲, 上, p. 231. FitzSimons, *op. cit.*, p. 213.
- <sup>101</sup> Report by Mansfield, Feb. 25, 1963, DOS Historical Office, *American Foreign Policy: Current Documents, 1963*, Reprint ed., New York: Arno Press, 1971 (orig., USGPO, 1967) [以下AFPと略記], p. 838. Mecklin, *op. cit.*, p. 258.
- <sup>102</sup> 小沼, 谷川前掲, p. 142. 小沼, 前掲, pp. 191-2. 丸山, 前掲 (1962), p. 134.
- <sup>103</sup> 丸山, 前掲 (1969), pp. 55-6. 油井大三郎・古田元夫『世界の歴史 28 第二次世界大戦から米ソ対立へ』中央公論社, 1998, p. 316. Remarks at Breakfast of Fort Worth Chamber of Commerce, Nov. 22, 1963, *Public Papers of the Presidents of the United States, John F. Kennedy, 1963* [以下PPPと略記], USGPO, 1964, p. 889.

- <sup>104</sup> Letter, Harriman to Nolting, Jan. 30, 1963, *FRUS*, 3, p. 68. Mecklin, *op. cit.*, pp. 20-1. "JCS Team Report on South Vietnam," n.d. [Jan. 1963] *FRUS*, 3, pp. 75, 87.
- <sup>105</sup> Sorensen, *op. cit.*, pp. 657-8. Memorandum, Forrestal to Harriman, Feb. 8, 1963, *FRUS*, 3, p. 106. Schlesinger, *op. cit.*, p. 548.
- <sup>106</sup> Hilsman, *op. cit.*, p. 137. Ball, *op. cit.*, p. 54. Airgram, DOS to All Posts CA-8486, Feb. 8, 1963, NSFC, 197, "Vietnam General 2/1/63-2/27/63," JFKL. [*NSFS*, 2: 483]
- <sup>107</sup> Hersh, *op. cit.*, p. 415. David Burner & Thomas R. West, *The Torch Is Passed: The Kennedy Brothers & American Liberalism*, New York: Atheneum, 1984, p. 140.
- <sup>108</sup> FitzGerald, *op. cit.*, p. 97. Seth Stephen Jacobs, "Sink or Swim with Ngo Dinh Diem": *Religion, Orientalism, and United States Intervention in Vietnam, 1950-1957*, Ph.D. dissertation, Northwestern Univ., 2000, p. 4.
- <sup>109</sup> Cooper, *op. cit.*, p. 133. Gibbons, *op. cit.*, 2, pp. 142-3, 267. Marilyn B. Young, *The Vietnam Wars: 1945-1990*, New York: Harper Collins, 1991, p. 94.
- <sup>110</sup> Thomas Maier, *The Kennedys: America's Emerald Kings*, New York: Basic Books, 2003, p. 387. Fall, *op. cit.*, p. 147. Bernard B. Fall, "The Second Indochina War," *International Affairs*, vol. 41, no. 1 (Jan. 1965), p. 996. Memorandum, Wood to Harriman, Jan. 31, 1963, *FRUS*, 3, p. 71.
- <sup>111</sup> Report by Mansfield, Feb. 25, 1963, *AFP*, p. 843. David Kaiser, *American Tragedy: Kennedy, Johnson, and the Origins of the Vietnam War*, Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 2000, p. 177.
- <sup>112</sup> Letter, Helble to Trueheart, March 1, 1963, *FRUS*, 3, p. 124. Memorandum, Mecklin to Manell, March 15, 1963, *ibid.*, 3, pp. 153-4. Memorandum, Hilsman to Dutton, April 3, 1963, *ibid.*, 3, p. 124. Nolting, *op. cit.*, p. 98.
- <sup>113</sup> Memorandum, Mecklin to Manell, March 15, 1963, *FRUS*, 3, p. 155. Telegram, DOS to Saigon 911, March 29, 1963, *ibid.*, 3, p. 185.
- <sup>114</sup> Memorandum, Bowles to President, March 7, 1963, *ibid.*, 3, p. 140. CIA Office of Current Intelligence [以下OCIと略記] Memorandum SC No. 02142/63, Jan. 11, 1963, *CIA Research Reports: Vietnam and Southeast Asia, Supplement*, Frederick, Md.: Univ. Publications of America, 1986 (microfilms), 2: 360. McNamara, *op. cit.*, p. 333.
- <sup>115</sup> 開高健『ベトナム戦記』朝日文庫, 1990, p. 30. Ellen J. Hammer, *A Death in November: America in Vietnam, 1963*, New York: E. P. Dutton, 1987, p. 108. ハルバスタム, 前掲, p. 148.
- <sup>116</sup> Hammer, *op. cit.*, p. 105. CIA Special Report SC No. 00611/63C, Sept. 27, 1963, NSFC, 200, "Vietnam, 9/22/63-10/5/63, Memos and Misc [ellaneous].," JFKL. [*NSF*, 5: 586]
- <sup>117</sup> Tran Van Don, *op. cit.*, p. 65. Frank N. Trager, *Why Viet Nam?*, New York: F. A. Praeger, 1966, p. 179. Scigliano, *op. cit.*, p. 59.
- <sup>118</sup> CIA Information Report, May 18, 1963, NSFC, 197, "Vietnam, General 5/18/63-5/31/63," JFKL. [*NSFS*, 2: 646] Edwin F. Black, "The Role of Buddhism in the Overthrow of Diem," *Orbis*, vol. 14, no. 4 (Winter 1971), p. 996. Douglas S. Blaufarb, *The Counterinsurgency Era: U.S. Doctrine and Performance, 1950 to the Present*, New York: Free Press, 1977, pp. 112-3.
- <sup>119</sup> Mecklin, *op. cit.*, p. 153. SNIE 53-2-63, July 10, 1963, *USVR*, 12, p. 531. Airgram, Hue to DOS A-20, June 3, 1963, *FRUS*, 3, p. 278n.
- <sup>120</sup> CIA Information Report, May 18, 1963, NSFC, 197, "Vietnam, General 5/18/63-5/31/63," JFKL. [*NSFS*, 2: 647]

- <sup>121</sup> Shaw, *op. cit.*, p. 356. Higgins, *op. cit.*, p. 91.
- <sup>122</sup> Telegram, Hue to DOS 5, May 9, 1963, *FRUS*, 3, p. 285. Telegram, Hue to DOS 6, May 10, 1963, *ibid.*, 3, p. 286.
- <sup>123</sup> Prochnau, *op. cit.*, p. 304. Nolting, *op. cit.*, p. 106.
- <sup>124</sup> D. R. SarDesai, *Vietnam: Past and Present*, Boulder, Colo.: Westview Press, 4th ed., 2005 (orig., 1992), pp. 83-4. シーハン, 前掲, 上, p. 394.
- <sup>125</sup> Shaw, *op. cit.*, p. 359.
- <sup>126</sup> 『年誌ベトナム戦争』(『世界』1973年4月付録)p. 34. Young, *op. cit.*, p. 95.
- <sup>127</sup> Higgins, *op. cit.*, p. 91. Mecklin, *op. cit.*, p. 153.
- <sup>128</sup> Cooper, *op. cit.*, p. 210n. SNIE 53-2-63, July 10, 1963, *USVR*, 12, p. 531.
- <sup>129</sup> Nixon, *op. cit.*, p. 10.
- <sup>130</sup> Smith, *op. cit.*, 2, p. 149. Francis X. Winters, *The Year of the Hare: America in Vietnam, January 25, 1963-February 15, 1964*, Athens: Univ. of Georgia Press, 1997, p. 30. Higgins, *op. cit.*, p. 48.
- <sup>131</sup> Nguyen Cao Ky, *op. cit.*, p. 34. Anthony Trawick Bouscaren, *The Last of the Mandarins: Diem of Vietnam*, Pittsburgh: Duquesne Univ. Press, 1965, p. 108. Winters, *op. cit.*, p. 25. Nixon, *op. cit.*, p. 65. William J. Duiker, *The Communist Road to Power in Vietnam*, Boulder, Colo.: Westview Press, 1981, p. 218.
- <sup>132</sup> Hilsman, *op. cit.*, p. 469. Mecklin, *op. cit.*, p. 161. 石井ほか, 前掲, p. 29.
- <sup>133</sup> *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 4. OCI Memorandum 2342/63, Aug. 23, 1963, NSFC, 197, "Vietnam, General 8/21/63-8/23/63," JFKL. [*NSFS*, 3: 65]
- <sup>134</sup> Hilsman, *op. cit.*, p. 470. Bouscaren, *op. cit.*, pp. 89, 127-8.
- <sup>135</sup> Higgins, *op. cit.*, p. 45. Winters, *op. cit.*, p. 25. Bouscaren, *op. cit.*, pp. 89-90.
- <sup>136</sup> コルビー, 前掲, p. 177. Harkins, OH, p. 53, MHL.
- <sup>137</sup> CIA Special Report SC 00611/63C, Sept. 27, 1963, NSFC, 200, "Vietnam, 9/22/63-10/5/63, Memos and Misc.," JFKL. [*NSF*, 5: 585-6] 桜井由躬雄・石澤良昭『世界現代史7 東南アジア現代史Ⅲ』山川出版社, 1977, p. 244.
- <sup>138</sup> Hoang Nguyen Tran, *The Complexity and Dynamics of the 1963 Buddhist Crisis in South Vietnam*, California State Univ., M.A. thesis, 2001, p. 30. Maitland, et al., *op. cit.*, p. 75. D. Warner, *op. cit.*, p. 185.
- <sup>139</sup> SNIE 53-2-63, July 10, 1963, *USVR*, 12, p. 531.
- <sup>140</sup> Scigliano, *op. cit.*, p. 55. Shaplen, *op. cit.*, p. 192. M・シバラム(小谷秀二郎訳)『ベトナム戦争への疑問』荒地出版社, 1966, p. 92.
- <sup>141</sup> 石田正治「ベトナムの分断」谷川, 前掲, p. 95.
- <sup>142</sup> OCI Special Report SC 00598/63A, June 28, 1963, NSFC, 197, "Vietnam 6/25/63-6/30/63," JFKL. [*NSF*, 4: 579] Post, *op. cit.*, 4, p. 184. Prochnau, *op. cit.*, pp. 311-2.
- <sup>143</sup> 真保, 前掲, p. 261. 小沼, 前掲, p. 147.
- <sup>144</sup> William S. Turley, *The Second Indochina War: A Short Political and Military History, 1954-1975*, Boulder, Colo.: Westview Press, 1986, p. 35. CIA Information Report, May 18, 1963, NSFC, 197, "Vietnam: General 5/18/63-5/31/63," JFKL. [*NSFS*, 2: 646]

- <sup>145</sup> Cooper, *op. cit.*, p. 210. Maitland, et al., *op. cit.*, p. 75. Telegram, Saigon to DOS 1155, June 11, 1963, *FRUS*, 3, p. 378. Research Memorandum RFE-55, June 21, 1963, *ibid.*, 3, p. 405.
- <sup>146</sup> Scigliano, *op. cit.*, pp. 52-4. ハルバスタム, 前掲, p. 161.
- <sup>147</sup> Memorandum of Conversation at White House, Sept. 11, 1963, *FRUS*, 4, p. 187.
- <sup>148</sup> George A. Carver, Jr., "The Real Revolution in South Viet Nam," *Foreign Affairs*, vol. 43, no. 3 (April 1965), p. 394. Memorandum, McNamara & Taylor to President, Oct. 2, 1963, NSFC, 200, "Vietnam: 9/22/63-10/5/63, McNamara-Taylor Report," JFKL. [*NSF*, 5: 754] McNamara, *op. cit.*, p. 75.
- <sup>149</sup> Patrick Lloyd Hatcher, *The Suicide of an Elite: American Internationalists and Vietnam*, Stanford, Ca.: Stanford Univ. Press, 1990, p. 140. Hoang Nguyen Tran, *op. cit.*, p. 24. Smith, *op. cit.*, 2, p. 149.
- <sup>150</sup> Research Memorandum RFE-75, Aug. 21, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/21/63-8/23/63," JFKL. [*NSFS*, 3:18]
- <sup>151</sup> コルビー, 前掲, p. 175. Mecklin, *op. cit.*, p. 157.
- <sup>152</sup> Rostow, *op. cit.*, p. 292. OCI Special Report SC 00598/63A, June 28, 1963, NSFC, 197, "Vietnam 6/25/63-6/30/63," JFKL. [*NSF*, 4: 575]
- <sup>153</sup> SarDesai, *op. cit.*, p. 82. Black, *op. cit.*, p. 992. Nguyen Cao Ky, *op. cit.*, p. 34. Hess, *op. cit.*, pp. 75-6.
- <sup>154</sup> Research Memorandum RFE-75, Aug. 21, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/21/63-8/23/63," JFKL. [*NSFS*, 3: 18]
- <sup>155</sup> Nolting, *op. cit.*, p. 116. OCI Memorandum No.2342/63, Aug. 23, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/21/63-8/23/63," JFKL. [*NSFS*, 3: 66] Telegram, CIA Saigon to CIA IN 16397, Sept. 10, 1963, *FRUS*, 4, p. 147. Maxwell D. Taylor, *Swords and Plowshares*, New York: W. W. Norton, 1972, p. 289. U. Johnson, *op. cit.*, p. 411. Higgins, *op. cit.*, pp. 92-3, 100.
- <sup>156</sup> Telegram, Hue to DOS 5, May 10, 1963, *FRUS*, 3, p. 284. Telegram, Hue to DOS 6, May 10, 1963, *ibid.*, 3, p. 286. *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 5.
- <sup>157</sup> Manifesto of Vietnamese Buddhist Clergy and Faithful, May 10, 1963, *FRUS*, 3, pp. 287-8.
- <sup>158</sup> Telegram, Saigon to DOS 1038, May 18, 1963, *FRUS*, 3, pp. 310-1.
- <sup>159</sup> Mecklin, *op. cit.*, p. 155. ハルバスタム, 前掲, pp. 153-4.
- <sup>160</sup> Maitland, et al., *op. cit.*, p. 76. *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 5.
- <sup>161</sup> OCI Memorandum 1561/63, June 3, 1963, *FRUS*, 3, p. 345.
- <sup>162</sup> Charles A. Joiner, "South Vietnam's Buddhist Crisis: Organization for Charity, Dissidence, and Unity," *Asian Survey*, vol. 4, no. 7 (July 1964), p. 916.
- <sup>163</sup> Telegram, Saigon to DOS 1146, June 11, *FRUS*, 3, pp. 374. Telegram, Saigon to DOS 1147, June 11, *ibid.*, 3, p. 375.
- <sup>164</sup> Hilsman, *op. cit.*, p. 474. Mecklin, *op. cit.*, p. 167. 宮内, 前掲, pp. 171, 246.
- <sup>165</sup> Higgins, *op. cit.*, pp. 41, 86. Nixon, *op. cit.*, p. 67. Nolting, *op. cit.*, pp. 115-6. Bouscaren, *op. cit.*, p. 93.
- <sup>166</sup> Hammer, *op. cit.*, p. 314. Bouscaren, *op. cit.*, p. 127. 宮内, 前掲, pp. 23, 52.
- <sup>167</sup> Nolting, *op. cit.*, p. 115. Mecklin, *op. cit.*, p. 168.
- <sup>168</sup> Telegram, DOS to Saigon 1207, June 11, 1963, *FRUS*, 3, p. 381. Rostow, OH, p. 85, JFKL.
- <sup>169</sup> Lodge, OH, p. 5, *ibid.* U. Johnson, *op. cit.*, p. 411.

- <sup>170</sup> Mecklin, *op. cit.*, pp. 156, 158, 161. ハルバスタム, 前掲, p. 234. 開高, 前掲, p. 69.
- <sup>171</sup> SarDesai, *op. cit.*, p. 82. Message, USARMA Saigon to ASCI DA 211205Z, Aug. 21, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/21/63-8/23/63," JFKL. [NSFS, 3: 28]
- <sup>172</sup> Telegram, Hue to DOS 5, May 10, 1963, *FRUS*, 3, p. 284. Telegram, Saigon to DOS 1161, June 12, 1963, *ibid.*, 3, p. 383.
- <sup>173</sup> Bouscaren, *op. cit.*, p. 101. Sanford Wexler, *The Vietnam War: An Eyewitness History*, New York: Facts On File, 1992, p. 58.
- <sup>174</sup> Higgins, *op. cit.*, pp. 100-1. Bouscaren, *op. cit.*, p. 102. Hammer, *op. cit.*, p. 164. Robert C. Grogin, *Natural Enemies: The United States and the Soviet Union in the Cold War, 1917-1991*, Lanham, Md.: Lexington Books, 2001, p. 265. U. Johnson, *op. cit.*, p. 411.
- <sup>175</sup> Telegram, Saigon to DOS 1076, May 30, 1963, *FRUS*, 3, p. 336. Telegram, Saigon to DOS 1107, June 5, 1963, *ibid.*, 3, p. 356.
- <sup>176</sup> Telegram, Saigon to DOS 1114, June 6, 1963, *ibid.*, 3, p. 360. Telegram, Saigon to DOS 1156, June 11, 1963, *ibid.*, 3, p. 377n.
- <sup>177</sup> Telegram, Saigon to DOS 1249, June 28, 1963, *ibid.*, 3, p. 426n. *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 6.
- <sup>178</sup> Telegram, Saigon to DOS 1050, May 22, 1963, *FRUS*, 3, p. 314. OCI Memorandum 1561/63, June 3, 1963, *FRUS*, 3, p. 345.
- <sup>179</sup> CIA Special Report SC No.00611/63C, Sept. 27, 1963, NSFC, 200, "Vietnam, 9/22/63-10/5/63, Memos and Misc.," JFKL. [NSF, 5: 586] Tran Van Don, *op. cit.*, p. 70.
- <sup>180</sup> Hilsman, *op. cit.*, p. 469. ハルバスタム, 前掲, p. 149.
- <sup>181</sup> *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 8. Mecklin, *op. cit.*, p. 158. OCI Memorandum 1561/63, June 3, 1963, *FRUS*, 3, p. 345.
- <sup>182</sup> CIA Information Report TDCS DB-3/655,301, June 28, 1963, *ibid.*, 3, p. 425.
- <sup>183</sup> Telegram, Saigon to DOS 1249, June 28, 1963, NSFC, 197, "Vietnam 6/25/36-6/30/63," JFKL. [NSF, 4: 572]
- <sup>184</sup> Nolting, *op. cit.*, p. 115. Telegram, Saigon to DOS 1083, May 31, 1963, *FRUS*, 3, p. 338. SNIE 53-2-63, July 10, 1963, *USVR*, 12, pp. 532-3.
- <sup>185</sup> Catton, *op. cit.*, p. 205. William J. Duiker, "Hanoi's Response to American Policy, 1961-1965: Crossed Signals?," Lloyd C. Gardner & Ted Gittinger, eds., *Vietnam: The Early Decisions*, Austin: Univ. of Texas Press, 1997, p. 66.
- <sup>186</sup> Telegram, Saigon to DOS 1155, June 11, 1963, *FRUS*, 3, p. 379.
- <sup>187</sup> Hilsman, *op. cit.*, p. 471. Post, 4, *op. cit.*, pp. 189-90.
- <sup>188</sup> McNamara, et al., *op. cit.*, p. 163. William P. Bundy, "Kennedy and Vietnam," Kenneth W. Thompson, ed., *The Kennedy Presidency: Seventeen Intimate Perspectives of John F. Kennedy*, Lanham, Md.: Univ. Press of America, 1985, p. 253.
- <sup>189</sup> Telegram, Saigon to DOS 1155, June 11, 1963, *FRUS*, 3, p. 379. CIA Special Report SC 00611/63C, Sept. 27, 1963, NSFC, 200, "Vietnam, 9/22/63-10/5/63, Memos and Misc.," JFKL. [NSF, 5: 586]
- <sup>190</sup> Fall, *op. cit.*, p. 336. Colby, *op. cit.*, p. 132.
- <sup>191</sup> *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 4. Colby, *op. cit.*, p. 130. Masur, *op. cit.*, pp. 115, 117.

- <sup>192</sup> Telegram, COMUSMACV to CINCPAC MAC J3 5063, June 3, 1963, *DDRS*, R-83A. シーハン, 前掲, 上, p. 395.
- <sup>193</sup> Telegram, Saigon to DOS 1101, June 4, *FRUS*, 3, p. 347. Telegram, Hue to DOS 107, June 3, NSFC, 197, "Vietnam 6/1/63-6/5/63," JFKL. [*NSF*, 4: 463]
- <sup>194</sup> Telegram, Saigon to DOS 1113, June 6, NSFC, 197, "Vietnam, General 6/6/63-6/15/63," JFKL. [*NSFS*, 2: 666] Telegram, Saigon to DOS 1137, June 9, 1963, *FRUS*, 3, p. 370.
- <sup>195</sup> Telegram, Hue to DOS 107, June 3, NSFC, 197, "Vietnam 6/1/63-6/5/63," JFKL. [*NSF*, 4: 463]
- <sup>196</sup> プイ・ジン・タン「仏教徒のたたかい 1963年－1965年」ベトナムミーズ・スタディズ (編) 『南ベトナム解放戦争の十一年』新日本新書, 1967, p. 156. Telegram, Saigon to DOS 1100, June 4, 1963, *FRUS*, 3, p. 351. Hammer, *op. cit.*, p. 119.
- <sup>197</sup> Telegram, Saigon to DOS 1133, June 8, 1963, NSFC, 197, "Vietnam 6/6/63-6/15/63," JFKL. [*NSF*, 4: 490-1]
- <sup>198</sup> Telegram, Saigon to DOS 1141, June 10, 1963, *FRUS*, 3, p. 372. Telegram, Saigon to DOS 1136, June 9, 1963, *ibid.*, 3, p. 367.
- <sup>199</sup> Hilsman, *op. cit.*, p. 474.
- <sup>200</sup> Telegram, DOS to Saigon 1194, June 8, 1963, *FRUS*, 3, pp. 363-4.
- <sup>201</sup> Gibbons, *op. cit.*, 2, p. 138. Taylor, *op. cit.*, p. 289. コルビー, 前掲, p. 176. シュレジンガー, 前掲, p. 54.
- <sup>202</sup> Sorensen, *op. cit.*, p. 657. Prochnau, *op. cit.*, p. 303.
- <sup>203</sup> Theodore C. Sorensen, "Kennedy: Retrospect and Prospect," Thompson, *op. cit.*, p. 298.
- <sup>204</sup> Schlesinger, *op. cit.*, p. 997. Logevall, *op. cit.* (1999), p. 33. Smith, *op. cit.*, 2, p. 148. Kaiser, *op. cit.*, p. 196. William Rosenau, *U.S. Internal Security Assistance to South Vietnam: Insurgency, Subversion and Public Order*, London: Routledge, 2005, p. 113.
- <sup>205</sup> Timothy P. Maga, *John F. Kennedy and New Frontier Diplomacy, 1961-1963*, Malabar, Fla.: Krieger Publishing, 1994, p. 71.
- <sup>206</sup> Wheeler, OH, pp. 65-6, JFKL. Hilsman, OH, p. 20, *ibid.* Frank Snapp, "The Intelligence of the Central Intelligence Agency in Vietnam: I," Harrison E. Salisbury, ed., *Vietnam Reconsidered: Lessons from a War*, New York: Harper & Row, 1984, p. 54.
- <sup>207</sup> Bundy, Thompson, *op. cit.*, p. 253.
- <sup>208</sup> Michael R. Beschloss, *The Crisis Years: Kennedy and Khrushchev 1960-1963*, New York: Edward Burlingame Books, 1991, p. 651. Prochnau, *op. cit.*, p. 330.
- <sup>209</sup> Telegram, Saigon to DOS 1050, May 22, 1963, *FRUS*, 3, p. 314. Telegram, Saigon to DOS 1038, May 18, 1963, *ibid.*, 3, p. 312.
- <sup>210</sup> Telegram, DOS to Saigon 1171, June 3, 1963, *ibid.*, 3, p. 348.
- <sup>211</sup> Memorandum, Heavner to Hilsman, May 9, 1963, *ibid.*, 3, p. 282. Nolting, *op. cit.*, p. 94. *USVR*, 3, IV. B. 5, p. ii.
- <sup>212</sup> Letter, Janow to Phillips, May 15, 1963, *FRUS*, 3, p. 302. Telegram, DOS to Saigon 1168, June 1, 1963, *ibid.*, 3, p. 342.
- <sup>213</sup> Alexander Kendrick, *The Wound Within: America in the Vietnam Years, 1945-1974*, Boston: Little, Brown, 1974, p. 158. Rust, *op. cit.*, p. 96.

- <sup>214</sup> Telegram, DOS to Saigon 1196, June 8, 1963, *FRUS*, 3, p. 366, Letter, Trueheart to Wood, June 20, 1963, *ibid.*, 3, p. 366n. Rust, *op. cit.*, p. 102.
- <sup>215</sup> Nolting, *op. cit.*, pp. 108-9.
- <sup>216</sup> Schlesinger, *op. cit.*, p. 987. Mecklin, *op. cit.*, p. 169.
- <sup>217</sup> Telegram, Saigon to DOS 1137, June 9, 1963, *FRUS*, 3, p. 371. Telegram, Saigon to DOS 1161, June 12, 1963, *ibid.*, 3, p. 384.
- <sup>218</sup> Telegram, DOS to Saigon 1207, June 11, 1963, *FRUS*, 3, pp. 381-3.
- <sup>219</sup> Telegram, DOS to Saigon 1196, June 8, 1963, *ibid.*, 3, p. 365. Telegram, DOS to Saigon 1196, June 8, 1963, *ibid.*, 3, p. 364.
- <sup>220</sup> Telegram, Saigon to DOS 1102, June 4, 1963, *ibid.*, 3, p. 351. Telegram, DOS to Saigon 1168, June 1, 1963, *ibid.*, 3, p. 342.
- <sup>221</sup> Bundy, Thomspon, *op. cit.*, p. 254. Nolting, *op. cit.*, p. 113.
- <sup>222</sup> Telegram, DOS to Saigon 1171, June 3, 1963, *FRUS*, 3, p. 348. Telegram, DOS to Saigon 1247, June 19, 1963, *ibid.*, 3, p. 402. Telegram, White House to Saigon CAP 63357, June 29, 1963, *ibid.*, 3, p. 431n.
- <sup>223</sup> Telegram, DOS to Saigon 1159, May 29, 1963, *ibid.*, 3, p. 336. Minutes of Meeting of Special Group for Counterinsurgency, June 13, 1963, *ibid.*, 3, p. 390. Robert Scigliano, "Vietnam: Politics and Religion," *Asian Survey*, vol. 4, no. 1 (Jan. 1964), p. 670.
- <sup>224</sup> Ball, *op. cit.*, p. 53. Hilsman, *op. cit.*, p. 492.
- <sup>225</sup> Nolting, *op. cit.*, p. 114. G. Warner, *op. cit.*, p. 246. コルビー, 前掲, p. 177.
- <sup>226</sup> Hammer, *op. cit.*, p. 145. Gibbons, *op. cit.*, 2, p. 144. Nolting, *op. cit.*, p. 126.
- <sup>227</sup> Telegram, Saigon to DOS 1168, June 12, 1963, *FRUS*, 3, p. 386. Telegram, Saigon to DOS 1151, June 11, 1963, *ibid.*, 3, pp. 376-7.
- <sup>228</sup> Telegram, DOS to Saigon 1207, June 11, 1963, *ibid.*, 3, p. 381.
- <sup>229</sup> Memorandum for Record, June 14, 1963, *ibid.*, 3, pp. 386-7n.
- <sup>230</sup> Telegram, Saigon to DOS 1168, June 12, 1963, *ibid.*, 3, p. 387.
- <sup>231</sup> Telegram, Saigon to DOS 1155, June 11, 1963, *ibid.*, 3, p. 379. *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 8. Mecklin, *op. cit.*, pp. 20, 170.
- <sup>232</sup> Edwin O. Guthman & Jeffrey Shulman, eds., *Robert Kennedy In His Own Words: The Unpublished Recollections of the Kennedy Years*, New York: Bantam Books, 1988, p. 396. Telegram, COMUSMACV to CINCPAC MAC J3 5116, June 6, 1963, *DDRS*, R-83D.
- <sup>233</sup> Joint Communiqué, June 16, 1963, *AFP*, pp. 856-9.
- <sup>234</sup> Telegram, Saigon to DOS 1038, May 18, 1963, *FRUS*, 3, p. 309. Communiqué by Government of Republic of Vietnam, May 29, 1963, *AFP*, p. 856.
- <sup>235</sup> Telegram, Saigon to DOS 1038, May 18, 1963, *FRUS*, 3, p. 310. Hoang Nguyen Tran, *op. cit.*, p. 140.
- <sup>236</sup> Joiner, *op. cit.*, p. 917.
- <sup>237</sup> Hammer, *op. cit.*, p. 149. Telegram, Saigon to DOS 1191, June 15, 1963, NSFC, 197, "Vietnam, General 6/6/63-6/15/63," JFKL. [*NSFS*, 2: 697] Research Memorandum RFE-55, June 21, 1963,

*FRUS*, 3, p. 405.

<sup>238</sup> Hilsman, *op. cit.*, p. 476. Kaiser, *op. cit.*, p. 216.

<sup>239</sup> Higgins, *op. cit.*, p. 28. Mecklin, *op. cit.*, pp. 155-6. *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 6.

<sup>240</sup> Telegram, Saigon to DOS 1209, June 19, 1963, *FRUS*, 3, p. 400. Telegram, Saigon to DOS 1178, June 13, 1963, *ibid.*, 3, p. 388. Telegram, Saigon to DOS 1155, June 11, 1963, *ibid.*, 3, p. 380.

<sup>241</sup> Telegram, Saigon to DOS 1107, June 5, 1963, *ibid.*, 3, p. 357.

<sup>242</sup> *Ibid.*, 3, pp. 340-1n. Maitland, et al., *op. cit.*, p. 76. Telegram, Saigon to DOS 1100, June 4, 1963, *FRUS*, 3, p. 350.

<sup>243</sup> Telegram, Forrestal to Bundy, June 28, 1963, NSFC, 197, "Vietnam, General 6/25/63-6/30/63," JFKL. [*NSFS*, 2: 735]

<sup>244</sup> Telegram, Saigon to DOS 1224, June 22, 1963, *FRUS*, 3, p. 410. Telegram, DOS to Saigon 1286, June 28, 1963, *ibid.* 3, p. 426.

<sup>245</sup> Telegram, Saigon to DOS 1231, June 22, 1963, *FRUS*, 3, p. 411. Telegram, Saigon to DOS 1236, June 25, 1963, *ibid.*, 3, p. 413. Telegram, Saigon to DOS 33, July 5, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 7/1/63-7/20/63," JFKL. [*NSF*, 4: 605-6]

<sup>246</sup> Telegram, Saigon to DOS 6, July 1, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 7/1/63-7/20/63," JFKL. [*NSF*, 4: 588-9] SNIE 53-2-63, July 10, 1963, *USVR*, 12, p. 535.

<sup>247</sup> Telegram, Saigon to DOS 34, July 5, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 7/1/63-7/20/63," JFKL. [*NSFS*, 2: 762] CIA Information Report TDCS DB-3/655,301, June 28, 1963, *FRUS*, 3, p. 424.

<sup>248</sup> Hammer, *op. cit.*, p. 157. Telegram, Saigon to DOS 59, July 9, 1963, *FRUS*, 3, p. 480.

<sup>249</sup> *FRUS*, 3, pp. 514-5. Tran Van Don, *op. cit.*, p. 72. Hilsman, *op. cit.*, p. 480.

<sup>250</sup> Mecklin, *op. cit.*, p. 180. *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 10. *FRUS*, 3, p. 566n.

<sup>251</sup> Telegram, Saigon to DOS 204, Aug. 10, 1963, *ibid.*, 3, p. 561. Telegram, Saigon to DOS 219, Aug. 13, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 8/1/63-8/20/63," JFKL. [*NSF*, 4: 701]

<sup>252</sup> DOS Daily Staff Summary, June 17, 1963, *FRUS*, 3, p. 397n. CIA Information Report, June 21, 1963, NSFC, 197, "Vietnam, General 6/16/63-6/24/63," JFKL. [*NSFS*, 2: 710]

<sup>253</sup> Joiner, *op. cit.*, p. 919. CIA Information Report TDCS DB-3/655,301, June 28, 1963, *FRUS*, 3, p. 424.

<sup>254</sup> Telegram, Saigon to DOS 41, July 6, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 7/1/63-7/20/63," JFKL. [*NSFS*, 2: 772] Memorandum of Conversation at White House, July 4, 1963, *FRUS*, 3, p. 452.

<sup>255</sup> Hammer, *op. cit.*, p. 154. Joiner, *op. cit.*, p. 921.

<sup>256</sup> Prochnau, *op. cit.*, p. 304. シーハン, 前掲, 上, p. 395.

<sup>257</sup> Nolting, *op. cit.*, p. 114. Telegram, Saigon to DOS 1224, June 22, 1963, *FRUS*, 3, p. 409.

<sup>258</sup> Mecklin, *op. cit.*, p. 178. William M. Hammond, *Public Affairs: The Military and the Media, 1962-1968*, Washington, D.C.: Center of Military History, U.S. Army, 1990 (orig., 1988), p. 42. ハルバスタム, 前掲, p. 159.

<sup>259</sup> Telegram, Saigon to DOS 109, July 19, 1963, *FRUS*, 3, p. 516. ハルバスタム, 前掲, p. 161.

<sup>260</sup> Memorandum of Conversation in Saigon, July 18, 1963, *ibid.*, 3, p. 512. Hammond, *op. cit.*, p. 41.

- <sup>261</sup> CIA Information Report TDCS-3/552,770, July 8, 1963, *FRUS*, 3, pp. 477-8.
- <sup>262</sup> Hammer, *op. cit.*, p. 165. Higgins, *op. cit.*, p. 172. Hammond, *op. cit.*, p. 41.
- <sup>263</sup> CIA Information Report, July 18, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 7/1/63-7/20/63," JFKL. [*NSFS*, 2: 818]
- <sup>264</sup> Research Memorandum RFE-75, Aug. 21, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/21/63-8/23/63," JFKL. [*NSFS*, 3: 17]
- <sup>265</sup> CIA Information Report DB-3/655,301, June 28, 1963, *FRUS*, 3, p. 424. CIA Information Report TDCS-3/552,770, July 8, 1963, *ibid.*, 3, pp. 476-7. SNIE 53-2-63, July 10, 1963, *USVR*, 12, p. 532.
- <sup>266</sup> Research Memorandum RFE-75, Aug. 21, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/21/63-8/23/63," JFKL. [*NSFS*, 3: 18] *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 6. Maitland, et al., *op. cit.*, p. 77. Hammer, *op. cit.*, p. 149.
- <sup>267</sup> Robert J. Topmiller, *The Lotus Unleashed: The Buddhist Peace Movement in South Vietnam 1964-1966*, Lexington: Univ. Press of Kentucky, 2002, p. 2. Telegram, Saigon to DOS 95, July 17, 1963, *FRUS*, 3, p. 494.
- <sup>268</sup> Hammer, *op. cit.*, p. 150. Higgins, *op. cit.*, p. 33.
- <sup>269</sup> OCI Special Report SC No. 00598/63A, June 28, 1963, NSFC, 197, "Vietnam 6/25/63-6/30/63," JFKL. [*NSF*, 4: 579] CIA Information Report TDCS-3/552,770, July 8, 1963, *FRUS*, 3, p. 477. Nolting, *op. cit.*, pp. 114-5.
- <sup>270</sup> Telegram, DOS to Saigon 217, Aug. 19, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/1/63-8/20/63," JFKL. [*NSFS*, 2: 1030-1] Hilsman, *op. cit.*, p. 471.
- <sup>271</sup> Telegram, DOS to Saigon 160, Aug. 5, 1963, *FRUS*, 3, p. 553. Joiner, *op. cit.*, p. 922.
- <sup>272</sup> Telegram, USARMA Saigon to ACSI DA 211202Z, Aug. 21, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/21/63-8/23/63," JFKL. [*NSFS*, 3: 27] CIA Information Report, Aug. 22, 1963, *ibid.* [*NSFS*, 3: 32]
- <sup>273</sup> アメリカ研究所 (編訳) 『世紀の大論戦』 三一書房, 1966, p. 381. Mecklin, *op. cit.*, p. 175.
- <sup>274</sup> Kendrick, *op. cit.*, p. 158. Halberstam, *op. cit.*, p. 261. Hammer, *op. cit.*, p. 159.
- <sup>275</sup> ハルバスタム, 前掲, p. 150. Halberstam, *op. cit.*, p. 262.
- <sup>276</sup> Telegram, Saigon to DOS 85, July 15, 1963, *FRUS*, 3, p. 487. Telegram, Saigon to DOS 134, July 24, 1963, *ibid.*, 3, p. 528.
- <sup>277</sup> CIA Information Report TDCS DB-3/655,301, June 28, 1963, *ibid.*, 3, p. 425. Memorandum, Forrestal to President, July 3, 1963, *ibid.*, 3, p. 448.
- <sup>278</sup> Telegram, Manila to DOS 46, July 10, 1963, *ibid.*, 3, pp. 482-3. Letter, Bowles to Bundy, July 19, 1963, *ibid.*, 3, p. 519. Report, Manning to President, n.d. [July 1963], *ibid.*, 3, p. 538. Memorandum, Kattenburg to Hilsman, July 24, 1963, *ibid.*, 3, p. 527.
- <sup>279</sup> Telegram, DOS to Saigon 112, July 23, 1963, *ibid.*, 3, p. 524. Dean Rusk (ed., Daniel S. Papp), *As I Saw It: As Told to Richard Rusk*, New York: W. W. Norton, 1990, p. 436.
- <sup>280</sup> Telegram, DOS to Saigon 1247, June 19, 1963, *FRUS*, 3, p. 403. Telegram, DOS to Saigon 4, July 1, 1963, *ibid.*, 3, p. 434.
- <sup>281</sup> SNIE 53-2-63, July 10, 1963, *USVR*, 12, p. 533.
- <sup>282</sup> Memorandum, Forrestal to President, Aug. 9, 1963, *FRUS*, 3, p. 560. Telegram, Saigon to

DOS 18, July 3, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 7/1/63-7/20/63," JFKL. [NSFS, 2: 745]

<sup>283</sup> Anne E. Blair, *Lodge in Vietnam: A Portrait Abroad*, New Haven, Conn.: Yale Univ. Press, 1995, p. 22. Telegram, Saigon to DOS 204, Aug. 10, 1963, *FRUS*, 3, p. 561. Telegram, Saigon to DOS 189, Aug. 7, 1963, *ibid.*, 3, p. 557. Telegram, Saigon to DOS 219, Aug. 13, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 8/1/63-8/20/63," JFKL. [NSF, 4: 703]

<sup>284</sup> Telegram, Saigon to DOS 1209, June 19, 1963, *FRUS*, 3, pp. 400-1. Telegram, Saigon to DOS 1231, June 22, 1963, *ibid.*, 3, p. 412.

<sup>285</sup> Telegram, Saigon to DOS 1236, June 25, 1963, *ibid.*, 3, p. 413. Telegram, DOS to Saigon 1247, June 19, 1963, *ibid.*, 3, p. 403. Telegram, DOS to Saigon 1271, June 26, 1963, *ibid.*, 3, p. 415.

<sup>286</sup> Telegram, DOS to Saigon 10, July 2, 1963, *ibid.*, 3, p. 444. Telegram, Saigon to DOS 10, July 2, 1963, *ibid.*, 3, pp. 442-3.

<sup>287</sup> Telegram, DOS to Saigon 4, July 1, 1963, *ibid.*, 3, p. 434.

<sup>288</sup> Memorandum of Conversation at DOS, July 5, 1963, *ibid.*, 3, p. 466. Nolting, *op. cit.*, p. 114. Mecklin, *op. cit.*, p. 168.

<sup>289</sup> Telegram, DOS to Saigon 1271, June 26, 1963, *FRUS*, 3, p. 415. Telegram, Saigon to DOS 1231, June 22, 1963, *ibid.*, 3, pp. 411-2. Telegram, Saigon to DOS 1246, June 28, 1963, *ibid.*, 3, pp. 427-8. Telegram, Saigon to DOS 24, July 3, 1963, *ibid.*, 3, p. 445.

<sup>290</sup> Telegram, Saigon to DOS 219, Aug. 13, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 8/1/63-8/20/63," JFKL. [NSF, 4: 703] Message, Kennedy to Sihanouk, June 20, 1963, *FRUS*, 3, p. 404. Telegram, DOS to Saigon 4, July 1, 1963, *ibid.*, 3, p. 434.

<sup>291</sup> Telegram, Saigon to DOS 24, July 3, 1963, *ibid.*, 3, p. 445. Telegram, Saigon to DOS 1246, June 28, 1963, *ibid.*, 3, pp. 427-8.

<sup>292</sup> CIA Information Report TDCS DB-3/655,301, June 28, 1963, *ibid.*, 3, p. 423. Telegram, Saigon to DOS 1236, June 25, 1963, *ibid.*, 3, p. 413.

<sup>293</sup> Higgins, *op. cit.*, pp. 167-8, 173-4, 182.

<sup>294</sup> SNIE 53-2-63, July 10, 1963, *USVR*, 12, p. 534. Telegram, DOS to Saigon 10, July 2, 1963, *FRUS*, 3, p. 444.

<sup>295</sup> Telegram, Saigon to DOS 10, July 2, 1963, *ibid.*, 3, p. 442. Telegram, Saigon to DOS 26, July 4, 1963, *ibid.*, 3, p. 449.

<sup>296</sup> SNIE 53-2-63, July 10, 1963, *USVR*, 12, p. 533. Prochnau, *op. cit.*, pp. 344-5.

<sup>297</sup> Schlesinger, *op. cit.*, p. 987. コルビー, 前掲, p. 177.

<sup>298</sup> Nolting, *op. cit.*, p. 142. Hilsman, *op. cit.*, p. 475. Taylor, *op. cit.*, p. 294. Telegram, DOS to Saigon 1271, June 26, 1963, *FRUS*, 3, p. 415. Telegram, DOS to White House-Salinger Dublin, June 27, 1963, NSFC, 197, "Vietnam 6/25/63-6/30/63," JFKL. [NSF, 4: 567]

<sup>299</sup> Annex to Memorandum, Hilsman & Forrestal to President, Jan. 25, 1963, *FRUS*, 3, p. 60. Geoffrey Warner, "The United States and Vietnam: From Kennedy to Johnson," *International Affairs*, vol. 73, no. 2 (April 1997), p. 336.

<sup>300</sup> Blair, *op. cit.*, p. 12. Memorandum, Bowles to President, March 7, 1963, *FRUS*, 3, p. 140. コルビー, 前掲, p. 177.

<sup>301</sup> Hilsman in Charlton & Moncrieff, *op. cit.*, p. 87. Harriman, OH, p. 105, JFKL.

<sup>302</sup> Giglio, *op. cit.*, p. 242. Tucker, *op. cit.*, p. 504. Donald C. Lord, *John F. Kennedy: The Politics*

of *Confrontation and Conciliation*, Woodbury, N.Y.: Barron's, 1977, p. 227. Stanley Karnow, *Vietnam: A History*, New York: Penguin Books, 1984 (orig., Viking Press, 1983), p. 263.

<sup>303</sup> Gilpatric, OH, pp. 18, 31, JFKL. Memorandum of Conversation at White House, July 4, 1963, *FRUS*, 3, p. 453.

<sup>304</sup> Halberstam, *op. cit.*, p. 209. Schlesinger, *op. cit.*, p. 987. Blair, *op. cit.*, p. 26. Kattenburg, *op. cit.*, p. 117.

<sup>305</sup> Phillips, Santoli, *op. cit.*, p. 86. Schlesinger, *op. cit.*, p. 988. Hilsman, *op. cit.*, p. 478. Blair, *op. cit.*, pp. 12-3. Halberstam, *op. cit.*, p. 260. Hammer, *op. cit.*, p. 169.

<sup>306</sup> Cooper, *op. cit.*, p. 211n. Sullivan in Gerald S. & Deborah H. Strober, "*Let Us Begin Anew*": *An Oral History of the Kennedy Presidency*, New York: Harper Perennial, 1994 (orig., Harper Collins, 1993), p. 427. Memorandum, Mansfield to President, Aug. 19, 1963, *FRUS*, 3, p. 585.

<sup>307</sup> Schlesinger, *op. cit.*, pp. 988-9.

<sup>308</sup> Herbert S. Parmet, *JFK: The Presidency of John F. Kennedy*, New York: Dial Press, 1983, p. 330. Sullivan in Strober, *op. cit.*, p. 427. コルビー, 前掲, p. 177.

<sup>309</sup> Mecklin, *op. cit.*, p. 221. O'Donnell & Powers, *op. cit.*, p. 16. Schlesinger, *op. cit.*, p. 989. R. Kennedy in Guthman & Shulman, *op. cit.*, p. 401.

<sup>310</sup> Blair, *op. cit.*, p. 10. Higgins, *op. cit.*, p. 204.

<sup>311</sup> Blair, *op. cit.*, pp. 4, 85-6. Winters, *op. cit.*, p. 166. Matthews, *op. cit.*, p. 242. George H. Gallup, *The Gallup Poll: Public Opinion 1935-1971*, New York: Random House, 1972, vol. 3, pp. 1854-5.

<sup>312</sup> Smith, *op. cit.*, 2, p. 155. Hammer, *op. cit.*, p. 171. Winters, *op. cit.*, p. 53.

<sup>313</sup> Mecklin, *op. cit.*, pp. 228, 288. Hatcher, *op. cit.*, p. 142. Smith, *op. cit.*, 2, p. 155. Gilpatric, OH, p. 32, JFKL.

<sup>314</sup> Lodge, OH, pp. 5-6, *ibid.* Letter, Bowles to Bundy, July 19, 1963, *FRUS*, 3, p. 519.

<sup>315</sup> Nolting, *op. cit.*, pp. 111-2.

<sup>316</sup> Telegram, DOS to Saigon 1250, June 20, 1963, *FRUS*, 3, p. 414n. Telegram, Saigon to DOS 1230, June 22, 1963, *ibid.*, 3, p. 414n. Telegram, Saigon to DOS 1236, June 25, 1963, *ibid.*, 3, p. 414. CIA Information Report, July 17, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 7/1/63-7/20/63," JFKL. [NSF, 4: 644-5]

<sup>317</sup> Telegram, DOS to Saigon 1271, June 26, 1963, *FRUS*, 3, p. 415.

<sup>318</sup> Nolting, *op. cit.*, pp. xiv, 117. Frederick Nolting, "Kennedy, NATO and Southeast Asia," Thompson, *op. cit.*, p. 232.

<sup>319</sup> Thomas Borstelmann, *The Cold War and the Color Line: American Race Relations in the Global Arena*, Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 2001, pp. 76, 102, 123.

<sup>320</sup> Higgins, *op. cit.*, p. 205. Schlesinger, *op. cit.*, p. 988. Lord, *op. cit.*, p. 227. Hammer, *op. cit.*, p. 170.

<sup>321</sup> Maier, *op. cit.*, p. 390. Harkins, OH, p. 49, MHI.

<sup>322</sup> McNamara, *op. cit.*, p. 106. Blair, *op. cit.*, p. 18. Hilsman, *op. cit.*, p. 515. Nolting, *op. cit.*, p. 128.

<sup>323</sup> McNamara, et al., *op. cit.*, p. 106. Taylor, *op. cit.*, p. 296. Halberstam, *op. cit.*, p. 283. Gilpatric, OH, p. 32, JFKL. Schlesinger, *op. cit.*, p. 995.

<sup>324</sup> R. Kennedy in Guthman & Shulman, *op. cit.*, p. 17, 402-3.

- <sup>325</sup> ハルバスタム, 前掲, p. 195. Higgins, *op. cit.*, p. 206.
- <sup>326</sup> McNamara, *op. cit.*, p. 70. Colby, *op. cit.*, p. 146.
- <sup>327</sup> Schlesinger, *op. cit.*, p. 989.
- <sup>328</sup> Telegram, Saigon to DOS 26, July 4, 1963, *FRUS*, 3, p. 449. Memorandum, Forrestal to President, July 9, 1963, *ibid.*, 3, pp. 481-2. Nolting, *op. cit.*, p. 113.
- <sup>329</sup> Telegram, Saigon to DOS 161, Aug. 1, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/1/63-8/20/63," JFKL [*NSFS*, 2: 968]. Nolting, *op. cit.*, p. 117.
- <sup>330</sup> Hilsman, *op. cit.*, p. 480. Memorandum of Telephone Conversation, Harriman & Hilsman, Aug. 1, 1963, *FRUS*, 3, p. 550.
- <sup>331</sup> Telegram, Saigon to DOS 85, July 15, 1963, *FRUS*, 3, p. 487. Memorandum of Conversation at DOS, Aug. 31, 1963, *ibid.*, 4, p. 73. Higgins, *op. cit.*, p. 56.
- <sup>332</sup> Telegram, Saigon to DOS 85, July 15, 1963, *ibid.*, 3, pp. 487-8. Telegram, Saigon to DOS 117, July 20, 1963, *ibid.*, 3, p. 522. Nolting, *op. cit.*, p. 119.
- <sup>333</sup> Memorandum of Conversation in Saigon, July 18, 1963, *FRUS*, 3, p. 512. Memorandum of Conversation in Saigon, July 17, 1963, *ibid.*, 3, p. 508.
- <sup>334</sup> Telegram, Saigon to DOS 117, July 20, 1963, *ibid.*, 3, p. 522. Telegram, DOS to Saigon 103, July 19, 1963, *ibid.*, 3, p. 517. Telegram, Saigon to DOS 161, Aug. 1, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/1/63-8/20/63," JFKL [*NSFS*, 2: 968] Telegram, Saigon to DOS 208, Aug. 12, 1963, *FRUS*, 3, p. 563.
- <sup>335</sup> Telegram, DOS to Saigon 193, Aug. 13, 1963, *ibid.*, 3, p. 565. Rusk's News Conference, Aug. 16, 1963, *DSB*, Sept. 2, 1963, p. 359.
- <sup>336</sup> Telegram, Saigon to DOS 220, Aug. 13, 1963, *FRUS*, 3, p. 564n. Nolting, *op. cit.*, pp. 119-20.
- <sup>337</sup> Telegram, Saigon to DOS 208, Aug. 12, 1963, *FRUS*, 3, p. 562. Memorandum, Mansfield to President, Aug. 19, 1963, *ibid.*, 3, p. 585.
- <sup>338</sup> Mecklin, *op. cit.*, p. 179. Halberstam, *op. cit.*, pp. 260-1.
- <sup>339</sup> Nolting, *op. cit.*, p. 119. Shaw, *op. cit.*, p. 453.
- <sup>340</sup> Colby, *op. cit.*, p. 133. OCI Memorandum 2341/63, Aug. 21, 1963, *FRUS*, 3, p. 602.
- <sup>341</sup> Research Memorandum RFE-75, Aug. 21, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/21/63-8/23/63," JFKL [*NSFS*, 3: 20] Telegram, Saigon to DOS 297, Aug. 21, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 8/21/63-8/23/63," JFKL [*NSF*, 4: 795]
- <sup>342</sup> Telegram, Saigon to DOS 273, Aug. 21, 1963, *ibid.* [*NSF*, 4: 757] Telegram, Saigon to DOS 282, Aug. 21, 1963, *ibid.* [*NSF*, 4: 782]
- <sup>343</sup> Telegram, Saigon to DOS 280, Aug. 21, 1963, *ibid.* [*NSF*, 4: 778-9] Telegram, Saigon to DOS 281, Aug. 21, 1963, *ibid.* [*NSF*, 4: 780-1] DOS Daily Staff Summary, Aug. 21, 1963, *FRUS*, 3, p. 598. Telegram, USARMA Saigon to ACSI DA 211205Z, Aug. 21, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/21/63-8/23/63," JFKL [*NSFS*, 3: 27-8]
- <sup>344</sup> Telegram, COMUSMACV to DOS MAC J00 6835, Aug. 21, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 8/21/63-8/23/63," JFKL [*NSF*, 4: 760] Telegram, Harkins to Taylor MAC 1495, Aug. 22, 1963, *FRUS*, 3, p. 608.
- <sup>345</sup> *USVR*, 3, IV. B. 5, pp. iii, 12. Telegram, CINCPAC to DOS DTG210035Z, Aug. 21, 1963, *DDRS*, 1975-267C.

- <sup>346</sup> Higgins, *op. cit.*, p. 189. Telegram, Saigon to DOS 455, Sept. 9, 1963, *FRUS*, 4, p. 142.
- <sup>347</sup> Telegram, Saigon to DOS 331, Aug. 25, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 8/24/63-8/31/63, State Cables" JFKL. [*NSF*, 4: 903-4] Telegram, Saigon to DOS 340, Aug. 26, 1963, *FRUS*, 3, p. 645. Telegram, Saigon to DOS 346, Aug. 27, 1963, *ibid.*, 3, p. 653.
- <sup>348</sup> Telegram, Saigon to DOS 313, Aug. 23, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 8/21/63-8/23/63," JFKL. [*NSF*, 4: 826] Telegram, Saigon to DOS 371, Aug. 29, 1963, *FRUS*, 4, p. 19. Post, *op. cit.*, 4, pp. 198-9.
- <sup>349</sup> Telegram, Saigon to DOS 313, Aug. 23, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 8/21/63-8/23/63," JFKL. [*NSF*, 4: 825] Prochnau, *op. cit.*, p. 320. Higgins, *op. cit.*, p. 181. Hilsman, *op. cit.*, p. 472.
- <sup>350</sup> Telegram, CINCPAC to DOS DTG210535Z, Aug. 21, 1963, *DDRS*, R-83F. Telegram, Saigon to DOS 283, Aug. 21, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 8/21/63-8/23/63," JFKL. [*NSF*, 4: 785] Telegram, Saigon to DOS 292, Aug. 21, 1963, *ibid.* [*NSF*, 4: 793] Perlo & Goshal, *op. cit.*, p. 31. Tran Van Don, *op. cit.*, p. 89.
- <sup>351</sup> Research Memorandum RFE-75, Aug. 21, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/21/63-8/23/63," JFKL. [*NSFS*, 3: 20] Perlo & Goshal, *op. cit.*, p. 32.
- <sup>352</sup> Memorandum of Meeting at White House, Sept. 11, 1963, *FRUS*, 4, p. 187. Memorandum of Meeting at White House, Sept. 12, 1963, *ibid.*, 4, p. 199. Telegram, Harkins to Krulak MAC 1675, Sept. 12, 1963, *ibid.*, 4, p. 194.
- <sup>353</sup> OCI Memorandum 2342/63, Aug. 23, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/21/63-8/23/63," JFKL. [*NSFS*, 3: 66] Telegram, COMUSMACV to DOS MAC 00 6835, Aug. 21, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 8/21/63-8/23/63," JFKL. [*NSF*, 4: 760] Telegram, Saigon to DOS 376, Aug. 29, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 8/24/63-8/31/63, State Cables" JFKL. [*NSF*, 5: 38]
- <sup>354</sup> Telegram, Saigon to DOS 291, Aug. 21, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 8/21/63-8/23/63," JFKL. [*NSF*, 4: 791]
- <sup>355</sup> Research Memorandum RFE-75, Aug. 21, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/21/63-8/23/63," JFKL. [*NSFS*, 3:20] CIA Information Report TDCS DB-3/657,133, Oct. 8, 1963, NSFC, 200, "Vietnam, Vol. XIX, 6-14 October 1963, CIA Cables," JFKL. [*NSF*, 5: 855] Telegram, Saigon to DOS 371, Aug. 21, 1963, *FRUS*, 4, p. 18. McNamara, *op. cit.*, p. 74.
- <sup>356</sup> Mecklin, *op. cit.*, p. 181. President's Intelligence Checklist, Aug. 21, 1963, *FRUS*, 3, p. 597.
- <sup>357</sup> Telegram, DOS to Saigon 239, Aug. 23, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/21/63-8/23/63," JFKL. [*NSFS*, 3: 51] OCI Memorandum 2342/63, Aug. 23, 1963, *ibid.* [*NSFS*, 3: 66].
- <sup>358</sup> Research Memorandum RFE-75, Aug. 21, 1963, *ibid.* [*NSFS*, 3: 20]. Telegram, CIA Saigon to CIA IN 16397, Sept. 10, 1963, *FRUS*, 4, p. 147. Field, *op. cit.*, p. 317.
- <sup>359</sup> Tran Van Don, *op. cit.*, p. 90. Mecklin, *op. cit.*, p. 197. Telegram, Saigon to DOS 371, Aug. 28, 1963, *FRUS*, 4, p. 19.
- <sup>360</sup> Taylor, *op. cit.*, p. 291. Telegram, Saigon to DOS 326, Aug. 24, 1963, NSFC, 198, "8/24/63-8/31/63, State Cables," JFKL. [*NSF*, 4: 888]
- <sup>361</sup> Tran Van Don, *op. cit.*, p. 72. Maitland, et al., *op. cit.*, p. 81. Lodge, OH, p. 8, JFKL.
- <sup>362</sup> CIA Information Report, Aug. 23, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/21/63-8/23/63," JFKL. [*NSFS*, 3: 61] Telegram, CIA Saigon to CIA, Aug. 24, 1963, *FRUS*, 3, p. 616. Telegram, Saigon to DOS 299, Aug. 21, 1963, *ibid.*, 3, p. 596.
- <sup>363</sup> Telegram, Saigon to DOS 334, Aug. 26, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 8/21/63-8/23/63, State Cables" JFKL. [*NSF*, 5: 2]. *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 12.

- <sup>364</sup> Telegram, CINCPAC to DOS DTG210535Z, Aug. 21, 1963, *DDRS*, R-83F. Memorandum, Carroll to McNamara S-18,548/P-3, Aug. 21, 1963, *FRUS*, 3, p. 600.
- <sup>365</sup> Telegram, Saigon to DOS 299, Aug. 21, 1963, *ibid.*, 3, p. 596. Telegram, Harkins to Taylor MAC 1495, Aug. 22, 1963, *ibid.*, 3, p. 609.
- <sup>366</sup> Telegram, Saigon to DOS 292, Aug. 21, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 8/21/63-8/23/63," JFKL. [*NSF*, 4: 793] Telegram, Saigon to DOS 299, Aug. 21, 1963, *FRUS*, 3, p. 596.
- <sup>367</sup> Telegram, COMUSMACV to JCS 2329, Aug. 31, 1963, *DDRS*, R-261E.
- <sup>368</sup> CIA Information Report TDCS 3/557,308, Aug. 24, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, 8/24/63-8/31/63, TDCS's," JFKL. [*NSF*, 5: 99] Telegram, CINCPAC to JCS 230154Z, Aug. 23, 1963, *DDRS*, R-84A. Memorandum, Carroll to McNamara S-18,548/P-3, Aug. 21, 1963, *FRUS*, 3, p. 600.
- <sup>369</sup> Research Memorandum RFE-75, Aug. 21, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/21/63-8/23/63," JFKL. [*NSFS*, 3: 17, 21]
- <sup>370</sup> Telegram, CIA Saigon to CIA 0698, Sept. 6, 1963, *FRUS*, 4, p. 126. CIA Information Report, Aug. 23, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, Genral 8/21/63-8/23/63," JFKL. [*NSFS*, 3: 62]
- <sup>371</sup> Telegram, DOS to Saigon 160, Aug. 5, 1963, *FRUS*, 3, p. 553. Joiner, *op. cit.*, p. 922.
- <sup>372</sup> Telegram, Saigon to DOS 316, Aug. 24, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/24/63-8/31/63, State Cables," JFKL. [*NSFS*, 3: 69] Shaplen, *op. cit.*, p. 195.
- <sup>373</sup> *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 12. ハルバスタム, 前掲, p. 175.
- <sup>374</sup> Telegram, DOS to All Diplomatic and Consular Posts, USUN Circular 382, Aug. 27, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/24/63-8/31/63, State Cables," JFKL. [*NSFS*, 3: 105]
- <sup>375</sup> Telegram, DOS to Saigon 244, Aug. 24, 1963, *FRUS*, 3, p. 629n. Memorandum, Forrestal to President, Aug. 24, 1963, *ibid.*, 3, p. 625.
- <sup>376</sup> Telegram, DOS to All Diplomatic Posts, USUN Circular 366, Aug. 25, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/24/63-8/31/63, State Cables," JFKL. [*NSFS*, 3: 82-3] Telegram, DOS to All Diplomatic and Consular Posts, USUN Circular 382, Aug. 27, 1963, *ibid.* [*NSFS*, 3: 105]
- <sup>377</sup> Hilsman, *op. cit.*, p. 484. Shaplen, *op. cit.*, p. 190. Telegram, CIA Saigon to CIA 0265, Aug. 24, 1963, *FRUS*, 3, pp. 616-7. Prochnau, *op. cit.*, p. 368.
- <sup>378</sup> CIA Information Report, Aug. 23, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/21/63-8/23/63," JFKL. [*NSFS*, 3: 60] Telegram, CIA Saigon to CIA 0265, Aug. 24, 1963, *FRUS*, 3, p. 619. Logevall, *op. cit.* (2001), p. 54.
- <sup>379</sup> *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 12. Joes, *op. cit.*, p. 71. Wesley R. Fishel, "Three Brief Articles," Fishel, *op. cit.*, p. 227.
- <sup>380</sup> Telegram, Saigon to DOS 324, Aug. 24, 1963, *FRUS*, 3, p. 612. Telegram, Saigon to DOS 320, Aug. 24, 1963, *ibid.*, 3, p. 613. Telegram, CIA Saigon to CIA 0265, Aug. 24, 1963, *ibid.*, 3, p. 617.
- <sup>381</sup> Statement by Brig. Gen. Dinh at News Conference, Aug. 29, 1963, *AFP*, p. 868. Telegram, Saigon to DOS 376, Aug. 29, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 8/24/63-8/31/63, State Cables," JFKL. [*NSF*, 5: 38] *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 53.
- <sup>382</sup> Telegram, CINCPAC to DOS DTG 210035Z, Aug. 21, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 8/21/63-8/23/63," JFKL. [*NSF*, 4: 762] Telegram, CIA Saigon to CIA IN 16397, Sept. 10, 1963, *FRUS*, 4, p. 147.
- <sup>383</sup> Smith, *op. cit.*, 2, p. 160. Telegram, Saigon to DOS 324, Aug. 24, 1963, *FRUS*, 3, p. 612.

Telegram, Saigon to DOS 320, Aug. 24, 1963, *ibid.*, 3, p. 613. Tran Van Don, *op. cit.*, p. 91.

<sup>384</sup> Higgins, *op. cit.*, pp. 190, 192.

<sup>385</sup> Tran Van Don, *op. cit.*, p. 91. Telegram, Saigon to DOS 320, Aug. 24, 1963, *FRUS*, 3, p. 613. Hilsman, *op. cit.*, p. 485.

<sup>386</sup> Letter, Vu Van Thai to Harriman, Aug. 24, 1963, *FRUS*, 4, p. 115.

<sup>387</sup> Telegram, Saigon to DOS 331, Aug. 25, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 8/24/63-8/31/63, State Cables," JFKL. [*NSF*, 4: 905] Telegram, Saigon to DOS 337, Aug. 26, 1963, *ibid.* [*NSFS*, 3: 84]. シーハン, 前掲, 上, pp. 422-3.

<sup>388</sup> Telegram, Saigon to DOS 326, Aug. 24, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 8/24/63-8/31/63, State Cables," JFKL. [*NSF*, 4: 888] ハルバスタム, 前掲, p. 194.

<sup>389</sup> Mecklin, *op. cit.*, p. 191. Hammer, *op. cit.*, p. 171.

<sup>390</sup> Perlo & Goshal, *op. cit.*, p. 32. Higgins, *op. cit.*, p. 66.

<sup>391</sup> CIA Information Report, Aug. 23, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/21/63-8/23/63," JFKL. [*NSFS*, 3: 58] Telegram, Saigon to DOS 364, Aug. 28, 1963, *FRUS*, 3, p. 670.

<sup>392</sup> Telegram, Saigon to DOS 289, Aug. 21, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/21/63-8/23/63," JFKL. [*NSFS*, 3: 8]

<sup>393</sup> Cooper, *op. cit.*, p. 211. Telegram, Saigon to DOS 316, Aug. 24, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/24/63-8/31/63 State, Cables," JFKL [*NSFS*, 3: 70]. Telegram, Saigon to DOS 447, Sept. 9, 1963, *FRUS*, 4, p. 139.

<sup>394</sup> Telegram, Harkins to Taylor MAC 1495, Aug. 22, 1963, *ibid.*, 3, p. 607.

<sup>395</sup> Telegram, DOS to Saigon 248, Aug. 26, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 8/24/63-8/31/63, State Cables," JFKL. [*NSF*, 5: 11] Telegram, DOS to All Diplomatic and Consular Posts, USUN Circular 382, Aug. 27, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/24/63-8/31/63, State Cables," JFKL. [*NSFS*, 3: 105]

<sup>396</sup> R. Kennedy in Guthman & Shulman, *op. cit.*, p. 398. President's Intelligence Checklist, Aug. 24, 1963, *FRUS*, 3, p. 626.

<sup>397</sup> ハルバスタム, 前掲, p. 183. Mecklin, *op. cit.*, p. 199.

<sup>398</sup> Telegram, Saigon to DOS 270, Aug. 21, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 8/21/63-8/23/63," JFKL. [*NSF*, 4: 755] Telegram, DOS to Saigon 249, Aug. 26, 1963, *FRUS*, 3, p. 646.

<sup>399</sup> Telegram, Saigon to DOS 347, Aug. 27, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/24/63-8/31/63, State Cables," JFKL. [*NSFS*, 3: 97-8] Telegram, JCS to DOS 281909Z, Aug. 28, 1963, *DDRS*, R-261C.

<sup>400</sup> Telegram, CIA Saigon to CIA 0265, Aug. 24, 1963, *FRUS*, 3, p. 616.

<sup>401</sup> Telegram, SSO DIA to White House, Aug. 23, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/21/63-8/23/63," JFKL. [*NSFS*, 3: 55]

<sup>402</sup> トー・ミン・チュン「学生・生徒のたたかい」ベトナムீーズ・スタディズ, 前掲, p. 138. Mecklin, *op. cit.*, p. 197. *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 17. *The 30-Year War: 1945-1975*, Hanoi: Thế Giới Publishers, 2001, vol. 2, p. 104.

<sup>403</sup> Telegram, CIA Saigon to Forrestal IN 13692, Sept. 6, 1963, NSFC, 199, "Vietnam, 9/1/63-9/10/63, Memos and Misc.," JFKL. [*NSF*, 5: 167]

- <sup>404</sup> Telegram, Saigon to DOS 333, Aug. 25, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 8/24/63-8/31/63, State Cables," JFKL. [*NSF*, 4: 908] Telegram, Saigon to DOS 349, Aug. 27, 1963, *ibid.* [*NSF*, 5: 13]
- <sup>405</sup> Memorandum of Conference at White House, Aug. 27, 1963, *FRUS*, 3, p. 660.
- <sup>406</sup> Telegram, CIA Saigon to Forrestal IN 13692, Sept. 6, 1963, NSFC, 199, "Vietnam, 9/1/63-9/10/63, Memos and Misc.," JFKL. [*NSF*, 5: 165] Telegram, Phnom Penh to DOS 201, Sept. 11, 1963, NSFC, 199, "Vietnam, 9/11/63-9/17/63, State Cables," JFKL. [*NSF*, 5: 332]. Memorandum, Hughes to Rusk, Sept. 15, 1963, *FRUS*, 4, p. 213.
- <sup>407</sup> *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 29.
- <sup>408</sup> Winters, *op. cit.*, p. 86. CIA Information Report TDCS DB-3/657,133, Oct. 8, 1963, NSFC, 200, "Vietnam, Vol. XIX, 6-14 October 1963, CIA Cables," JFKL. [*NSF*, 5: 854] Mecklin, *op. cit.*, p. 237.
- <sup>409</sup> OCI Memorandum 2370/63, Oct. 19, 1963, NSFC, 200, "Vietnam, 10/15/63-10/28/63, Memos and Misc.," JFKL. [*NSF*, 5: 881-2]
- <sup>410</sup> CIA Information Report TDCS DB-3/657,133, Oct. 8, 1963, NSFC, 200, "Vietnam, Vol. XIX, 6-14 October 1963, CIA Cables," JFKL. [*NSF*, 5: 853-4] Brown, *op. cit.*, p. 207.
- <sup>411</sup> *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 37. Mecklin, *op. cit.*, p. 197. Halberstam, *op. cit.*, p. 288.
- <sup>412</sup> Telegram, Saigon to DOS 632, Oct. 4, 1963, NSFC, 200, "Vietnam, 9/22/63-10/5/63, State Cables," JFKL. [*NSF*, 5: 677]
- <sup>413</sup> McNamara, *op. cit.*, p. 74. Hammond, *op. cit.*, p. 61.
- <sup>414</sup> Hilsman, *op. cit.*, p. 508. Memorandum, McNamara & Taylor to President, Oct. 2, 1963, NSFC, 200, "Vietnam: 9/22/63-10/5/63, McNamara-Taylor Report," JFKL. [*NSF*, 5: 755]
- <sup>415</sup> CIA Special Report SC 00611/63C, Sept. 27, 1963, NSFC, 200, "Vietnam, 9/22/63-10/5/63, Memos and Misc.," JFKL. [*NSF*, 5: 585]
- <sup>416</sup> Mecklin, *op. cit.*, pp. 241-2. OCI Memorandum 2370/63, Oct. 19, 1963, NSFC, 200, "Vietnam, 10/15/63-10/28/63, Memos and Misc.," JFKL. [*NSF*, 5: 885]
- <sup>417</sup> Mecklin, *op. cit.*, p. 241. 友田錫 『裏切られたベトナム革命——チュン・ニュー・タンの証言』中央公論社, 1981, p. 75.
- <sup>418</sup> Taylor, *op. cit.*, p. 296. *USVR*, 3, IV. B. 4, p. 18.
- <sup>419</sup> Memorandum, McNamara & Taylor to President, Oct. 2, 1963, NSFC, 200, "Vietnam: 9/22/63-10/5/63, McNamara-Taylor Report," JFKL. [*NSF*, 5: 756-7]
- <sup>420</sup> Report, "South Vietnam: An Action Plan," Sept. 16, 1963, NSFC, 200, "Vietnam: Action Plans, 9/16/63-9/21/63," JFKL. [*NSF*, 5: 382]
- <sup>421</sup> Telegram, Saigon to DOS 299, Aug. 21, 1963, *FRUS*, 3, p. 596. Mecklin, *op. cit.*, p. 196.
- <sup>422</sup> Higgins, *op. cit.*, p. 183. Telegram, Saigon to DOS 346, Aug. 27, 1963, *FRUS*, 3, p. 652.
- <sup>423</sup> シーハン, 前掲, 上, p. 423. ハルバスタム, 前掲, p. 177.
- <sup>424</sup> Halberstam, *op. cit.*, p. 261. Peter Stanley Usowski, *John F. Kennedy and the Central Intelligence Agency: Policy and Intelligence*, Ph.D. dissertation, George Washington Univ., 1987, p. 399. *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 7.
- <sup>425</sup> Mecklin, *op. cit.*, p. 181. *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 13.
- <sup>426</sup> Cooper, *op. cit.*, p. 211. Taylor, *op. cit.*, p. 291.

- <sup>427</sup> President's Intelligence Checklist, Aug. 24, 1963, *FRUS*, 3, p. 626. Memorandum by Krulak, Aug. 21, 1963, *ibid.*, 3, p. 602. Brogan, *op. cit.*, p. 193.
- <sup>428</sup> Memorandum of Conference at White House, Aug. 27, 1963, *FRUS*, 3, p. 662. Nolting, *op. cit.*, p. 121. Mecklin, *op. cit.*, pp. 181, 186.
- <sup>429</sup> Colby, *op. cit.*, p. 134. Nolting, *op. cit.*, p. 116. Telegram, Saigon to DOS 949, Nov. 6, 1963, *FRUS*, 4, p. 576.
- <sup>430</sup> *USVR*, 3, IV. B. 5, pp. iii, 12. Lodge, OH, p. 32, JFKL.
- <sup>431</sup> DOS Statement, Aug. 21, 1963, *DSB*, Sept. 9, 1963, p. 398. Telegram, DOS to Saigon 225, Aug. 21, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/21/63-8/23/63," JFKL. [*NSFS*, 3: 3]
- <sup>432</sup> Address by Heavner, Aug. 25, 1963, *DSB*, Sept. 9, 1963, p. 395. Address by Manning, Aug. 27, 1963, *ibid.*, Sept. 23, 1963, p. 458.
- <sup>433</sup> Hammer, *op. cit.*, p. 207. Telegram, Saigon to DOS 362, Aug. 28, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 8/24/63-8/31/63, State Cables," JFKL. [*NSF*, 5: 25] Telegram, Saigon to DOS 622, Oct. 2, 1963, NSFC, 200, "Vietnam, 9/22/63-10/5/63, State Cables," JFKL. [*NSF*, 5: 675]
- <sup>434</sup> VOA Broadcast in Saigon, Aug. 26, 1963, *FRUS*, 3, p. 636.
- <sup>435</sup> Higgins, *op. cit.*, p. 189. Bouscaren, *op. cit.*, p. 134. Rust, *op. cit.*, p. 117.
- <sup>436</sup> Hilsman, *op. cit.*, p. 484. Hammond, *op. cit.*, p. 55.
- <sup>437</sup> *USVR*, 3, IV. B. 5, pp. 13-4. Telegram, CIA Saigon to CIA 0265, Aug. 24, 1963, *FRUS*, 3, p. 618. *The Pentagon Papers: The Defense Department History of United States Decisionmaking on Vietnam* (Senator Gravel Edition), Boston: Beacon Press, 1971, vol. 2, p. 211. Hilsman, *op. cit.*, p. 484.
- <sup>438</sup> Mecklin, *op. cit.*, p. 194. Hammer, *op. cit.*, p. 221.
- <sup>439</sup> Telegram, Saigon to DOS 323, Aug. 24, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 8/24/63-8/31/63, State Cables," JFKL. [*NSF*, 4: 882] Beschloss, *op. cit.*, p. 653. Mecklin, *op. cit.*, p. 193.
- <sup>440</sup> Mecklin, *op. cit.*, p. 194. DOS Press and Radio News Release, Aug. 26, 1963, *AFP*, p. 865.
- <sup>441</sup> DOS Daily Staff Summary, Aug. 21, 1963, *FRUS*, 3, p. 599. Telegram, Saigon to DOS 308, Aug. 23, NSFC, 198, "Vietnam 8/21/63-8/23/63," JFKL. [*NSF*, 4: 823-4]
- <sup>442</sup> DOS Daily Staff Summary, Aug. 21, 1963, *FRUS*, 3, p. 599. Telegram, DOS to Saigon 228, Aug. 21, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/21/63-8/23/63," JFKL. [*NSFS*, 3: 4]
- <sup>443</sup> Telegram, Forrestal to Bundy CAP 63365, July 1, 1963, *FRUS*, 3, p. 432. Memorandum, Forrestal to President, July 3, 1963, *ibid.*, 3, p. 448.
- <sup>444</sup> Lodge, *op. cit.*, p. 206. Memorandum of Conversation at White House, July 4, 1963, *FRUS*, 3, p. 453. *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 13.
- <sup>445</sup> Mecklin, *op. cit.*, p. 190. Higgins, *op. cit.*, pp. 185-6. Thomas A. Lane, *America on Trial: The War for Vietnam*, New Rochelle, N.Y.: Arlington House, p. 130.
- <sup>446</sup> DOS Daily Staff Summary, Aug. 23, 1963, *FRUS*, 3, p. 610.
- <sup>447</sup> Telegram, Saigon to DOS 427, Sept. 6, 1963, NSFC, 199, "Vietnam, 9/1/63-9/10/63, State Cables, Part II," JFKL. [*NSF*, 5: 246] Telegram, Saigon to DOS 458, Sept. 10, 1963, *ibid.* [*NSF*, 5: 259-60]
- <sup>448</sup> Mecklin, *op. cit.*, p. 184. Telegram, Saigon to DOS 949, Nov. 6, 1963, *FRUS*, 4, p. 576.

- <sup>449</sup> McNamara, *op. cit.*, p. 56. Colby, *op. cit.*, p. 134. Higgins, *op. cit.*, p. 205.
- <sup>450</sup> Sorensen, *op. cit.*, p. 659. Winters, *op. cit.*, p. 38. Mecklin, *op. cit.*, p. 190.
- <sup>451</sup> Phillips, Santoli, *op. cit.*, p. 86. Halberstam, *op. cit.*, p. 262. Blair, *op. cit.*, p. 36. Higgins, *op. cit.*, p. 207.
- <sup>452</sup> Telegram, Saigon to DOS 340, Aug. 26, 1963, *FRUS*, 3, p. 645. Lodge, *op. cit.*, p. 207.
- <sup>453</sup> Telegram, Saigon to DOS 371, Aug. 29, 1963, *FRUS*, 4, pp. 18-9. Lodge, OH, pp. 10-1, JFKL.
- <sup>454</sup> Mecklin, *op. cit.*, p. 228. Schlesinger, *op. cit.*, p. 995. Hilsman, *op. cit.*, p. 515.
- <sup>455</sup> Telegram, Saigon to DOS 417, Sept. 5, 1963, *FRUS*, 4, p. 110. Telegram, Saigon to DOS 505, Sept. 13, 1963, *ibid.*, 4, p. 203.
- <sup>456</sup> Mecklin, *op. cit.*, p. 229. Kattenburg, *op. cit.*, p. 117.
- <sup>457</sup> Memorandum of Conference at White House, Sept. 6, 1963, *FRUS*, 4, p. 117. Memorandum of Conversation at White House, Sept. 11, 1963, *ibid.*, 4, p. 185.
- <sup>458</sup> Memorandum of Meeting at White House, Aug. 26, 1963, *ibid.*, 3, p. 639. Memorandum of Meeting at DOS, Aug. 31, 1963, *USVR*, 12, p. 541. Telegram, DOS to Saigon 317, Sept. 3, 1963, *FRUS*, 4, p. 105.
- <sup>459</sup> Telegram, DOS to Saigon 317, Sept. 3, 1963, *ibid.*, 4, p. 105. Telegram, DOS to Saigon 295, Aug. 31, 1963, *ibid.*, 4, p. 79.
- <sup>460</sup> Telegram, DOS to Saigon 294, Aug. 31, 1963, *ibid.*, 4, p. 77. Telegram, DOS to Saigon 317, Sept. 3, 1963, *ibid.*, 4, pp. 105-6.
- <sup>461</sup> CIA Paper, "A Program for Vietnam," Sept. 4, 1963, *ibid.*, 4, p. 202.
- <sup>462</sup> Telegram, DOS to Saigon 294, Aug. 31, 1963, *ibid.*, 4, p. 77. Report, "Reconciliation with Rehabilitated GVN," Sept. 16, 1963, NSFC, 200, "Vietnam: Action Plans, 9/16/63-9/21/63," JFKL. [NSF, 5: 372] Telegram, DOS to Saigon 324, Sept. 4, 1963, *FRUS*, 4, p. 109.
- <sup>463</sup> Memorandum of Conversation at White House, Sept. 11, 1963, *ibid.*, 4, p. 190. Action Plan Paper, "Checklist of Actions for GVN to Ensure Popular Support," Sept. 16, 1963, NSFC, 200, "Vietnam: Action Plans, 9/16/63-9/21/63," JFKL. [NSF, 5: 387]
- <sup>464</sup> Memorandum of Conversation at DOS, Aug. 31, 1963, *FRUS*, 4, p. 72. Memorandum of Conversation at White House, Sept. 11, 1963, *ibid.*, 4, p. 186.
- <sup>465</sup> Action Plan Paper, "Evacuation as a Pressure Weapon," Sept. 16, 1963, NSFC, 200, "Vietnam: Action Plans, 9/16/63-9/21/63," JFKL. [NSF, 5: 420-1] Telegram, DOS to Saigon 391, Sept. 12, 1963, *FRUS*, 4, p. 195.
- <sup>466</sup> Telegram, DOS to Saigon 294, Aug. 31, 1963, *ibid.*, 4, p. 76. Draft Telegram, DOS to Saigon, Sept. 2, 1963, *ibid.*, 4, pp. 96-7. Telegram, DOS to Saigon 317, Sept. 3, 1963, *ibid.*, 4, p. 105.
- <sup>467</sup> Draft Telegram, DOS to Saigon, Sept. 12, 1963, *ibid.*, 4, p. 197. Telegram, DOS to Saigon 317, Sept. 3, 1963, *ibid.*, 4, pp. 105.
- <sup>468</sup> Memorandum of Conversation at White House, Sept. 10, 1963, *ibid.*, 4, p. 165.
- <sup>469</sup> ハルバスタム, 前掲, p. 176. Halberstam, *op. cit.*, p. 262. CIA Information Report, Aug. 23, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 8/21/63-8/23/63," JFKL. [NSF, 4: 835]
- <sup>470</sup> Telegram, SSO DIA to White House, Aug. 23, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/21/63-8/23/63," *ibid.* [NSFS, 3: 54] ハルバスタム, 前掲, p. 183.

<sup>471</sup> Telegram, Saigon to DOS, Aug. 26, *FRUS*, 3, p. 650n. DOS Daily Staff Summary, Aug. 21, 1963, *ibid.*, 3, p. 598. Memorandum of Conversation at White House, Sept. 10, 1963, *ibid.*, 4, p. 163.

<sup>472</sup> Taylor, *op. cit.*, p. 295, ch. 23.

<sup>473</sup> Action Plan Paper, "Pressure Plan -- Concept," "Pressure Plan -- Phase 1," "Pressure Plan -- Phase 2," "Pressure Plan -- Phase 3," "Pressure Plan -- Phase 4," Sept. 16, 1963, NSFC, 200, "Vietnam: Action Plans, 9/16/63-9/21/63," JFKL. [*NSF*, 5: 389-408] Gibbons, *op. cit.*, 2, pp. 177-80.

<sup>474</sup> Memorandum of Conversation at White House, Sept. 11, 1963, *FRUS*, 4, pp. 188-9. Memorandum of Conference at White House, Sept. 11, 1963, *ibid.*, 4, p. 190.

<sup>475</sup> Telegram, Saigon to DOS 412, Sept. 4, 1963, *ibid.*, 4, p. 107. Telegram, CIA Saigon to Forrestal IN 13692, Sept. 6, 1963, NSFC, 199, "Vietnam, 9/1/63-9/10/63, Memos and Misc.," JFKL. [*NSF*, 5: 165] Memorandum of Conversation at White House, Sept. 11, 1963, *FRUS*, 4, p. 186. Memorandum, Mecklin to Murrow, Sept. 10, 1963, *ibid.*, 4, p. 152.

<sup>476</sup> Memorandum of Conference at White House, Aug. 29, 1963, *ibid.*, 4, p. 30. Memorandum of Conversation at DOS, Aug. 31, 1963, *ibid.*, 4, p. 72.

<sup>477</sup> Memorandum of Conference at White House, Aug. 27, 1963, *ibid.*, 3, p. 665. Memorandum of Conference at White House, Sept. 6, 1963, *ibid.*, 4, p. 120. Memorandum of Discussion, Sept. 6, 1963, *ibid.*, 4, p. 121.

<sup>478</sup> Gilpatric, OH, p. 18, JFKL. Nolting, *op. cit.*, p. 128. Halberstam, *op. cit.*, p. 268.

<sup>479</sup> McNamara, *op. cit.*, p. 70. Memorandum of Conversation at White House, Sept. 11, 1963, *FRUS*, 4, p. 185. Memorandum of Meeting at White House, Sept. 12, 1963, *ibid.*, 4, p. 200. U.S. Senate Committee on Foreign Relations, *op. cit.*, p. 7.

<sup>480</sup> Address by Manning, Aug. 27, 1963, *DSB*, Sept. 23, 1963, p. 459. "Extract from Memorandum of Conversation with Diem," n.d. [Oct. 1963], NSFC, 200, "Vietnam, 9/22/63-10/5/63, Memos and Misc.," JFKL. [*NSF*, 5: 604]

<sup>481</sup> Phillips, Santoli, *op. cit.*, p. 86. Nolting, *op. cit.*, p. 139. Nolting, Thompson, *op. cit.*, p. 230. 高松, 前掲, p. 481.

<sup>482</sup> Action Plan Paper, "Pressure Plan -- Phase 2," Sept. 16, 1963, NSFC, 200, "Vietnam: Action Plans, 9/16/63-9/21/63," JFKL. [*NSF*, 5: 400] Telegram, Harkins to Taylor MAC 1566, Aug. 29, 1963, *FRUS*, 4, p. 24.

<sup>483</sup> Report, "South Vietnam: An Action Plan," Sept. 16, 1963, NSFC, 200, "Vietnam: Action Plans, 9/16/63-9/21/63," JFKL. [*NSF*, 5: 382].

<sup>484</sup> *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 29. Memorandum of Conversation at White House, Sept. 11, 1963, *FRUS*, 4, p. 187. Sorensen, *op. cit.*, p. 660.

<sup>485</sup> DOS American Opinion Summary, Sept. 10, 1963, NSFC, 200, "Vietnam: 9/18/63-9/21/63, Memos and Misc.," JFKL. [*NSF*, 5: 481-2]

<sup>486</sup> Gibbons, *op. cit.*, 2, pp. 180-1. Geoffrey Warner, "The United States and the Fall of Diem Part II: The Death of Diem," *Australian Outlook*, vol. 29, no. 1 (March 1975), p. 8. Hammer, *op. cit.*, p. 212.

<sup>487</sup> *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 30. Telegram, Saigon to DOS 536, Sept. 14, 1963, *FRUS*, 4, p. 255.

<sup>488</sup> Halberstam, *op. cit.*, pp. 282-3. Winters, *op. cit.*, p. 82.

<sup>489</sup> "Extract from Memorandum of Conversation with Diem," n.d. [Oct. 1963], NSFC, 200, "Vietnam, 9/22/63-10/5/63, Memos and Misc.," JFKL. [*NSF*, 5: 604] McNamara, *op. cit.*, pp. 75-7.

- <sup>490</sup> Taylor, *op. cit.*, p. 299. Schlesinger, *op. cit.*, p. 996. *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 36.
- <sup>491</sup> VOA Broadcast in Saigon, Aug. 26, 1963, *FRUS*, 3, p. 636. Mecklin, *op. cit.*, p. 194. Telegram, Saigon to DOS, Aug. 26, 1963, *FRUS*, 3, p. 637. Hilsman, *op. cit.*, p. 490.
- <sup>492</sup> Memorandum of Conference at White House, Aug. 29, 1963, *FRUS*, 4, p. 28. Memorandum, Forrestal to President, Aug. 26, 1963, *ibid.*, 3, p. 649. *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 16.
- <sup>493</sup> Telegram, DOS to Saigon 248, Aug. 26, 1963, *ibid.*, 3, p. 637n.
- <sup>494</sup> Memorandum, Forrestal to President, Aug. 26, 1963, *ibid.*, 3, p. 649. Memorandum of Telephone Conversation, Manning & President, Sept. 3, 1963, *ibid.*, 4, p. 104.
- <sup>495</sup> Memorandum of Conversation at White House, Sept. 10, 1963, *ibid.*, 4, p. 165. Mecklin, *op. cit.*, p. 164.
- <sup>496</sup> Memorandum of Meeting at DOS, Aug. 31, 1963, *USVR*, 12, p. 543.
- <sup>497</sup> CIA Information Report, TDCS-3/557,818, Aug. 28, 1963, *DDRS*, 1977-93E Mecklin, *op. cit.*, p. 203.
- <sup>498</sup> Memorandum of Conversation at DOS, Aug. 31, 1963, *FRUS*, 4, pp. 70, 74. Telegram, Saigon to DOS, Aug. 26, 1963, *ibid.*, 3, p. 650n.
- <sup>499</sup> John M. Newman, *JFK and Vietnam: Deception, Intrigue, and the Struggle for Power*, New York: Warner Books, 1992, pp. 262-3. Bouscaren, *op. cit.*, pp. 72-3. Higgins, *op. cit.*, p. 168. Joseph M. Siracusa, *Presidential Profiles: The Kennedy Years*, New York: Facts On File, 2004, p. 526.
- <sup>500</sup> Transcript of Broadcast with Cronkite Inaugurating CBS News Program, Sept. 2, 1963, *PPP*, p. 652. Gibbons, *op. cit.*, 2, p. 163.
- <sup>501</sup> Telegram, Bundy to President CAP 63475, Sept. 1, 1963, *FRUS*, 4, p. 82. Transcript of Broadcast on NBC's "Huntley-Brinkley Report," Sept. 9, 1963, *PPP*, p. 659.
- <sup>502</sup> Lane, *op. cit.*, pp. 127-8. Brown, *op. cit.*, p. 208. Memorandum of Conversation at White House, Sept. 10, 1963, *FRUS*, 4, p. 163.
- <sup>503</sup> ABC Interview with Bell, Sept. 8, 1963, NSFC, 199, "Vietnam, 9/1/63-9/10/63, Memos and Misc.," JFKL. [*NSF*, 5: 184] Telegram, Saigon to DOS 455, Sept. 9, 1963, *FRUS*, 4, p. 141.
- <sup>504</sup> Action Plan Paper, "Nhu-Diem Tactics and Moves and U.S. Responses in Connection with U.S. Pressure Plan for Nhu Removal," Sept. 16, 1963, NSFC, 200, "Action Plans, 9/16/63-9/21/63," JFKL. [*NSF*, 5: 415-6] Telegram, Saigon to DOS 447, Sept. 9, 1963, *FRUS*, 4, p. 138.
- <sup>505</sup> Telegram, DOS to Saigon 391, Sept. 12, 1963, *ibid.*, 4, p. 196. Memorandum of Conversation at DOS, Aug. 31, 1963, *ibid.*, 4, p. 73.
- <sup>506</sup> Mecklin, *op. cit.*, p. 209. O'Donnell & Powers, *op. cit.*, p. 443.
- <sup>507</sup> Report, "Reconciliation with Rehabilitated GVN," Sept. 16, 1963, NSFC, 200, "Action Plans, 9/16/63-9/21/63," JFKL. [*NSF*, 5: 369]
- <sup>508</sup> Memorandum by McCone, Sept. 13, 1963, *FRUS*, 4, p. 206.
- <sup>509</sup> Memorandum of Conversation at White House, Sept. 11, 1963, *ibid.*, 4, p. 186. Memorandum of Conference at White House, Sept. 11, 1963, *ibid.*, 4, p. 191.
- <sup>510</sup> Action Plan Paper, "Implication of Total or Partial Cessation of US Military Aid Upon The Military Campaign in The Republic of Vietnam," Sept. 11, 1963, NSFC, 200, "Action Plans, 9/16/63-9/21/63," JFKL. [*NSF*, 5: 431-3] Telegram, Saigon to DOS 447, Sept. 9, 1963, *FRUS*, 4, p. 138.

- <sup>511</sup> Memorandum by McCone, Sept. 13, 1963, *ibid.*, 4, p. 206. Memorandum of Conversation at White House, Sept. 11, 1963, *ibid.*, 4, p. 186. Transcript of Broadcast on NBC's "Huntley-Brinkley Report," Sept. 9, 1963, *PPP*, p. 659.
- <sup>512</sup> DOS American Opinion Summary, Sept. 10, 1963, NSFC, 200, "Vietnam: 9/18/63-9/21/63, Memos and Misc.," JFKL. [*NSF*, 5: 483] DOS American Opinion Summary, Sept. 18, 1963, *ibid.* [*NSF*, 5: 492] DOS American Opinion Summary, Oct. 9, 1963, NSFC, 200, "Vietnam: 10/6/63-10/14/63, Memos and Misc.," JFKL. [*NSF*, 5: 773-4] Telegram, Saigon to DOS 478, Sept. 11, 1963, *FRUS*, 4, p. 173.
- <sup>513</sup> Rusk, *op. cit.*, p. 437. Memorandum by McCone, Sept. 13, 1963, *FRUS*, 4, p. 207. Telegram, DOS to Saigon 279, Aug. 29, 1963, *ibid.*, 4, p. 34.
- <sup>514</sup> "Report to the Executive Committee," Oct. 3, 1963, NSFC, 200, "9/22/63-10/5/63, Memos and Misc.," JFKL. [*NSF*, 5: 623] Telegram, Saigon to DOS 478, Sept. 11, 1963, *FRUS*, 4, p. 174. Kattenburg, *op. cit.*, p. 117.
- <sup>515</sup> DeGroot, *op. cit.*, p. 87. Kutler, *op. cit.*, p. 144. Hilsman, *op. cit.*, p. 500. Colby, *op. cit.*, p. 148.
- <sup>516</sup> Mecklin, *op. cit.*, p. 218. Cooper, *op. cit.*, p. 217. Hatcher, *op. cit.*, p. 144. Rust, *op. cit.*, p. 143.
- <sup>517</sup> "Report to the Executive Committee," Oct. 3, 1963, NSFC, 200, "Vietnam, 9/22/63-10/5/63, Memos and Misc.," JFKL. [*NSF*, 5: 624]
- <sup>518</sup> Schlesinger, *op. cit.*, p. 996. *USVR*, 3, IV. B. 5, p. vi.
- <sup>519</sup> Kern, et al., *op. cit.*, p. 183. Mecklin, *op. cit.*, p. 229.
- <sup>520</sup> Kaiser, *op. cit.*, p. 253. *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 28. Halberstam, *op. cit.*, p. 283.
- <sup>521</sup> Winters, *op. cit.*, p. 96. Hilsman, *op. cit.*, p. 500.
- <sup>522</sup> Memorandum, Mecklin to Murrow, Sept. 10, 1963, *FRUS*, 4, p. 152.
- <sup>523</sup> "Report to Executive Committee," Oct. 3, 1963, NSFC, 200, "Vietnam, 9/22/63-10/5/63, Memos and Misc.," JFKL. [*NSF*, 5: 621-2] Telegram, DOS to Saigon 570, Oct. 12, 1963, NSFC, 200, "Vietnam: 10/6/63-10/14/63, State Cables," JFKL. [*NSF*, 5: 840]
- <sup>524</sup> *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 38. DOS Statement, Oct. 22, 1963, *DSB*, Nov. 11, 1963, p. 736.
- <sup>525</sup> Memorandum of Conversation at White House, Sept. 11, 1963, *FRUS*, 4, p. 188. Memorandum of Conference at White House, Sept. 11, 1963, *ibid.*, 4, p. 191.
- <sup>526</sup> Memorandum of Conversation at White House, Sept. 10, 1963, *ibid.*, 4, p. 164. Telegram, DOS to Saigon 391, Sept. 12, 1963, *ibid.*, 4, p. 195. ハルバスタム, 前掲, pp. 196-7, 218. Cooper, *op. cit.*, p. 216.
- <sup>527</sup> Robert K. Brigham, *Guerrilla Diplomacy: The NLF's Foreign Relations and the Viet Nam War*, Ithaca, N.Y.: Cornell Univ. Press, 1999 (orig., 1998), p. 28.
- <sup>528</sup> 小沼, 前掲, p. 263. ヤープ・ファン・ヒネケン (山田侑平・鈴木佳明訳) 『インドシナ現代史』 連合出版, 1983, 上, pp. 145-54.
- <sup>529</sup> Message, Pope Paul VI to Vietnam, NSFC, 199, "Vietnam, 9/1/63-9/10/63, Memos and Misc.," JFKL. [*NSF*, 5: 176, 180] Maier, *op. cit.*, p. 389.
- <sup>530</sup> President's Intelligence Checklist, Aug. 21, 1963, *FRUS*, 3, p. 598. Memorandum, Carroll to McNamara S-18,548/P-3, Aug. 21, 1963, *ibid.*, 3, p. 600.
- <sup>531</sup> Memorandum, Murrow to President, Aug. 28, 1963, *ibid.*, 3, p. 672. Memorandum of Conversation at DOS, Aug. 31, 1963, *ibid.*, 4, p. 73.
- <sup>532</sup> Telegram, DOS to All Diplomatic Posts, USUN Circular 266, Aug. 25, 1963, NSFC, 198,

"Vietnam, General 8/24/63-8/31/63, State Cables," JFKL. [NSFS, 3: 81] Orrin Schwab, *Defending the Free World: John F. Kennedy, Lyndon Johnson, and the Vietnam War, 1961-1965*, Westport, Conn.: Praeger, 1998, p. 60.

<sup>533</sup> Telegram, DOS to Saigon 295, Aug. 31, 1963, *FRUS*, 4, p. 79. Memorandum of Conversation at DOS, Aug. 31, 1963, *ibid.*, 4, p. 73.

<sup>534</sup> Telegram, CIA Saigon to Forrestal IN 13692, Sept. 6, 1963, NSFC, 199, "Vietnam, 9/1/63-9/10/63, Memos and Misc.," JFKL. [NSF, 5: 165] Memorandum, Neumann to Bundy, Sept. 15, 1963, NSFC, 199, "Vietnam, 9/11/63-9/17/63, Memos and Misc., Part II," *ibid.* [NSF, 5: 315]

<sup>535</sup> Letter, U Thant to Diem, Aug. 31, 1963, *AFP*, pp. 869-70. Letter, Diem to U Thant, Sept. 5, 1963, *ibid.*, pp. 871-2.

<sup>536</sup> Telegram, DOS to Saigon 331, Sept. 5, 1963, *FRUS*, 4, p. 132n. Brigham, *op. cit.*, p. 29.

<sup>537</sup> Kaiser, *op. cit.*, p. 226. Perlo & Goshal, *op. cit.*, p. 34. Telegram, Saigon to DOS 256, Aug. 19, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/1/63-8/20/63," JFKL. [NSFS, 2: 1028]

<sup>538</sup> *AFP*, p. 875. Higgins, *op. cit.*, p. 63.

<sup>539</sup> Hammer, *op. cit.*, pp. 252-3.

<sup>540</sup> Nolting, *op. cit.*, p. 148n. Higgins, *op. cit.*, p. 63. Bouscaren, *op. cit.*, p. 109.

<sup>541</sup> Memorandum of Conversation at DOS, Aug. 31, 1963, *FRUS*, 4, p. 72.

<sup>542</sup> Telegram, JCS to COMUSMACV 2329, Aug. 31, 1963, *DDRS*, R-261E. DOS American Opinion Summary, Aug. 27, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 8/24/63-8/31/63, Memos & Miscellaneous," JFKL. [NSF, 4: 853]

<sup>543</sup> Schwab, *op. cit.*, p. 58. Remarks by Bell on NBS's "Today Show," Aug. 27, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 8/24/63-8/31/63, Memos & Miscellaneous," JFKL. [NSF, 4: 851]

<sup>544</sup> DOS American Opinion Summary, Sept. 18, 1963, NSFC, 200, "Vietnam: 9/18/63-9/21/63, Memos & Misc.," JFKL. [NSF, 5: 492-3] Kattenburg, *op. cit.*, p. 120.

<sup>545</sup> DOS American Opinion Summary, Aug. 22, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 8/21/63-8/23/63," JFKL. [NSF, 4: 816-7] DOS American Opinion Summary, Aug. 27, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 8/24/63-8/31/63, Memos & Miscellaneous," JFKL. [NSF, 4: 853-5]

<sup>546</sup> Logvall, *op. cit.* (1999), p. 55.

<sup>547</sup> Memorandum of Conference at White House, Sept. 6, 1963, *FRUS*, 4, p. 119. Memorandum by Forrestal, Sept. 11, 1963, *ibid.*, 4, p. 182. Telegram, Saigon to DOS 364, Aug. 28, 1963, *ibid.*, 3, pp. 670-1.

<sup>548</sup> Telegram, DOS to Saigon 335, Sept. 5, 1963, *ibid.*, 4, p. 113.

<sup>549</sup> Telegram, Saigon to DOS 340, Aug. 26, 1963, *ibid.*, 3, p. 644. Telegram, Saigon to DOS 346, Aug. 27, 1963, *ibid.*, 3, p. 652. Telegram, DOS to Saigon 348, Sept. 6, 1963, *ibid.*, 4, p. 128.

<sup>550</sup> Paper, *op. cit.*, p. 275. Sean J. Savage, *JFK, LBJ, and the Democratic Party*, Albany: State Univ. of New York Press, 2004, p. 117.

<sup>551</sup> H・サイデイ (鷺村達也・佐藤亮一訳)『悲劇の大統領〈大統領ケネディ伝〉』荒地出版社, 1964, p. 306. Robert David Johnson, "The Origins of Dissent: Senate Liberals and Vietnam, 1959-1966," *Pacific Historical Review*, vol. 45, no. 2 (May 1996), p. 265. Robert David Johnson, *Congress and the Cold War*, New York: Cambridge Univ. Press, 2006, p. 95.

<sup>552</sup> Telegram, DOS to Saigon 335, Sept. 5, 1963, *FRUS*, 4, p. 113. Hilsman, *op. cit.*, p. 505.

- <sup>553</sup> Gibbons, *op. cit.*, 2, pp. 155, 191, 194. Hilsman, *op. cit.*, p. 505.
- <sup>554</sup> Report by Krulak, Sept. 10, 1963, *FRUS*, 4, p. 160. *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 28. ABC Interview with Bell, Sept. 8, 1963, NSFC, 199, "Vietnam, 9/1/63-9/10/63, Memos and Misc.," JFKL. [*NSF*, 5: 185]
- <sup>555</sup> Telegram, Saigon to DOS 434, Sept. 7, 1963, *FRUS*, 4, p. 131. "Extract from Memorandum of Conversation with Diem," n.d. [Oct. 1963], NSFC, 200, "Vietnam, 9/22/63-10/5/63, Memos and Misc.," JFKL. [*NSF*, 5: 605]
- <sup>556</sup> Memorandum of Conversation at White House, Sept. 11, 1963, *FRUS*, 4, p. 192. Memorandum of Conversation at DOS, Sept. 10, 1963, *ibid.*, 4, p. 170. Memorandum of Conversation at White House, Sept. 10, 1963, *ibid.*, 4, p. 167.
- <sup>557</sup> Revised Introductory Statement by Church, Sept. 12, 1963, NSFC, 199, "Vietnam, 9/11/63-9/17/63, Memos and Misc., Part I," JFKL. [*NSF*, 5: 306] Telegram, DOS to Saigon 392, Sept. 12, 1963, *FRUS*, 4, p. 168n.
- <sup>558</sup> President's News Conference, Sept. 12, 1963, *PPP*, p. 676. Telegram, Saigon to DOS 507, Sept. 14, 1963, *FRUS*, 4, p. 208.
- <sup>559</sup> Memorandum of Telephone Conversation, Hilsman & Church, Sept. 10, 1963, *op. cit.*, 4, p. 167. Gibbons, *op. cit.*, 2, p. 168.
- <sup>560</sup> Taylor, *op. cit.*, p. 296. *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 28.
- <sup>561</sup> Telegram, Saigon to DOS 959, Nov. 7, 1963, NSFC, 202, "Vietnam 11/6-15/63, State Cables," JFKL [*NSF*, 6: 485] ヘドリック・スミス「劇的な分岐点」ニューヨーク・タイムス編（杉辺利英訳）『ベトナム秘密報告』サイマル出版会, 1972, 上, p. 200.
- <sup>562</sup> Telegram, Saigon to DOS 900, Nov. 3, 1963, *FRUS*, 4, p. 546.
- <sup>563</sup> Telegram, Saigon to DOS 854, Nov. 1, 1963, *ibid.*, 4, p. 515.
- <sup>564</sup> Nolting, *op. cit.*, p. 130. DOS American Opinion Summary, Oct. 17, 1963, NSFC, 200, "Vietnam, 10/15/63-10/28/63, Memos and Misc.," JFKL. [*NSF*, 5: 895]
- <sup>565</sup> Cooper, *op. cit.*, p. 217. Mecklin, *op. cit.*, pp. 199, 218.
- <sup>566</sup> Telegram, Saigon to DOS 900, Nov. 3, 1963, *FRUS*, 4, pp. 548-9. Telegram, Saigon to DOS 959, Nov. 7, 1963, NSFC, 202, "Vietnam, 11/6-15/63, State Cables," JFKL. [*NSF*, 6: 470]
- <sup>567</sup> Hammer, *op. cit.*, p. 214. Mecklin, *op. cit.*, p. 230.
- <sup>568</sup> Lodge, OH, p. 9, JFKL. Komer, OH, p. 56, *ibid.* Schlesinger, *op. cit.*, p. 996.
- <sup>569</sup> Lodge, OH, p. 11, JFKL. U.S. Senate Committee on Foreign Relations, *op. cit.*, p. 21.
- <sup>570</sup> Telegram, Saigon to DOS 841, Nov. 1, 1963, *FRUS*, 4, p. 517.
- <sup>571</sup> *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 40. Telegram, Saigon to DOS 805, Oct. 28, 1963, *FRUS*, 4, p. 445.
- <sup>572</sup> Telegram, Saigon to DOS 854, Nov. 1, 1963, *ibid.*, 4, p. 515. Telegram, Saigon to DOS 841, Nov. 1, 1963, *ibid.*, 4, p. 517.
- <sup>573</sup> Hilsman, *op. cit.*, p. 500. Cooper, *op. cit.*, p. 217. Memorandum of Discussion at Special Meeting on Vietnam, Honolulu, Nov. 20, 1963, *FRUS*, 4, pp. 614-5.
- <sup>574</sup> Tran Van Don, *op. cit.*, p. 150.
- <sup>575</sup> Hammer, *op. cit.*, p. 214. Mecklin, *op. cit.*, p. 238. OCI Memorandum 2370/63, Oct. 19, 1963, NSFC, 200, "Vietnam, 10/6/63-10/16/63, Memos and Misc.," JFKL. [*NSF*, 5: 882]

- <sup>576</sup> Hilsman, *op. cit.*, p. 500. コルビー, 前掲, p. 187.
- <sup>577</sup> CIA Information Report TDCS DB-3/657,149, Oct. 9, 1963, NSFC, 200, "Vietnam, Vol. XIX, 6-14 October 1963, CIA Cables," JFKL. [*NSF*, 5: 858] Hilsman, *op. cit.*, pp. 485-6.
- <sup>578</sup> Telegram, Saigon to DOS 647, Oct. 7, 1963, NSFC, 200, "Vietnam: 10/6/63-10/14/63, State Cables," JFKL. [*NSF*, 5: 785] OCI Memorandum 2370/63, Oct. 19, 1963, NSFC, 200, "Vietnam, 10/15/63-10/28/63, Memos and Misc," JFKL. [*NSF*, 5: 883]
- <sup>579</sup> Telegram, Saigon to DOS 726, Oct. 17, 1963, NSFC, 201, "Vietnam: 10/15/63-10/28/63, State Cables," JFKL. [*NSF*, 6: 11] OCI Memorandum 2370/63, Oct. 19, 1963, NSFC, 200, "Vietnam, 10/15/63-10/28/63, Memos and Misc," JFKL. [*NSF*, 5: 883]. Schlesinger, *op. cit.*, p. 996.
- <sup>580</sup> *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 37. Memorandum, McNamara & Taylor to President, Oct. 2, 1963, NSFC, 200, "Vietnam: 9/22/63-10/5/63, McNamara-Taylor Report," JFKL. [*NSF*, 5: 756-7] Telegram, Saigon to DOS 632, Oct. 4, 1963, NSFC, 200, "Vietnam, 9/22/63-10/5/63, State Cables," JFKL. [*NSF*, 5: 677]
- <sup>581</sup> Telegram, Saigon to DOS 837, Oct. 31, 1963, NSFC, 201, "Vietnam, 10/29/63-10/31/63, State and Defense Cabels," JFKL. [*NSF*, 6: 90]
- <sup>582</sup> Telegram, Saigon to DOS 949, Nov. 6, 1963, *FRUS*, 4, p. 576.
- <sup>583</sup> OCI Memorandum 2370/63, Oct. 19, 1963, NSFC, 200, "Vietnam, 10/15/63-10/28/63, Memos and Misc," JFKL. [*NSF*, 5: 881]
- <sup>584</sup> Harriman, OH, p. 106, JFKL.
- <sup>585</sup> Catton, *op. cit.*, p. 209. OCI Memorandum 2370/63, Oct. 19, 1963, NSFC, 200, "Vietnam, 10/15/63-10/28/63, Memos and Misc," JFKL. [*NSF*, 5: 886]
- <sup>586</sup> Memorandum, Kattenburg to Hilsman, July 24, 1963, *FRUS*, 3, p. 527. Mecklin, *op. cit.*, p. 220.
- <sup>587</sup> Komer, OH, p. 56, JFKL. Sorensen, *op. cit.*, p. 659. McNamara, *op. cit.*, p. 261. Edward Geary Lansdale, *In the Midst of Wars: An American's Mission to Southeast Asia*, New York: Harper & Row, 1972, p. 374.
- <sup>588</sup> Donald W. Hamilton, *The Art of Insurgency: American Military Policy and the Failure of Strategy in Southeast Asia*, Westport, Conn.: Praeger, 1998, p. 130. Mecklin, *op. cit.*, p. 104.
- <sup>589</sup> ソレンセン, 前掲, p. 185.
- <sup>590</sup> 拙著『ダレス外交とインドシナ』同文館, 1988 を参照。
- <sup>591</sup> R. Kennedy in Guthman & Shulman, *op. cit.*, p. 405. Inaugural Address, Jan. 20, 1963, *Public Papers of the Presidents of the United States, John F. Kennedy, 1961*, USGPO, 1962, p. 1.
- <sup>592</sup> マックススウェル・テラー (入江通雅訳) 『ベトナム戦争と世界戦略』時事通信社, 1967, p. 42. アーサー・M・シュレジンガー (大前正臣訳) 『信頼の崩壊』読売新聞社, 1969, p. 215. Phillips, Santoli, *op. cit.*, p. 86. Edward G. Lansdale, "Viet Nam: Do We Understand Revolution?," *Foreign Affairs*, vol. 43, no. 1 (Oct. 1964), p. 79.
- <sup>593</sup> McNamara, *op. cit.*, p. 322. Gelb & Betts, *op. cit.*, p. 19. Edwin C. Hoyt, *Law & Force in American Foreign Policy*, Lanham, Md.: Univ. Press of America, 1985, p. 114. David Marr, "The Technological Imperative in US War Strategy in Vietnam," Mary Kaldor & Asbjørn Eide, eds., *The World Military Order: The Impact of Military Technology on the Third World*, London: Macmillan Press, 1979, p. 18.
- <sup>594</sup> Higgins, *op. cit.*, p. 182. Philip Zelikow, Earnest May & Timothy Naftali, gen. eds., *The Presidential Recordings -- Lyndon B. Johnson: The Kennedy Assassination and the Transfer of*

*Power, November 1963-January 1964*, vol. 1 (ed., Max Holland), New York: W. W. Norton, 2005, p. 374. Nguyen Cao Ky, *op. cit.*, p. 46.

<sup>595</sup> Telegram, Saigon to DOS 380, Aug. 30, 1963, NSFC, 198, "Vietnam 8/24/63-8/31/63, State Cables," JFKL. [*NSF*, 5: 53] Komer, *op. cit.*, p. 24.

<sup>596</sup> Rusk, OH, p. 53, JFKL. Winters, *op. cit.*, p. 92. テーラー, 前掲, p. 34.

<sup>597</sup> Commencement Address at American Univ., June 10, 1963, *PPP*, p. 462.

<sup>598</sup> Hilsman, *op. cit.*, pp. 511-2.

<sup>599</sup> Telegram, Saigon to DOS 949, Nov. 6, 1963, *FRUS*, 4, p. 578.

<sup>600</sup> Rusk, *op. cit.*, p. 437. Cooper, *op. cit.*, p. 119.

<sup>601</sup> Telegram, Phnom Penh to DOS 137, Aug. 24, 1963, NSFC, 198, "Vietnam, General 8/24/63-8/31/63, State Cables," JFKL. [*NSFS*, 3: 80]

<sup>602</sup> FitzSimons, *op. cit.*, p. 184. Post, *op. cit.*, 4, p. 198.

<sup>603</sup> Gelb & Betts, *op. cit.*, p. 12. George C. Herring, "'Peoples Quite Apart': Americans, South Vietnamese, and the War in Vietnam," *Diplomatic History*, vol. 14, no. 1 (Winter 1990), p. 2.

<sup>604</sup> Gelb & Betts, *op. cit.*, p. 12.

<sup>605</sup> George Donelson Moss, *Vietnam: An American Ordeal*, Englewood Cliffs, NJ.: Prentice-Hall, 1990, pp. 110-1. *USVR*, 3, IV. B. 5, p. 8.

<sup>606</sup> 藤原帰一「ナショナリズム・冷戦・開発——戦後東南アジアにおける国民国家の理念と制度」東京大学社会科学研究所(編)『20世紀システム4 開発主義』東京大学出版会, 1998, pp. 89-90.

<sup>607</sup> Gibbons, *op. cit.*, 2, p. 161. Dallek, *op. cit.*, p. 442. Heinz, OH, p. 48, JFKL.

<sup>608</sup> Nolting in Charlton & Moncrieff, *op. cit.*, p. 82. Lodge, OH, p. 14, JFKL. メアリー・マッカーシー(新庄哲夫訳)『ヴェトナム報告』河出書房, 1968, pp. 115-6.

<sup>609</sup> Transcript of Broadcast on NBC's "Huntley-Brinkley Report," Sept. 9, 1963, *PPP*, p. 659.

<sup>610</sup> Komer, *op. cit.*, p. 24. Komer, OH, p. 56, JFKL.

<sup>611</sup> Stephen E. Ambrose, *Rise to Globalism: American Foreign Policy, 1938-1980*, New York: Penguin Books, 2nd rev. ed., 1980 (orig., 1971), p. 281.

<sup>612</sup> Harris Wofford, *Of Kennedys and Kings: Making Sense of the Sixties*, Pittsburgh, Pa.: Univ. of Pittsburgh Press, 1992 (orig., 1980), p. 355. Reeves, *op. cit.*, p. 278. Stephen G. Rave, *The Most Dangerous Area in the World: John F. Kennedy Confronts Communist Revolution in Latin America*, Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, 1999, p. 193.

<sup>613</sup> Telegram, DOS to Saigon 746, Nov. 6, 1963, *FRUS*, 4, p. 580.

<sup>614</sup> Higgins, *op. cit.*, pp. 3-4. Jean Stein (ed., George Plimpton), *American Journey: The Times of Robert Kennedy*, New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1970, p. 207.

<sup>615</sup> Komer, *op. cit.*, p. 171.

<sup>616</sup> Draft Telegram, DOS to Saigon, Sept. 12, 1963, *FRUS*, 4, p. 196. Letter, Bowles to Bundy, July 19, 1963, *ibid.*, 3, p. 519.

<sup>617</sup> Bundy, Thompson, *op. cit.*, p. 263.

るアメリカ＝南ベトナム関係としてのベトナム戦争」および基盤研究（A）（1）「アメリカの戦争と世界秩序形成に関する総合的研究」による成果の一部である]